521-A43-5ウ
1200500745203
521
A43
ウ

始

521
A43
5

宮内省圖書寮

ヲ1529

昭和十七年

宮内省圖書寮

宮内省圖書寮

宮内省圖書寮

929
133

はしがき

昭和十六年夏のある日、臼井書房主人來訪、日本の古建築に關する一書出版の希望を述べられたので、豫て考へてゐた通り、其若干に就いて紀行と稍〻專門的記載とを兼ねたものを試みる事にした。

私は未だ日本全國の國寶建築を見てゐない。できるだけ努力をしてはゐるが、見て巡る樣な好機に惠まれず、從つて足跡は海內に普くない。さりとて法隆寺、藥師寺、唐招提寺、乃至鳳凰堂とか醍醐寺とか、これ等は餘りにも有名なので、此頃では殆んど大概の人は知つてゐると思ふし、限りある紙數の書物にこれ等まで全部盛ることは、我我にはむづかしい。

そこで此等は總て他書に讓り、この書物には餘り人が氣をつけないか、又は氣をつけても適當な案內記のないと思はれるものの中から、その幾つかを選んでみたが、書名をどうするかといふ段になつて困つて了つた。先づこれならばと考へられる名は簡單には書き現はせない、といつて名無しにしておく事もできず、いろいろ相談をした末、今の樣な名に決まつたのである。

併しながらこれでは少なくとも法隆寺以下、有名な古建築の八九割を登載しなければ相應しくないやうにも思はれるが、それらは前述のやうに、世上にいくらも本が出てゐるから、本書には私が考へて珍らしいと思はれるもののみを輯めてみた。その方が私にとっては意義があるやうに考へられる。從って今後も叢書としてこのやうな書物を何冊か刊行してゆきたい。三年や五年ですむとも思はれないが、追追實行してゆくこととする。そのあたりは讀者諸君の諒解を乞ふ次第である。

次に本書の内容に就いて大體の解説をしておく。本書には刀田山鶴林寺以下十一編を收めた。

一、鶴林寺は大寺で、平安建築二棟、室町建築四棟、併せて六棟の國寶があり、何れも珍らしいもの。

一、高野山にも國寶建築が六棟あるが、多くの人は靈寶館を一巡してから金堂と大塔と奥の院道の江戸時代五輪塔を見物し、弘法大師の廟に參詣して、夫で歸って來るのが普通らしい。古建築研究の氣運が擡頭してきた今日、たとひ外から一通り見物するにしても、いくらかでも役に立つであらうと思ふ。

一、嚴嶋神社社殿と攝社客神社社殿、及び末社豐國神社本殿(千疊閣千疊敷)とは、宮島へ渡った人は必ず參拜するであらうが、五重塔を近くから觀る事もなく、多寶塔へ一瞥を與へるどころか、さういふ種類の建築の存在さへも知らないで歸るであらう。併しこの二つの塔婆は、共に頗る注目に値する建築物である。

一、妙成寺は北陸に於ける日蓮宗の大本山で、伽藍は完備し從って其配置も明らかで、代表的の寺院といふべく、又明通寺には珍らしい意匠の本堂がある。

一、永保寺觀音堂と開山堂、定光寺本堂の三棟は、鎌倉末から室町へかけての唐様建築として、特に注意すべきである。

一、京都市所在の黒谷卽金戒光明寺の阿彌陀堂と鐘樓とは、桃山・江戸のものではあるが、仔細に觀察すると細部に面白いところがある。

一、本遠寺樓門獏の彫刻入蟇股は、傳へられた誤を正し、降棟の鴟尾は、其珍らしい使用場所の實例を擧げたもので、釋尊寺觀音堂廚子は、甚だ破損してはゐるが、珍らしい此種工藝品に就いての記載である。

一、牡丹に蝶に猫は、欄間　手挾　蟇股脚内等に用ひられたる彫刻に就いて類例を掲げ、大凡室町時代以降のものであると推定した。

一、最後の松・竹・梅は、此等三種の植物を建築彫刻として採用するに至ったのは、これも亦室町以降ならんとの説を掲げたのである。

本冊の内容は大體右の通り。次冊を刊行するものとして、扨て何を載せるか、いつ頃になるか、總て未定である。

昭和十七年十月一日

京都市に於いて　著者識

日本古建築行脚　目次

（細字は本文頁數　太字は圖版番號）

刀田山鶴林寺……一

本堂……六・一—二七

太子堂……一五・二八・二九

常行堂……一九・三〇・三一

護摩堂……二四・三二・三三

鐘楼……二六・三四・三五

行者堂……三〇・三六—三九

高野山の國寶建築……三三

藥師堂と位牌堂……四二・四〇—五一

不動堂本堂……五〇・五二—六七

金剛三昧院多寶塔……五六・六八—七四

金剛三昧院經藏……五九・七五—七八

金剛峯寺奥院經藏……六〇・七九—八八

嚴嶋神社五重塔と多寶塔……六六
五重塔……六九・八九—九二
多寶塔……八二・九三—九九
北陸の旅……九一
妙成寺……一〇三
本堂……一〇三・一〇〇—一〇三
祖師堂……一〇四・一〇四—一〇九
鎭守堂……一〇八・一一〇—一一五
祈願堂……一一〇・一一六・一一七
五重塔……一一〇・一一八—一二一
鐘樓……一一二・一二二
樓門……一一二・一二二
經堂……一一二・一二三
書院……一一三・一二四—一三二
通寺……一一五
本堂……一一五・一三三—一四六
三重塔……一二〇・一四七—一四九
岐阜愛知紀行……一二三
定光寺と永保寺……一四二
定光寺……一四二
本堂……一四二・一五〇—一五五
永保寺……一四五
觀音堂……一四五・一五六—一五九
開山堂……一五二・一六〇—一七二
禮堂……一五三
祠堂……一五六
あひの間……一五七
黑谷の鐘樓と阿彌陀堂……一六二
鐘樓……一六四・一七三—一七七
阿彌陀堂……一八〇・一七八—一八四
獏……一八八・一八五・一八六

目次

降棟の鴟尾……一九一・一八七・一八八
釋尊寺觀音堂廚子……一九五・一八九—一九三
牡丹・蝶・猫……二〇一・一九四—二〇六
建築彫刻に現はれたる「松・竹・梅」……二一二・二〇七—二三三

刀田山鶴林寺（一—三九）

播州加古川を距る遠からざる所に刀田山鶴林寺と呼ぶ大寺がある。聖德太子の御建立と傳へ、今でも寺運頗る隆盛で、幾多の建築物があるうち、太子堂・常行堂・本堂・鐘樓・護摩堂と、夫から正面の門を入って直ぐ左方、白く塗った藏の樣に見える經藏との間の奥の方に、離れて一見春日造と見ゆる神社建築、現今行者堂として知られてゐる小祠一棟と、合せて六棟が國寶である。このうち前二棟が平安後期、後四棟は室町時代の建築である。

私が初めて此寺へ參詣したのは、明治四十二年二月十七日、丁度今年から滿三十三年前の事で、輕便鐵道も電車も乘合自動車（これは近頃通はないが、俥切なら得られる樣がある）もなかった時分だから、汽車をおりると直に驛前から人力車を雇ひ、寺へ行って諸堂拜觀の間待たしておいて驛へ戻った。其後二三度はいつも日歸りをしたが、昭和十四年の終り頃、會ま常行堂の修理中を狙って見學に出かけて一泊したが、此時の氣持が忘れられなかったので、更に今年になってから一月と三月と二度共何れも一泊を乞うたのであった。三度共寒い時であったせゐか、夜は殊のほか靜かで落着く事ができたのと、朝早く太陽の光りが諸堂を照し、軒下の組物が非常に美しく、取わけ三重塔は、例ひ相輪に文句があるにしても、冬の朝の景色は現今恐らく他の塔婆の及ばない美を擅にしてゐるといっても、決して溢美ではないと思ってゐる。而も後の三回はいつも遠齋老翁とA君とは先づ

常連で、時にH君かO君が加はつたので、いつも樂しい一夜を過すことができた。

此三重塔は養老二年に武藏國の大目、身人部春則の創立ださうで、其事を板へ書いて初重東側出入口の傍に釘で打ちつけてあるが、夫から後は一足飛びに文政十年修覆とあり、間が一一一〇年ばかりぬけてゐる。文獻でも調べてみたらもつと判るだらうが、それをしないから依然として不明だが、文政の修理は確かで相輪は此時のものらしい。夫では古いのはどうしたかといふ事になるが、夫も調べてはゐないから知らない。此相輪には何か銘文があるといふ話をきいたが、上つて見た事は勿論ない。とにかく塔に比して割合に長大で、其割合はどの位になつてゐるか測つたこともないが、各重の落が割合に多くて頗る安定な外觀をもつてゐて塔の形を非常に引立ててゐる。

鶴林寺三重塔　（昭和十七年一月十九日）

各重の軒先には室町時代と推定し得る瓦も相當に殘つてゐる。各重逓減の度も相當に多く、相輪も長大で安定觀の充分な恰好の良い三重塔である。

私はある日ある案内記を讀んでゐたが、夫には「方三間の塔婆で唐様の桝組を用ゐ、胡粉彩色を施した江戸末期の建築である」とあつた。ところが桝組は唐様のは一つもなく全部和様であり、全體としては室町建築らしく、江戸末に修理をしたものと推定してゐるので、餘り相違があり過るから、次回行つた時よく見直したが、やはり私は江戸末とは思へなかつた。何故に此案内記の筆者が江戸末とみたかを想像してみると、初重周圍の椽は勿論、四方の扉・柱・長押・窓・各重隅木等何れも後補で、夫等と相輪と相俟つて、塔の價値を可なり低下せしめてゐる上に、初重の枓栱は何か變な色でぬりかへてあるから、形はいいが彩色に誤られ、旁新しい様に見えたのであらう。夫にしても純和様のものを何故に唐様とみたか、これはどうも疑問である。

此塔で强て唐様の部分を探し出せば化粧隅木である。これは文政十年の取替材で、古いのは一本も殘つてゐない。あんな時分に、そこいらの大工にやらせたのだから、唐様も和様もなく、あんなものを造つたと見るべきである。だからあれは問題外である。案内記には特に唐様の桝組を用ひとしてあるが、桝組なるものは肘木と枓とからできて居るので、枓は殆んど夫だけあつたのでは判らないが、肘木の方は和様と唐様とで著しい差があるから、一見直に判明するので、間違へようとしても間違ふことはできないのである。然らばどの様な差があるのかといふに、和様は肘木の下端と木口とがはつきりと別になつてゐるが（例へば三三）、唐様の方は其反對で、下端と木口とが判然せず、一つの滑かな曲線、即ち圓又は圓に近い弧線になつてゐるから、つまり下角がなく、角になるべき部分がまるいのである（例へば三三）。これさへ心得てゐれば間違等起る筈はない。

京都市に本名蓮花王院本堂、通稱三十三間堂と呼ぶ日本一細長い有名な建築がある。あれも純和様で枓組を見ても肘木は明らかに下端と木口との差がある。然るにある論文に唐様だとかいてあつたのは、上記の様に明白な事實を知らないで、想

像で唐様だと思ひ込んだものと見える。これは注意すべき事柄である。夫は夫として此塔で殊に珍らしいのは初重枓栱間の蓑束（例へば九六）で、其意匠は全く獨特である。つまり普通の蓑束の「蓑」の中央、其下端に添ひて

東側。北、菊花。中、葵葉。南、菊花。

南側。東、菊葉。中、楓・水。西、雲。

西側。南、浪。中、○。北、葉。

北側。西、○。中、○。東、○。

等が特に刻みだしてある。表中○印は普通のもので別に變ってはゐない。これでみると專ら東側と南側とを裝飾し、西側これに亞ぎ、北側はいはば平凡である。やはり最も眼につく方を飾り、順に落して行ったのかも知れない。

蓑束なるものは初めて鎌倉時代に出現したものの如くである。さうして鎌倉の間はそんな事はなかったが、室町に入ってから、稀に「蓑」の部に「雲に三鈷杵」・「瓜」等を刻んだりしだした（法隆寺北室院本堂の例）。夫と此とは幾分の差はあるが、着想としては同一である。

初重北側扉の内面に「文政十丁亥歳」「孟夏上旬寄進之」と二行に墨書があり、其他人名等を多く記してあるが、どうも大して名士でもない様だから全部省略する。初重内陣の天井がこはれてゐるので、上を向くと心柱が二重目下の大きな木の盤の上に立ててあるのがよく判る。

*　*　*　*　*　*

私は前記の様に最初の時は人力車で往復し、其後は歩いたが、片道十五分位で知れたものだ。バスがあった時分は夫を利用したが、近頃は高砂行の輕鐵へのる。寺の所在地なる今在家に停留場があり、門前に當ってゐて便利至極だが、時に加古川驛で三十分位待たされるから、荷物さへなくばそんな時は徒歩がいい。少し位の雨降でも道は濘る心配はない。

加古川から歩いて行くと裏から入った方が近いが、大概の人は正面へ廻る。正面即ち南方には三間一戸八脚門の櫺門が建ってゐる。小屋内を調べれば或は棟札位があるかも知れないし、又寺には文獻があるかも知れないが、私はどちらも見てゐないから、ただ實物から判斷するだけでは、三重塔を修理した文化か文政頃、即江戸末の頃に本堂の様式を取入れて再建したものらしい。或は上層は枓栱が室町位に見えなくもないから、充分調べたらもっと時代が上るかも知れないが、下層はさうは行かないと思はれる。下層二手先及び上層三手先の枓栱の間に唐様二枓を含んだ板蟇股をおいたのは、本堂のまねをしたことが明らかで、反って罪がなくてよろしい。此門の唐居敷が縦と横と入れ替へた様にしてあるのは、變ってはゐるが面白くない。恐らくこれも再建の際の仕事ではあるまいかと考へてゐる。

此八脚門を入るとつき當りに本堂があり、其右前なる東西方に南面して太子堂、左前即西南方に東面して常行堂があり、此兩堂は東西に相對の位置にありながら、前者の側面が後者の正面に向ってゐるのである。其常行堂の南隣に相竝んで洵にまづい大きな、あらずもがなの單層建築がある。さうして其隣りに三重塔があるから、この三建築は本堂に向って左側に建ってゐる。だからこの三つのうちの中央のもの、即拙劣な尨大な新藥師堂さへなかったら、境内の風致はさぞよからうと思はれる。三重塔の西南斜後ろに、これもまづい白漆喰塗の土藏の様な建築と、其西微南に東向きに行者堂があることは既記の通りである。

鐘樓と護摩堂（及び其間にある觀音堂）とは、何れも本堂の東方に位置してゐるから、南門を入っただけでは此等は一棟も見えない。

塔頭三院はずっと奥に竝んで建ってゐるが、中央の寶生院の門の留蓋瓦に四天王が用ひてあるのは珍らしい。鶴林寺は元は四天王寺といふ名であったからだといふ話をきいたので、成程さうかと思はれたが、四天王の立像は何れも中心を失って居り、見た所大して愉快な姿とは言へない。

境内の有様は大體がこの様である。寺の沿革に就いては案内記其他に讓り、次に國寶建築の略解を記すことにする。夫は年代順にせず、最重要なる建築である本堂から始める。

本　堂（一―二七）

桁行七間、梁間六間、單層入母屋造本瓦葺の大建築で、周圍に椽を廻らしてある。實に大きな堂堂たるものである。惜しい事に妻飾や屋根瓦に新しいところがあるので、どうも夫が眼障りになって、側面から見た時は幾分見劣りがするのは止むを得ない（一・二）。以前は東の方に樹が生えてゐて、東妻のまづい所は、眞東から見たのでは隱されてゐたから、いい様なよくない様な調子であったが（二）、今では樹をぬいて了った様だから、晴天の日は朝早くなら東から、夕刻なら西から、日が側面全體にあたって相當に美しい。さうなると大棟や降棟の獅子口と、妻の懸魚のいやな形が一層目立ってまづく見えるのは止むを得ない。

此堂には窓が一つもない。殆んど總て扉で（一―三）、板壁は僅に三所（二・三）、夫から闕迦棚の様なつけたしの所があって、そこにほんの申譯の様な無雙窓式の小窓がついてゐるが（三）、元よりこれは主屋ではない、どこ迄も附屬屋であるから、この窓は問題外にしておいてよろしいのである。殊に其外陣は正面七間、側面三間で、全部が兩開板扉になってゐるから、全部を開放すると內だか外だか判らない位に明るい。當麻寺の講堂にも窓はないが、あれは小さいから左程目立たない。併しこの位大きくなると誰でも氣がつく。この様に窓のない建築があるかと思ふと、唐招提寺金堂の様に扉と窓ばかりで壁のないものがあったり、いろいろで面白い。

此建築を研究してみる順序は、外から內、下から上として、最初に扉を調べてみるが、外側二十一所に何れも兩開棧唐戸が吊ってある。其回轉軸は下方は二重長押（半長押）に、上方は木製薬座の中に入れてある。二重長押のみならず總て長押は和様で、木製薬座はマア唐様（天竺様にもこの種のはあるが）と見てよろしい。木製薬座は長押より材料が大分に儉約で且つ賑だから、これは忽ち長押にとって代り、盛に使用されたものと思はれる。此等の薬座のうちには、例へば背面西より二つ目出入口上の様に、其型式他と異なり、曲線に大きな特徴をもったのがあったりしてゐる。次に扉だが之は横棧が吹寄せになってゐる棧唐戸には違ひないから、別段珍らしくもないが、棧や框には普通「切面」又は「唐戸面」がとってあるのに、これは鎬がつけてある。

私の知ってゐる範圍では、此種の棧唐戸は東大寺開山堂（良辨堂）內陣にあるのが最古の様である。あれは後によそから持って來たとすれば別だが、さうでないとすると、あすこにあるのだから、天竺様とみられなくもない。尤も上醍醐經藏の內外陣境及び內陣經室の扉はさうなってゐないから、鎬付のが天竺様とは限らないかも知れぬ。さうとすると此議論は駄目になるが、今は天竺様とみておく。長久寺本堂（奈良縣生駒郡北倭村。弘安六年）の扉、少し遠方へ飛ぶが淨土寺本堂（廣島縣尾道市尾崎町。嘉暦二年）及び永保寺開山堂祠堂（岐阜縣多治見町。文和元年。一七二）の夫は何れも鎬がつけてある。そして長久寺以下のは天竺様でも何でもない。まだ多くの例はあらうが、筆者は今宙で記憶してゐないので記載し得ないから此位にしておく。とにかく此等のは左程目立たないが、本堂の様にかう數多くあっては、誰人も氣がつく位に著しく見える。扉が全部古い儘であったらさぞよからうが、大部分が新材で補ってあるから、全部が新しい様に見えるのみならず、薬座も亦大部分が取替られてゐるといってもいい位で、下方のに

古いのは一つもなく、上方のは北側に四、西側に四、東側面に一所、而も其片方だけ古いのを見つけた有様であった。

科栱は和様二手先で、間には板蟇股の上に乘れる唐様二科が入れてある。河内の觀心寺式の建築が室町に入って一層發達したもの、換言すれば和唐折衷建築として頗る有名である（四　一〇—一二　一六等）。觀心寺ではなかった板蟇股が、鶴林寺本堂にはできたので、而も唐様建築に絶對に用ひない蟇股、奈良直系の板蟇股の上に、平氣で唐様二科をのせてゐるのは（二三）、恐らく鎌倉時代には見られなかった圖であらう。これ位大膽な取扱をするのは、唐様なるものが輸入されてから、相當の年月がたたなければ行はれないであらう。後に記すが、鶴林寺太子堂内聖德太子の廚子の二科は少なくとも唐様でないであったらうと推定するのである。

内部でも入側の部分のこの二科は、其上の二重の通肘木の上に二つづつの科がのってゐる。だから片方に三つづつの兩方で六つだから、姑く問題にしないでおく（一一〇・一六）。さうして今は外部（四）及び内外陣境（一二）のだけ、即ち蟇股と其上の四つの科を考へてみると、若しこの唐様肘木上の二科に含まれてゐる通肘木が切斷されて兩端に繪様ができ、これが繪様肘木になるならば、そっくり其まま信州飯田の白山社奥社本殿の科栱間の裝飾の「四科」となるので、さう見ると別段あの意匠に就いて、左程驚異の眼を睜らないでもよろしいことになる。あの建築は先年修理の際、永正六年の墨書銘がでたさうであるから、さうすると其時より百十四年前の應永の初頃にこの位のものがあっても勿論いい筈である。とにかく外から見た時は和様の二手先と板蟇股上の唐様四科とが眼につく。河内の觀心寺本堂の様式が室町時代に入って一層進歩發達をしたのであるといふのは、この有様を見れば成程といって頷かざるを得ないであらう。そこで同時に室町時代は鎌倉時代の直系であり且つ折衷式建築時代だといふことがある程度迄は呑込めた筈である。

外部に於いて尙ほ注意すべき事は、四隅に於いて丸桁の鼻に彫刻ができて、夫が極の間に位置を占め、恰も手挾の様な役目をしてゐることと、四隅の柱上の大科の科尻に繰形があって、天竺様の科の様なものになってゐる事とである。前者は洵に異例といふべく、筆者はつい他に實例を知らないし、後者は後の仕事かも知れない、といふのは近くでみる機會がないからはっきり言へないが、隅を幾分高くするのには大に役にたってゐるので、内部の所所に天竺様式科が使はれてゐるから（一一例は一三）、或は材料は替ってゐるかも知れないが、當初からの意匠とみてよささうである。

殘りは屋根だが、獅子口も懸魚も新しいので、甚だ感じがよくない。併し書く事が多いから、これ等は省略して内部に移って行く。第一に正面から入ったとする。内部は化粧屋根裏の深さ一間の入側が四方を廻つてゐるから、入ると直にこの入側の部分に出る。さうしたら直に上の方をみると、そこには繫海老虹梁が内外の柱を連結してゐるのが眼につくであらう（五・六）。其入側の部分を上の方を見ながら最初に左手即ち西方に歩くと、海老虹梁が側柱上の枠肘木の卷科に含まれて、通肘木とあひ缺ぎになってゐる所（七）や、入側の隅柱上の取扱の有様（八）が判る。例へば肘木從て科栱は總て和様であり、木鼻は唐様といふよりは、寧ろ天竺様系統である（八の上部）。さうして遂に隅の所へ行って上をみると、そこには隅行に海老虹梁があり、化粧隅木の下には持送り（恰も向拜に用ひてある手挾式の）が、半ば裝飾的に其上に添へてある（九・一〇）。併しこれは折角だが、木鼻と共に圖に示した様に日光でも反射さしてでなければ、薄暗くてはっきり見えない。この化粧隅木の下端に持送りを添へる手法は他にも例があるし、次の時代になっても尙ほ時に行はれたのである（一一〇）。

次に側面に廻ってみるのだが、これは寧ろ外陣に入って少し離れて全景をみた方が、そのあたりの意匠を容易に捕捉できると思ふ（一一）。外陣は入側を除き正面五間だから、柱は六本建ってゐる理窟であるが、其六本のうち兩端の一本づつを除

いた殘りの四本には、前後の方向に大虹梁が架渡してある(一一・二〇・二一)。外陣入側柱上部から一種の曲線型をした梁――波形曲線ではないから名は不適當だが便宜海老虹梁としておくが――を以て、外陣兩端の大虹梁につなぎをとってゐるあたり、洵に巧妙なやり口で、これで構造と裝飾とを立派にかねさせてある(一一中下から右上の方)。此外陣の特殊虹梁と入側柱との關係は一三(一二にも)に明らかであり、其先端が大虹梁にとりついてゐるところは一四・一五(一二にも)と二〇・二一とではっきりしてゐる筈である。卽ち入側柱との關係は八と比較すれば直に判るし、其先端と大虹梁との夫は、大虹梁の外側では一四と一五、內側では二〇と二一とで一目瞭然。卽ちこの特殊虹梁の鼻に彫刻をつけてあるが、其反對の方にも同じ形を刻みだしてあるのは(一四と二〇、一五と二一とを比較せよ)、雄大豪壯な大虹梁及び其上の板蟇股、及び其上の組入天井の骨組を支へてゐる枠肘木との調和を考慮し、周到なる用意の下に施工されたものと思はれる。さうしてこの木鼻を、全く不用な反對の方向に、單に裝飾として所用の材料よりも遙に大きく刻みだすことは、何も別に桃山時代に始まった事ではなく、既にもう一時代前、而も割合に初期からあったのは、單にこの一例からでも知れる筈である。

其大虹梁と柱上大枓との關係は一八と一九とでよく知れる。此虹梁は餘程の型破りで、和樣ではなし唐樣にも殆んど見當らない。どちらかといふと太くて圓いところは天竺樣に近い。外陣入隅のところは一一の右中頃に少し見えてゐるが一七には西南入隅がはっきり寫ってゐる。四方共何れも此通りである。

夫から大虹梁上中央の板蟇股を問題にしてみる。邪魔物のないはっきりした形は二二に寫ってゐるが、これを二枓蟇股を大寫にした二三と比べると、脚端に幾分の相違はあるが、あとは前者が少し背が高いために茨が一つ多いだけで、其他は全く同一といっていい位である上に、其形は入側化粧隅木下端の持送とも同一である。さうすると、其用ひてある場所によって異なってはゐるが、結句曲線の性質は皆同じだといふ事になる。つまりこの三つだけ考へてみても、少しづつ形を變へて異なったものの樣に見せてゐながら、曲線の統一を念頭に置き細部が混亂しない樣に注意をしてゐる事が判るであらう。

既記の通り內部側柱間蟇股上の唐樣枓栱は、其上の二重の通肘木の上に、肘木上と同樣の卷枓を乘せてあるため、其部分だけを見ると、片方に三個づつだから、兩方で六個の枓が肘木上にあるので、其中心線は上から下迄一直線上にある事勿論であるのに、一六に掲げた一例はさうなってゐない。其理由は下方の通肘木の左手の方の上端に少し疵があるので、夫を避けて左へよせたものらしい。初めからかうと知ったら上下顚倒して用ひたらう、さうすればこんなものは問題ではなかったらう。又若し後に氣がついたのなら、小さい埋木さへすれば、高い所だし、下からは見えはしない。然るにその樣な至極簡單な手間をかける事さへせず、疵は其ままに殘して枓一つ少し左へよせてゐるの等は、後世の樣に徒に末節に拘泥しないやり方が、こんな所にもはっきりと現はれてゐて頗る興を催すのである。

外陣はこれ位にしておいて、次に內陣に就いて一筆記しておく、內陣天井は外陣同樣組入天井であるが、やはり柱間には前後に太い圓い天竺樣式大虹梁を架渡してある(二四中程より右上斜に見ゆるが夫)位のことで、左程面白いところはない。內陣に於いては須彌壇と廚子との主要なものが、此等を立派なものとしてをり、天井廻は光線も不充分だし、まづ裝飾は第二位に考へてよろしい所から、斯樣に簡單にしたものらしい。さうして殆んど誰も餘り氣をつけない所だが、內陣兩側面のずっと奧なる最後の柱間の上の方が、少しばかり變ったやり方がしてある。二五に掲げたのが夫で、鎌倉系統の眉と袖切とある繫虹梁を置き、其一方には、他方とかへて大瓶束を入れてある。普通大瓶束はこの樣な端の方にたてることはないのに、ここでは平氣で鯖尻の近くにつかってあるのも亦、型式に捉はれない自由なやり方とすべきである。

何故にこの様なところに大瓶束が立ててあるかといふと、須彌壇後方の柱四本は、建物の背面から一つ前方の柱、即**二五**の左方に少し寫ってゐる柱の列にはなく、夫より僅か後方即ちこの大瓶束の位置にあるのである。つまり其四本の柱の兩端のものを、入側柱と連絡させる事が、無理にして出來ぬ事はないが、形が大してよくないから、斯る方法をとったものと思はれる。而して夫等四本の柱と背面側柱とは、繫虹梁二本で連絡せしめ、其下方のものが須彌壇裏柱に挿込まれてゐるところは、特に兩面から扱いて、恰も天竺様の夫の様に細くしてある。

内陣には大きな須彌壇と廚子とがあり、これが主眼なるものである。和唐折衷の工藝品として有名だから、もっと挿圖でも入れて充分解説すべきであるが、既に他の拙著に多く登載したし、本冊では圖版の頁數に制限があり、旁僅に二圖だけにしておく。**二七**は須彌壇及び勾欄の一部であり、**二六**は廚子軒枓栱の一部である。

此廚子には棟札があり、今寶物館の陳列箱の下の戸棚の内に入れてある。だから寶物を拜觀しただけでは見えない。見度ければ出して貰はなければならない。其棟札は大體次の様である。これは先年修理の時にでたものか、或はずっと以前から

本堂棟札　高六尺六寸七分・幅五寸九分・厚六分、檜製墨書

播州鶴林寺大講堂宮殿上棟應永二年丁丑卯月十五日

大願主肥前阿闍利覺藝　道光禪門沙彌妙覺　右衛門尉影安
于時長吏法印忠深大德
右衛門大夫宗重　右衛門尉平久延
大工左衛門大郎橘末行　沙彌藏阿

どこかにおいてあったものか、夫は判らないが、この本堂を大講堂といったものらしい。其宮殿(くうでん)即廚子の上棟が應永四年であったことが知れる。本堂も廚子も様式は略ば同時代と見られるので、本堂には別に證據はないが、其頃のものと考へてよろしいといふ事になってゐる。筆者も至極同感なので、この說に從ってゐるのである。だからこの棟札は古ぼけて字も消えかかってはゐるが、實際貴重な存在である。これをなくしたが最後、寫しだけでは證據は大分薄弱にならう。近江葛川(かつがは)の室町時代の堂堂たる地主神社本殿の様に、文龜二年の棟札を亡くしておきながら、あれは縣廳へ持っていった儘行衛不明になったといって、いい加減な書體で細長い紙へ寫してあるもので滿足してゐる様な勇氣の持合はせがない以上、箱でも造って入れておき、字がすれてなくならぬ様にしておいてもよさそうである。

第一に須彌壇であるが、これは側面が主に見え、正面の方は極く僅かしか出てゐない。實は正面の方はいろいろのものがあり、夫等を全部動かしてからでないと思ふ様な寫眞はとれないから、これで滿足をしておくのである。見えないところの說明をすれば、正面にはこの様な格狹間が十二個竝んでゐるだけのこと、即ち束の數が十三本あるのと、勾欄が謂はゆる唐様勾欄で、其平桁(ひらけた)の先が異常に發達して特殊の若葉を形成してゐるのと、この二つが現はしてないのは、少しばかり惜しい氣がしなくもない。この格狹間と勾欄の蕨手とは、同じ播州の有名な法華山一乘寺本堂須彌壇の夫等と、同時に同人が造った位に酷似してゐることをここに附記しておく。

須彌壇は直に床上に乘ってゐないで、ほんの格好だけで實用にはなってゐないが、「脚」がつけてある事と、其上下に同じ様な繰形が反對の方向にくり返されてゐることとは、唐様須彌壇の特徴といふべく、和様のとは全く異なってゐる所である。上下繰形の間を束を以て若干に區劃し、各區劃内の羽目板に格狹間を刻するのは、これは昔から和様のやり方である。夫から勾欄の親柱が擬寶珠(蓮蕾)であり、束が科束になってゐるのは和様で、夫等が若し唐様なれば開花蓮柱と蓮葉束(蓮花束の事もある)とでなければならない。其代りに前者に於いては勾欄の架木も平桁も地覆も、親柱間は通ってゐるべきものが、後者では途中

できれて、蕨手になったり若葉になったりしてゐるのが普通である。さうすると此須彌壇は半ば和様で半は唐様、即和様を然るべくとり交ぜたもの、折衷とでも混淆とでもいへるものといふ事が了解できた筈である(**二七**)。

第二に廚子を觀察するが、これも亦下の方から順に調べる事にする。先づ下方の劍巴文の裝飾を初め、柱・長押・臺輪・幣軸　兩折兩開板唐戸・飾金具等、何れも純和様と見るべきである。そこで今度は臺輪の上に眼を移すと、込み入った枓栱が自然問題になってくる。其枓栱たるや、肘木・尾樋・及び枓栱の配置が謂はゆる「詰組」になってゐるところは正に唐様であるが、夫でゐて四手先のため二所の支輪が、一は「菱支輪」で一は「蛇腹支輪」になってゐる上に、一手先目の肘木は「繪様肘木」とし、繪様の部分は美しく彩色がしてある(**二六**)。

唐様の肘木は其下端と木口との區別が和様や天竺様の様に判然せず、圓弧又は圓弧の様な曲線で自然に移り行く、さうして上端も少ししやくり取った様な形なのが普通である。尾樋の先端を細くとき、其こいた部分に鎬をつけ、鼻(先端の)は内を向けて斜に切るから、正面から見ると背の高い五角形をしてゐる。これ等は其特徴である。併し支輪はいつも「板支輪」であるのに、この場合はさうなってゐないで、下のは菱、上のは蛇腹になってゐるから、これは唐様ではない。それなら天竺様かといふに、天竺様には支輪は用ひない。さうすると自然殘りの一つの様式なる和様といふことになる。而も菱支輪は鎌倉時代に於いて初めて出現したものの如く、平安には遺物はない。唐様の枓栱を用ひたり尾樋がさうであったり、其上に菱支輪があったり、これだけ考へても鎌倉以降といふことは確かである。

繪様肘木といふのは肘木の兩端に彫刻即ち繪様(重箱よみでヱウといふ)がついてゐるものの名である。それなら鎌倉以後の實肘木は、兩端に大概は簡單な鼻繰があるから、總てさういふ名で呼ばれると思ふかも知れぬが、それ等はさう言はないで、兩端に桃山以降に見る様な繪様のついてゐるのをいふのである。さうすると「花肘木」とはどういふ風に異るのかといふことになるが、それは其區別が實に明らか(大概は明らかだが)な場合もあるし、又この様にどちらにもとれるのもある。餘り長くなるから今はもうやめておくが、この一手先目の枓に含まれてゐるのは繪様肘木と見る事にしておく。尚ほどちらも鎌倉時代以前にはなかったのである(この繪様肘木を含んでゐる唐様肘木が板蕪股の上にのり、さうしてこの繪様肘木の上に二枓がのり、唐様肘木上の三枓の中央のがとれて二枓になると、信州飯田の白山社奥社本殿枓栱間の「唐様四枓」になる)。以上は總て**二六**に明らかであるが、次に化粧隅木を見ると、地隅木の鼻には繰形があり、飛檐隅木の鼻は少し下を向いてゐる。これ等は**二四**にはっきり見えるが、尚ほ此圖の下端にもう一つ小さく繰形がでてゐるのは、地隅木下の持送りで、これ等は何れも唐様の手法である。

最後に樋であるが、同圖に少し見えてゐる通り、何れも間隔が割合に狹くて平行してゐる。だから化粧隅木の側へ四十五度に突き當り、配付になってゐる。かういふ取扱は和様で、唐様と天竺様とでは放射形に配置がしてある。即扇樋にしてある。以上記したので枓栱から上が和様と唐様との折衷混淆になってゐるところが判然したであらう。

* * * * * * *

鶴林寺本堂は和様唐様の折衷式建築で、河内觀心寺本堂の様式手法が室町時代に入って一層進歩發達したものだと專門家がいふのは、以上記した様な次第だからである。だから先づ書物で一通り讀んでおいて、次に實地見學をすれば大體了解ができるであらう。

太子堂(二八・二九)。

太子堂は本堂に向って右前、即ち本堂の東南方に南面してゐる方三間單層寶形造の建物の前面に「縋破風」をかけた深さ

一間の禮堂をつけた樣な建築である。**二八**は正面を主とし、左側面を僅に見える樣にした圖で、左方背景は本堂の東妻、右方背景は鐘樓南妻の西半分。**二九**は右側面と正面とを六と四位の割合に見たもので、堂の東方に位置せる鐘樓も亦、殆んど桁行（半分切れてゐるが）と梁間とが同じ割合に寫ってゐる。

修理前にできた書物には、南方に瓦葺の廂をかけ出し、北に御供所を附屬してゐるとあるが、前者は主屋同樣檜皮葺に改められ、後者は取除かれてしまったから、今は大變に見よくなり、文字通り面白を一新した。だから遽方から見ると、露盤と寶珠とが物足りない形をしてゐるのを除いて、まことに形はよろしい。主屋の柱は圓だが廂の部分のは大面取方柱にしてある。併し其柱は全部新補だし、修理前のはどうであったか記憶しないし、よく判らないが、側面石階上の棧唐戸（これは鎌倉か室町かと思ふが）の兩方に建ってゐる大面取の方柱の割合に新造したらしい。又其出入口の上方にある繫虹梁（**二九**にはっきり見えてゐるが）も、上下端に大面がとってある。廂の部分の正面は全部蔀戸で新しいから判らないとして、西側の棧唐戸のところは、東側では板壁にしてあり、これ亦至極新しく、只古いと思はれるのは長押だけである。其他主屋との境の部分は、三間共引違格子戸を建ててあり、隨所材料が新しいのと、廂には天井なく「化粧屋根裏」にしてあるのを見ると、どうも建具は當初から入ってゐたのではあるまいといふ至極尤もな說が昔からある。

併しながら西側出入口兩側の添柱なる大面取方柱は、一邊四寸三分、面見付（見付とは面を四十五度の方向からでなしに、正面又は側面に投影したときの幅さをいふので、即ち幾分狹く見えるのである。例へば四十五度の定木に於いて最長の邊を面幅とすれば、他の等長の二邊が丁度「見付」になる）九分、故に面見付は一邊の約$\frac{1}{4.8}$となる。故に假にこの方柱が一邊四寸五分、即ち現在のものより約二分太かったのだと、面の見付は一邊の$\frac{1}{5}$といふ事になり、鳳凰堂中堂の椽の方柱や豐後富貴寺大堂の夫の面よりは少し小さいが、鎌倉時代の割合よりは大きいので、これなら平安後期で世間は通る。其上の繫虹梁の面は測らなかったが、目測ではやはりこの添柱の夫と同じ位の比例と見た。扉は既記の通り普通の棧唐戸で、これは勿論平安時代にある筈はなく、且つ桃山へ降るものではないと推定されるから、後のものとしても、此所にもとは定木緣のついた板扉を吊ってあったかも知れない。さうでないと添柱がどうも判らない。だから實はこのあたり、當初はどうであったか、私にははっきりしてゐないのである。

主屋の蔀格子や扉も新しい。科栱は「大科肘木」。內部は內外陣境に四本の圓柱を建て、其間に內陣一ぱいの須彌壇を設けてある。須彌壇は各面羽目板の部分を束を以て四等分し、平安後期一流の格狹間を刻し、格狹間內に獸形を描いてあるが、これは後の仕事と見られる。外陣長押上に壁畫があるが、今殆んど磨滅して了ひ、ただ繪があった事が判る程度である。外陣は小組格天井、內陣も同樣で、中央に八葉の天蓋を吊る。何れも同時代と認められる。而して此內陣柱にも八大童子が描かれてあったさうだが、まるで見えない。

扨て實は外陣の天井だが、此種のは白水阿彌陀堂や富貴寺大堂にもあるから、下から見たのでは同時代と推定するのが當然である。尙ほよくみると格緣等に二種あるから、一部は後補であらうといふ判斷ができる。併し困る事には修理落成圖には、この外陣天井裏は化粧垂と裏板とで美しくおさめてあるから、天井をはるならこの樣に丁寧にしないでもよし、化粧屋根裏にするなら天井の必要はどこにあるか、といふ事になるから、結論としては外陣の天井は都合よく解釋すれば室生寺金堂の樣に、建築中に天井をはる事に模樣替をしたとするか、或は又鎌倉位の後補かも知れないとなってくる。だからもっと充分いろいろの點から調べないといけない。

* * * * *

堂内東南隅に西向きに壁に造りつけにした廚子がある。一小工藝品に過ぎないが、建築史上に大に參考になるから、次に簡單に記しておく。私は今でもただ樣式から推定してゐるだけだから、誤ってゐるかも知れぬが、鎌倉時代のものではないかと思ってゐるのである。殆んど全體が和樣で、ただ正面兩開板扉兩脇の大面取方柱の上が、珍らしく和樣か天竺樣かの肘木の上にのった二科になってゐる所だけが他樣式が混じてゐるので、中央扉の召合せの上には輪郭だけのくりぬき蟇股が用ひてある。この蟇股と二科との間は、少し廣過るので、そこに出組に三科が入れてあるが、これは別段唐樣詰組の影響と見ないでもよからうし、又見てもよからうと思ふが、こんなのは他にも例があるかも知れない。併しこの出組の三科の下に柱形がないから、或は外國建築の手法の影響と見た方が穩當かも知れない。

扨てこの二科を考へてみると、肘木の下端と木口とは明らかに區別があり、唐樣の夫の如く一連續曲線ではないから、これは本堂の夫の如く(二三)唐樣とは言へない。さうするとどう解釋したらよからうかといふ事になる。そこで此廚子を通覽すると、この二科が唐樣か天竺樣かが判らないだけで、あとは全部和樣と見られるから、これも亦和樣の肘木と見ておいてよろしいのではあるまいか。果してさうなら和樣二科で面白くなるのであるが、觀心寺本堂向拜二科にもこの樣な肘木のものがあるから、そんなところから考へると、これを天竺樣としないでもよささうである。さうすると二科なるものは

和　樣　觀心寺本堂・鶴林寺太子堂内廚子

天竺樣　東大寺開山堂・吉備津神社本殿

唐　樣　觀心寺本堂・鶴林寺本堂

等に實例がある事になる。但し、此等は鎌倉も室町もあるし、又繪樣肘木や花肘木の上にのってゐるもの、及び魚尾型二科(伊勢島ケ原觀菩提寺本堂)を除いてある。繪樣肘木なるものが日本で木鼻から考按されたとするならば、其上に三つ科をのせると、どうも何となしにうるさいのと纏らないのとで、いつも二にしたのだらう。さうだとすると「繪樣肘木二科」(例へば金胎寺多寶塔・長久寺本堂・道成寺本堂等)や「花肘木二科」(法隆寺南大門に一例あるのみ)は勿論和樣系統とすべく、觀菩提寺本堂側面にある「魚尾型二科」に至っては、あの肘木は唐樣でない事だけは確かだが、和樣と見るか天竺樣にすればいいか、何れかはっきりしない。

尙ほ此廚子の二科の上には通肘木があり、其上に三つ科を竝べ、更に割合に背の高い實肘木を用ひて桁を支へてゐるのは注意を要する。二科の上が三科で合計五科、唐樣でもこの樣なのはある。又中央刳拔蟇股上の三科は、蟇股と共に格段な形式である。此等に就いても書いてみてもいい事はあるが、餘り長くなるからやめておく。此他飛簷隅木の木口が上端に鎬がなくて長方形である事と、鬼板の形と鳥衾・隅巴の形、稚子棟のない點等は看過してはいけない。

鎌倉時代の建築家は從來やっかいな大袈裟な型のものを頗る簡單化して用ひた樣である。其二例として懸魚と鬼板とをあげておく。懸魚といへば猪目に殆んど限られてゐたのに、夫をずっと略して「梅鉢懸魚」(一九三)をつくり上げ、又鬼瓦から「鬼板」を造り、共に現今に至る迄、恐らく未來永劫、重寶がられることになった。

最後に參考迄に此廚子の大面取角柱の寸法を書いておく。測定の際少し誤ったかも知れぬが、一邊二寸一分、面見付三分二厘五毛、比約1/6.5。初めに鎌倉時代と推定したのは、實はこれ等も多少考へに入れての事である。

常行堂(三〇・三一)。

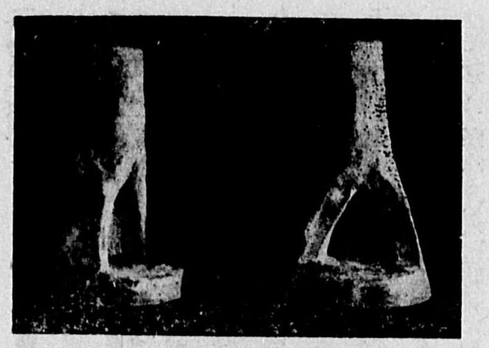
堂行堂は本堂の西南方に東面してゐるから、太子堂の側面に向ってゐることになる。本堂の兩方の手前に、平安後期の堂が二棟あるのは面白いことである。ある書物に桁行三間、梁間四間、單層四注造、本瓦葺とあるのはいいとして、其後にた

だ僅に「藤原時代の建築である」で片付けてゐるのは、何ぼ何でも氣の毒千萬だから、もう少し解說をしておくことにする。

修理前の有様は三〇の如く正面は深さ一間通りは吹放しで、北側（右側面）の方は圖でみる様に相當にひどくなってゐたし、他は推して知るべきで、一度び修理の際はどういふ風に手をつけるだらうと思ってゐたが、夫は總て杞憂であり、三一に見る様に美事に更生をした。修理前は氣がつかなかったが、此建築は奥行が一間長いので、四注屋根をかければ自然大棟は前後に通るから、正面からみると屋根は等脚三角形をなす。其頂角のところに珍らしく瓦が一つ挿込んである。ここに挿入した圖は其瓦で、ほんの飾りに使ってあるのだから、先だけがあたりまへで後ろの方は細くなり、ぬけ出ない様にしてある。

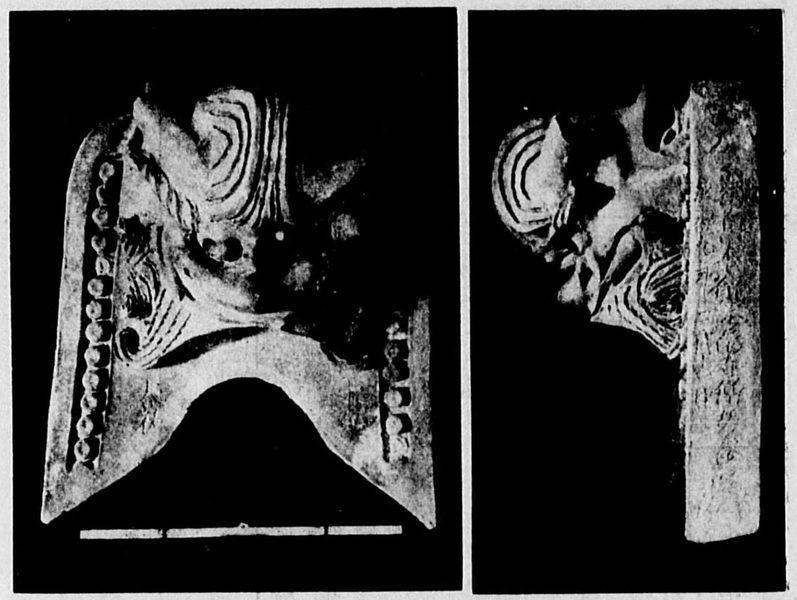
東面に一つ西面に一つ、合せて二個を限った特殊な瓦。恐らく天下に二つきりで、三つとはあるまい。甚だ珍物たるを失はない。

東北隅降棟二の鬼は、とても剽輕な顏をしてゐる。ひょうきんではあるが、室町時代によくある顏で、見馴ると可笑くも何ともない。額がうんと出て角が二本生え、金壺眼で口は耳まで裂けてゐるが、鬼瓦は室町時代に入ると角が二本左右に生えてくるので、鎌倉では時に顏一面に角質の隆起がある位で、夫が角に整理されて、額の左右に蝸牛のつのの様にある角度に生えるのは、室町時代になってからと見てよろしい。殊にこれ等はハリカワ（顏面のつく下の臺をいふ）の形、其兩端に近く溝中に整列してゐる珠文、鬚が西洋カ



瓦挿點會棟降隅背面正根屋堂行常寺林鶴
（昭和十四年十一月二日）

降棟が上で會するあたり，瓦棒が中央にあれば論はないが，さうしないで偶然か或はわざとか，とにかくそこが谷になったとして，そこを巧におさめるために考へたものらしい。挿込む足は後世の小菊の夫の様にしてもいいのであるが，かうした方が一層しっかりする筈である。この足に逆目を切れば尙よからう。



面側正瓦鬼の棟降隅北東根屋堂行常寺林鶴
（昭和十四年十一月三日）（呎一）尺一約の尺曲は物差物）
室町時代の典型的瓦鬼瓦。永祿九年二月吉日の刻銘がある。

ルタの王の夫の様に、先が螺旋形に卷き上ってゐるところ、前額の髮がオール・バックになってゐるところ、其上に側面に於いて前額の隆起は何といっても物凄く、其輪郭は直角等脚三角形を直角を挾む一邊でハリカワの上に立てた様な、而も特有な容貌だから、これも亦一度見ればめったに忘れる事も間違ふ事もない筈である。此鬼には正面に

本願
春祐

側面には

丙辰　再興本願當寺僧安養院　春祐
永祿九年二月吉日

とあるので確かな上にも確かである。

永祿九年には大修理があつた事は、棟木・束・貫等の小屋材に墨書があるので判る。夫等の墨書は昭和十四年十一月二日、解體してあつたとき寫しておいたものである。

一、棟木墨書

上棟本願當寺安養院春祐大阿闍梨後生善處也于時永祿九丙刀年□□也仕？？ゝ

二、西側棟束

上棟本願當寺 貫孔 永祿九年丙刀大工藤原源左衛門？尉 安養院春祐 大闍梨 爲後生也

貫孔 永祿九年丙刀かゝら？ふき□する之 西

三、貫墨書

(イ)

棟上本願
大阿闍梨
安養院
春祐爲
後生善處
之進永祿

(ロ)

九年丙刀
卯月中旬
當寺之
伽藍棟上
本願者
護摩堂
常行堂
第二度
也筆

(ハ)

者少將公
書之
〃
之？

此分は(イの左に(ロ、更に(ロの左に(ハがつく。

次に内部に就いて記すが、事柄を簡單にするため、修理前の狀況と修理後の夫とを表にしてみると

修理前	修理後
前面一間通り吹放とす	正面三間共蔀戸(半蔀)、左右側は板扉
主屋前面中の間蔀戸、兩脇間及び左右側面第一の間引違板戸、其他の間全部縱羽目板張	主屋正面三間共吹放、兩側面左右第一第二の間蔀戸(半蔀)、後面中の間板扉、殘全部白壁
竿椽天井(後補)	小組格天井

大體かういふ風になる。大面取の肘木や繫虹梁が用ひてあったり、平安時代は動かないと思ふが、正面見返しの部分などは、長押上に直に肘木が乗ってゐたり、その邊が少し落付かないが、これ以上考へ樣がなかったと見え、かう出來上ったのであらう。斯道の專門家が鋭意熟慮考覈の結果として敬意を表しておく。

* * * * *

太子堂も常行堂も共に科栱は大科肘木であり、共に平安時代である。だから科の割合も同じであらうと思ふかも知れないが、そこに少しの差がある。尤も肘木は皆同じ割合で、常行堂内部大面取のも何も皆木口の高さが全體の半分になってゐるが、科はさうはいかない。判り易くするため表示しておく(次頁參照)。

此表で明らかな通り、太子堂は大科の幅八寸五分五厘に對し、高さ七寸四分二厘、常行堂の分は八寸五分に對し六寸である。故に幅さと高さとの比は

	太子堂大料	常行堂大料
料尻幅	五・五〇	五・九〇
敷面幅	八・五五	八・五〇
料繰高	二・九五	一・八〇
敷面高	四・八五	四・二〇
計	七 四二	六・〇〇
肘木幅	五・〇〇	三・七〇
肘木含	二・一〇	二・〇〇

太子堂大料 $\frac{8.78}{10}$、約 $\frac{8.8}{10}$

常行堂大料 $\frac{7.06}{10}$、約 $\frac{7.0}{10}$

となる。だから單に料の比例からだけでいふと、太子堂を平安後期の初葉とするならば、堂行堂は其終りに近い頃位にもつて行かなければならない。さう迄しないでも、平安後期は約三百年續いてゐて隨分長いのだから、其間には可なり建築は變化した筈である。だからこの二つが同時に建てられたものでない事は確かといへる。

* * * * *

護摩堂(三二・三三)。

圖でみる様に修理前は大分ぢぢむさかったが、修理後は大分に整然として美しくなった。鐘樓の東に觀音堂があり、更に其東にあるのだから、境内では最東端に南面してゐるのである。單層方三間、入母屋造、本瓦葺。料栱なし。そこでどうなってゐるかといふと、粽付の圓柱の上に丸桁が乘ってゐて、さうして頭貫の鼻が軒の榧下に出てゐる。椽は修理前は正面にだけ殘ってゐたが、修理後は四周さしてある。窓のないこと本堂の如く、正面中の間部格子、他は全部(東側中の間は出入の爲めと思ふが引違板戸にしてある)板壁。外觀はざっと右に記した様である。尙ほ化粧隅木は和様である事を附加へておく。

内部は床全部拭板敷。中の間左右の柱上に前後に大虹梁を架渡してあるが、此大虹梁は太く圓く恰も本堂内の夫の様で、どちらかといふと天竺様のものに近い形をしてゐるが、其下端が柱に挿込まれてゐる所に用ひてある形式的裝飾持送は純然たる唐様料栱である。この大虹梁の上端に其間隔を一邊とする正方形をつくる如く料を置き、其料に通肘木の様なものを含ませ、其交叉點に四隅の入隅から化粧隅木を仕掛けてあるが、其鼻は内方に出て化粧として木鼻を形造ってゐる、と書いた事は書いたが、讀んでも何だか判然しないだらう。圖示すれば直に誰人も明確に呑込めるのだが、都合があって遺憾ながらさういかない。だから實地見學を勸告する。

大虹梁上にできてゐる正方形、即ち四隅に料があり、料の間に通肘木の様なものが含まれて、夫れで區劃してゐる部分が内陣に當るので、此内陣には竿椽天井がはってある。外陣は化粧屋根裏で、太い疎榧が割合に廣い間隔に配置してあるため、どうも調和がとれてゐない。内陣が鏡天井であったら稍やよからう、併し何としても榧が太く間があき過ぎてゐるのが始末によくない。さうして兩側面中の間左右の側柱の上から、海老虹梁を出して大虹梁上の料の上で連絡をとってゐる。だから結局この建築の内部は、方形をなせる唐様建築の内部を極端に簡略化したもので、例へば普通なら**一六九**の様にすべきものを、さうしないでこれ以上略せない位にまで略して、さうして唐様の取扱をしたのである。この種の建築をよく理解してゐる技術家でなくては到底能はぬところ。だから少し位の不滿があっても、それは微瑕として問題にしないでもよからう。

須彌壇の邊がまた頗る面白い。後ろの方の虹梁下の適當な位置に左右に二本の圓柱を建て、頭貫を通し臺輪を置き、其臺輪で大虹梁を支へる様にしてある。換言すればこの臺輪は大虹梁の下端に接してゐるから、大虹梁は前後の柱の間は持放しでなく、間で支へてゐるから强度は增すことになる。これも中中うまい考へである。勿論この部の柱にも他の圓柱同様粽があり、頭貫や臺輪も亦唐様獨特の取扱がしてあるが、何故か臺輪の先の茨が頭貫の木鼻一ぱいにおさまり、兩者の鎬の線が横から見ると殆んど一直線をなしてゐる。何故こんなに窮屈にしたものか。この様に少しのゆとりもなく、一ぱいにしない

でも、もう少し臺輪の鼻をだしてゆっくりさせたらよささうにと、いつもさう思ふのである。

此所から後方に須彌壇（大したものではなし）があり、其上に不動尊が安置してあるが、臺座が壇からはみ出してゐたりするのをみると、何だか臨時に臨時の本尊で間に合はしてゐる様で、どうも落着いてゐない。

護摩堂には棟札がある。長さ五尺五寸六分、幅三寸五分五厘、厚さ二分五厘、檜製。其表面に

上棟播州賀古郡刀田山鶴林寺護摩堂本願大阿闍梨安養院法印春祐大工藤原源左衛門小工藤原三郎左衛門

と一行に記し、其下に四五寸離して「敬白」とかき、門と敬との間に在右に二行に

癸　永祿六年

亥　卯月中旬

とあるので、建立の年月は明らかである。然るにある書物には「永保二年建立の建築である」とあるが、これはたしかに誤植として、さて永保の保を何にしたらいいか。永祿に最も近い永の字のつくのは永正であるが、それではただいい加減にさうしてみただけで、何の役にも立たない。そこで「永保」は「永祿」の誤りとみて、序に「二年」の「二」は「六」の誤りとしなければならない。二字續けての誤植は少し念が入りすぎてゐる様である。「加古郡」を「賀古郡」、「鶴林寺」を「鸞林寺」としてあるのは何故か。安養院の春祐は常行堂の鬼瓦銘にあるのと同人で、あの鬼瓦は永祿九年につくったものだが、護摩堂を建てた勢で常行堂の修理に着手したものと見える。

鐘樓（三四・三五）。

修理前には下に石が少しばかり積んであり、夫が臺の様になってゐて、其上に建築してあった。其石の積方が大して美しくもなかったから、氣になつていけなかつたのを、今度は龜腹にして了った。だから餘りはみ出した様である上に、東側出入口のところで切斷されたから、そこの所がどうも工合がわるい。以前から龜腹であったといふ證據があってした事なら仕方がないが、さうでなかったのなら、何とか他に考へやうがなかったらうか。

寺に鐘樓の棟木と稱するものの斷片がある。四角な木で長二尺六寸、方六寸五分であるが、この一方に墨書銘がある。これは元祿十一年にかいたもので、時に誤字もある様だし、人名等は達筆(?)過ぎて一字だか二字だか判りかねるのもある様だが、應永十四年に建立されたものだといふ事が知れる様である。文に曰く

刀田山鐘樓堂先年應永十四丁亥年修覆有之于時元祿十一戊寅年三月修理仕候
應永十四丁亥年ヨリ元祿十一年戊寅年迄貳百九十二年ニ成ル御建立本願
智ヒ不申候今度者爲一山惣中自力仕候　大工安田村多左衛門與兵衛
元祿十一戊寅年三月八日　庄左衛門木引長兵衛同與七衛門
行事玉泉坊室　大工上田村五郎兵衛大工新野邊村
寶生院敎正法印　甚太夫助左衛門

右のうち初の方の「鐘樓堂先年」は「鐘樓建立年」だと都合がいいが、「先」らしい様である。併しこれは私の讀み違ひかも知れないし、三行目の上の「智ヒ不申」は「日」が多過る。寺傳に應永十四年の建立といふと書物にあるのは、こんな所から出てゐるのであらう。

斯の如き型式の鐘樓は鎌倉時代以前に見ないので、かういふのを袴腰づきといふ。此種のでは奈良市新藥師寺の等が最古

の一である。禪宗建築の鐘樓といへばいつも此の樣な形のものばかり、更に江戸時代の廟の鐘樓・鼓樓亦然り。鐘樓としてはかういふのが最も恰好がとり易からう。四本柱に轉びをつけて四隅に立てたのは、中中むづかしく、常に頭が大きくなりすぎ、結果はいつも大概きまって面白くない。私はいつも鳥居と四本柱に轉びをつけた鐘樓は、餘程伎倆拔群な建築家でなくては、滿足な形のものはできないと思ってゐる。併しこの袴腰付のなら、中途半端のものにでもどうにかこなせる。だから飛びぬけていいのも拙いのもない。

上層は三手先の枓栱が用ひてある。其一手先目と二手先目との間に「菱支輪」、二手先目と三手先目との間には普通の「蛇腹支輪」がある。かういふのは既に本堂廚子の軒に於いてみたところで(二六)、菱支輪が鎌倉以前になかった事はその解說中に記したが、ほんの簡單であったから、ここで少しく細にかいてみる。菱支輪の最古の實例は、どこに殘ってゐるか知らないが、私の記憶にあるのでは靈山寺本堂向拜のである。

奈良縣生駒郡富雄村大字中、大軌の富雄停留場下車、富雄川に沿ひ約二十町南、川を渡るとそこに名刹靈山寺があり、其本堂は弘安七年の再建である。此本堂の正面向拜に珍らしい事には七寶つなぎの樣な支輪が用ひてあるが、斜に組合せた木を特殊な形に削ったためさうなったのである。尙は當代末には彌勒寺本堂外陣の樣なS字形菱支輪もある。

室町になると菅原喜光寺の本堂・吉野金峰山寺本堂等にもあり、鶴林寺には本堂廚子と鐘樓にあるが、この二例は組合はしたものではなく、一枚の曲線形にした板を菱形に組んた樣に見ゆる如く切り拔いたので、杢目が横に通ってゐるのと組合せ目が見えないのとが何よりの證據である(三五)。正直に組合はせるのだと、一本一本はねぢれた樣な非常に複雜な形となり、つくるのに甚だやっかいだから、寧ろこの鐘樓の樣に(本堂廚子のは小さいから當然だが)刳拔いた方が、出來上ってから美しく見え、つくるのにも反ってたやすいためであらう。少しばかりずるいやり方である。

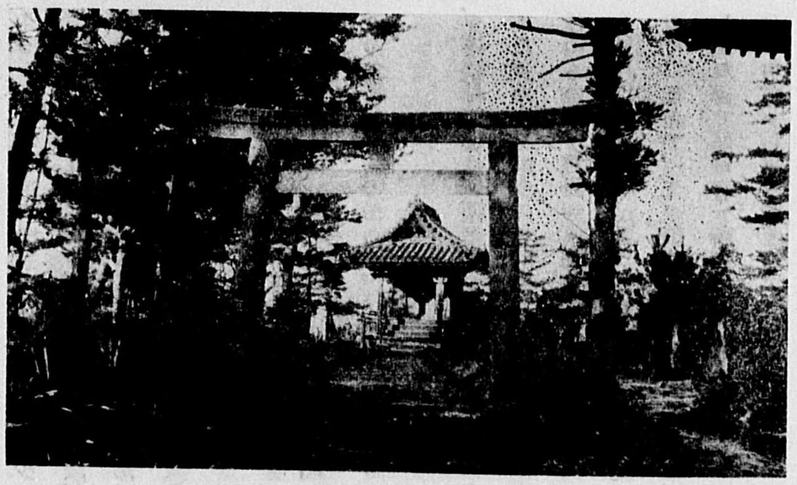
桃山では近江竹生嶋の都久夫須麻神社本殿、江戸のものならあちこちにあるが、要するに少ない。少ないのはつくるのが割合に面倒だからであらう。まだ外へ膨らんでだけゐる場合はいいが、下では外へ上では內へと波形曲線をしてゐるの等は、組合せるのは大變だらうから、こんなのは大概刳拔式だらうと思ってゐる。菱支輪は結句次の樣になるのであらう。つまり

菱支輪(鎌倉時代以降)
- 菱型
  - 七寶型
  - 組合式
  - 刳拔式＝鶴林寺鐘樓(其他)

こんな事になるであらう。

*　*　*　*

袴腰付鐘樓は新藥師寺のの樣に、漆喰塗の場合は其部分は平面だから截頭方錐體であるが、木の時は殆んどきまって內方に反った下見ばりになってゐる。從來見なかった頗る變った著しい外觀を呈してゐるが、實は例の天壽國繡帳にある入母屋造のものや、法隆寺西院鐘樓の下の方に、內方に反る樣に下見板をはれば、夫が卽袴腰になるので、現在此種の鐘樓の內部を見れば、長い柱がたってゐて夫で上層を支へ、下見は單に化粧につけてあるだけだから、柱と下見との間には空氣があるだけのことで、先づ裝飾といふ點を除いては、あってもなくても別に問題はないのである。ほんの僅かの手術を昔の鐘樓にしただけで面目を一新したのである。コロンバスの玉子と同じで、人のしたあとの眞似は何でもないが、扨これだけの考へが中中頭から出て來ない。



（昭和十七年一月十九日）　望遠堂行者

行者堂（三六―三九）。

表門を入って直ぐ左手を見ると石の鳥居があり、其柱に文字が刻んである。

北柱。奉寄進御神前　北在家村願主六右衛門次郎右衛門

南柱。元文四巳未年六月吉祥日

新しい割に形はよろしい。此鳥居は今の行者堂、元の山王權現ので、其内に向きは少し異ってゐるが、お宮が建ってゐる。純粋の神社建築でひどく破損はしてゐるが、やはり腐っても鯛の諺の通り見るからに心地のいい建築である。

奈良市の東方約三里、添上郡大柳生村大字忍辱山（にんにくさん）に圓成寺（えんじょうじ）といふ大寺があり、其境内に春日・白山の二神社があった。鎌倉初期の神社建築の優作であるが、いつの事か改名して春日堂・白山堂としてしまった。京都市の南端なる眞言宗醍醐寺の山上伽藍の入口に清瀧權現の宮があるが、これも清瀧堂と改名されてゐる。其他諸所の寺の境内にある鎮守は何れも鎮守堂と呼ばれてゐる。此調子でここの山王權現も、神佛混淆は怪しからんとあって、山王さんを追ひ出し、役小角をまつり行者堂と名を改めさせられたらしい。併しいくら名をかへても建築其物は變らず、依然として堂堂たる神社建築で、而も類例稀なる――或は類例なき――珍らしいもの。即ち一見春日造の樣であるが、よくみると正面の兩隅を少し缺いて向拜の如くしてある入母屋造で、其最もいい證據は、正面の兩隅のところには、背面と同じく化粧隅木が用ひてあることである。

向拜の柱は大面取で、柱一邊六寸、面見付八分、一邊と面との割合は$\frac{1}{7.5}$。鎌倉は約$\frac{1}{6}$で室町は約$\frac{1}{8}$、何れも平均しての大體の割合であるが、$\frac{1}{7.5}$といふと先づ其間のところで鎌倉末室町初位の割合に當る。此建築は室町初期とする說もある樣だが、單に方柱の一邊と面見付の割合からいふと、其位にもって行っても差支はないと思はれる。此向拜柱上の左右に和樣面取の挿肘木を出し、向拜柱間の虹梁を支へさせてゐる。此は虹梁といへるかどうか、といふのは下端は水平で刳上って居ず、僅に上端の兩端に小さい申譯の樣な圓味をつけた鯖尻を見せてゐるだけであるから。併し全體としては性質は確かにさうだから、ここでは先づさうしておく。そこで此虹梁は下端に二本の眉があり、且つ錫杖彫がつけてある。此虹梁の鼻は唐樣式の木鼻に終り、上に天竺樣系統の枓尻に繰形を有する枓をのせ、夫から上は普通の取扱をして桁を支へてゐると**三八**の如くである。

方一間の主殿の隅柱上部長押の間に現はれてゐる中央に猪目類似の切込のある木鼻、及び出組の枓栱の間から出てゐる木鼻の形に注意すべく、又隅行の肘木及び其上の鬼枓は補强のため一木より刻みだしてある。斯樣な手法は敢てここのみではなく、他にもあるから珍らしくはないが、隅は平より約四割出が多くなるから丈夫にしたのである（**三九**）。夫から内部では内外陣境の幣軸が當初のものと推定し得られる。

*　*　*　*

序ながら元の山王權現時代の祭神なる高さ一尺七寸ばかりの木彫立像は、隨分ひどくなってはゐるが、今寶物陳列館の硝子棚の中にある。これは神像ではなくて菩薩だといふ説もある樣である。併し相當に古い作で、私の甚だ不熟練な半分素人の眼には平安初期位に見えた。この木彫立像の寫眞は、つい今年三月末に行ったとき、遠齋老が態態寫してくださったが、少し光線不足でうまく複製ができず、遺憾ながら掲載を見合はせる事にした。

高野山の國寶建築　（四〇—八八）

今でこそ高野山行は何でもなくなり、氣候のいい時は大阪からなら勿論、京都からでも日歸をしようと思へばできる位便利になったが、先頃迄は中中さうではなかった。私が初めて行ったのは明治三十六年の春であった。當時大阪に第五回內國勸業博覽會があって、夫を見學に出かけ時、何分知人とては一人もなく、宿屋も勝手が判らず、今の樣に旅行協會の樣なものがあるではなし、どうしようかと大分困った。その樣に困るならやめればいい筈だが、夫が實は私の勝手にならなかったので、さる方面からの先づ命令といった樣な都合で、東京から態態出かけるのだから、夫でやめる事もできなかった。所が幸なことに父の友人のT氏の老父、當時は丁度今の私位の年輩であったらうかと思うが、北區の土佐堀に居られたので、其方にお願ひをして快諾を得、其家にお世話になる事に決り、幾日間か滯在中、T老人が一度高野へ行き度いから、一所に行かないかと誘はれた。費用萬端先方持とある以上、遠慮や心配をする必要が絶對になかったので、直に連れて行って頂く事にした。併しほんたうは何にしろ其ころ、餘り外出をされない御老體一人では、東京に居られた息子さんが不承知なので、あんな若造でもいくらか役に立つかも知れないといふ所から、入選した點もあったらしい。

何分今を距る正に四十年前の事だから、判然たる記憶はないが、和歌山行の汽車へのり、橋本驛下車、あとは人力車で高

野下迄行き、そこから勿論歩いた。T老も歩かれた。初めの間はいいが、極樂橋から先は勾配も可なり急で、若體でも大して樂でなかったのだから、御老體には相當にこたへた筈である。撞木の先の短かい柄と直角についてゐる木が、圓弧の樣に幾分彎曲したものを客の腰にあて、柄の先をもって押して登らせる方法もあった。女人堂迄いくらといって雇ふのだが、T老は腰を押させながら樂に登って行かれた。隨分樂だからマア試めして御覽なさいと勸められ、十間ばかり押さしてみたが正に其通りであった。

此時はともかくも東大の建築學科なるものを、寒天か心太式に押し出された翌年の春で、まだ日本建築を專門にしようといふ意志もなく、曖昧模糊時代の初期であったから、古建築に對して大した關心を持合はしてゐなかった。又當時特建としては僅に明治三十二年四月に指定された不動堂本堂と金剛三昧院多寶塔とがあっただけであったし、旁この樣な古建築は一つも見ず、又T老の參詣した金堂（大正十五年十二月二十五日燒失）に對しても全然無感覺であったし、金三の經藏にしても奥の院の夫にしても、まるで氣がつかなかった。

第二回は明治四十二三年の頃に奈良から行った。此時は曲りなりにも古建築と密接な關係ができてゐたので、人竝に吊鐘墨や薄美濃等を用意した。摺物をつくる氣だからあきれるが、相當に緊張をしてゐたのは事實である。丁度不動堂は一心院谷から現位置に移されて既に修理を了り、金三の多寶塔の修理進行中であった。「不動堂の鎌倉式の襖は、全くの推定復原で隨分苦心をしたものさ」と、其監督技師であり、續て多寶塔の方も時時京都から出かけて世話して居た京都府のK技師――ある人人の間には寺井伯爵といふ雅名で通用してゐたが――は話した。實は此時は故S博士が文部技師の資格で、出來型の檢査や工事視察を兼ね、東京から出張して來られた際で、高野山へ同行してはどうかと勸められたのを幸、單に見學生といった形式でお供をしたに過ぎなかったが、併し自分では相當に見て學んだつもりか何かで、數多の摺物を持って歸った記憶がある。

高野山金堂椽勾欄一部

高野山へ着いて、金三の多寶塔の修理狀況を見、其夜は何といふ寺へ泊ったか忘れてしまったが、當時日本畫の一流大家として盛名を馳せてゐた故T東京美術學校教授も來て居られ、他につい近頃なくなった文部技師で古建築の大家なるS氏が、未だ若くて囑託か何かで東京からS博士について來られ、更に奈良からは今は既に齡古稀を過ぎ尙ほ矍鑠として活動を續けて居られるN老が、まだ三十何歳かで颯爽と登場され、ともかくも斯道の大中小家、公認及び自稱美術家乃至其卵子に至る迄が綺羅星の如く居竝び、あたり近所お構なし、全く治外法權で各自勝手な熱を吹き、洵に天下泰平で頗る賑かであった。此夜の集合で現在心臟が皷動を續けてゐるのはN老と小生とだけになってしまったのは何といっても物淋しい。考へてみれば三昔餘り前だから仕方がない筈である。

昭和元年十二月二十六日燒失した高野山金堂西側椽勾欄の一部

其後當分の間はこの靈山へ參詣の機會はなかった。然るに偶ま塔頭龍光院に於いて瑜祇塔再建の議があり、既に先年遷化せられたが、當時の住職で後管長に昇進された加藤諦見師は、文部省と打合はせの結果、其計畫を私に委任されたので、正式の手續を經て計畫を進める事にした。丁度其頃奈良縣古社寺修理の現場監督主任級にYといふ人がゐた。實地家としては老熟の域に達してゐたので、此人と共に着手をする事にした。

其爲一度登山しなければいけなくなった。つまりどういふ位置に建てるのか、現場を見る必要があるからである。大正四年四月五日、下界はもう櫻が咲き、小さくて美しいアゲハの春型が蜜を求めて飛び巡る頃、Yと共に三度目の登山をして龍光院に宿泊をした。ところが山上は實に寒く、火燵に入ったきり出る事ができず、入浴の時衣類を脱いだところ、全身戰慄がやまず、どうする事もできなかった明らかな記憶がある。ずっと後にもやはり四月五日大雪に出あった事があったが、高野山に於いては四月の初め頃には、時としては寒氣凛烈、何とも仕方がない場合がある事が大概判るであらう。此時は龍光院に滯在二三日で下山した。

其次は大正四年八月登山、龍光院に三四日滯在して扨て歸る段になった。其頃は言ふ迄もなく電車もバスもなかった時代で、往には歩いたが、せめて歸りだけ歩かずにすましたく考へた。夫なら駕籠へのればいいが、今の様な謂はゆる「Happy Age」に達してゐないから困る。實は目あては索道の荷物の代りにのせて貰ひ度い下心で、何とかならないかと寺へ談判をした。此交渉は正に成功をした。事故があっても責任はもてぬといふ條件で索道會社の承認を得た。先づ午前何時から何時迄の間は、運轉が停止する様な事は多分あるまいから、其時間にどこそこからお乘りなさい。併し其爲に停りません、だからうまく乘らないとあぶないです、とあった。

人によっては下山する方がくたびれるといふが、私は登る方が嫌である。疲勞の仕方も多い様である。此索道利用はだから登山の時に望んでゐたが、寺との連絡不充分で見込はなかった。併し歸りでも結構で、指示された時刻に指示された場所へ行き、石炭か何か運ぶ鐵製の箱の様なものが、丁度地面に接する様な位置へ來た時、荷物を積込む人夫が、抱へてのせてくれた。人間で而も生きてゐるものだから、投入しなかっただけで、要領は全く荷物同様、上手な物馴れた手付でのせてくれた。そこで完全に索道會社の非公式公認荷物待遇無賃乘客となったのである。大正四年八月十三日の朝であった。

例ひ乘物は鐵の箱へ筵を一枚敷いてあっただけにせよ、初めてなのであちこちを眺ながら大に納ってのってゐた。私は未だ飛行機へ乘った事はないが、多分こんなであらうと思った。下を見ても前を見ても、左を見ても右を見ても、全くどうも珍らしく驚異の目を睜ったが、そのうちどうしたはずみか突然運轉が停った。同時に最初はほんの僅か上下に振動してゐた。つまり上下の緩慢な運動が始まったが、時のたつに從ひ漸く振幅が増し、大分上下しだした頃、即ち停止後約二十分位で復び動きだした。さうして終點へ着いた時、そこにゐた人夫が、乘せてくれた時と同様の熟錬をもって、うまく下ろしてくれた。これが私の空前絶後の索道旅行であった。

途中すれちがった上りの方の鐵箱の内に、坊さんの乘ってゐるのに一再ならず出會った。高野の坊さんは勝手が判ってゐるから、鐵箱へ乘って下山し、用事をすまして人里に宿泊し、朝になって歸山する時いつも利用するものと見える。警察では一般の便乘を禁止してゐたし、會社も勿論さうであるが、特約があり自分の責任で勝手に時刻を測って便乘するものと見える。私の場合は前以て寺から運轉の休止しない——若し休止しても夫はほんの僅かの時間で復舊する豫定の——時刻を選んだから都合よくいったものの、さもなくて内證でそっと乘ったりしようものなら、よく新聞紙に出てゐる様に一晝夜も宙乘りをして生死の境に彷徨し、生恥を曝す位は上等の部で、一つ間違へば極樂橋の上あたりで地獄へ往生したかも知れない。

瑜祇塔といふものは、現存の實例といへば大概小工藝品で、舍利塔の程度だし、一度や二度話をきいた位ではどうもはっきり形が呑込めないし、隨分困った揚句、大和吉野の鳥住村に鳳閣寺といふのがあり、其裏山に廟塔と呼んでゐる正平二十四年在銘の石造寶塔がある。大正元年晩秋の候初めて觀て大に感服した事があったが、實は此石塔から暗示を得て、とにか

く略圖をつくり、Yに大きく製圖をして貰つたが、この圖が完成する迄は相當に年月がかかつた。さうして漸く出來上つた圖案は、龍光院から東京に持つて行かれ、東京のさる方面で批評檢討の結果、更にG工學士に設計させ、夫が龍光院の手に納り、私のは落第して了つた。

瑜祇塔といふものは、これ程むづかしいものだ。だから大勢よつてたかつて、アーでもないヨーでもないと研究に研究を重ね漸く出來上つた圖も、實は氣の毒ながら殆んど役にたたず、寺側の無理解と僅少の費用を惜んだのと、謂はゆるゼイカンなるものが途中に頑張つてゐたとかいふのと、數多の原因が禍となり、古建築に何等の智識も造詣もなき一請負人に工事全部を任せ、工事監督者をおかずに施工した結果、さる美術家の造つた五本の相輪を除いては、洵に遺憾千萬なものが出來上つて了つた。現在龍光院の裏山の頂上に、紫紅色を帶びた怪光を放つてゐるのが夫である。

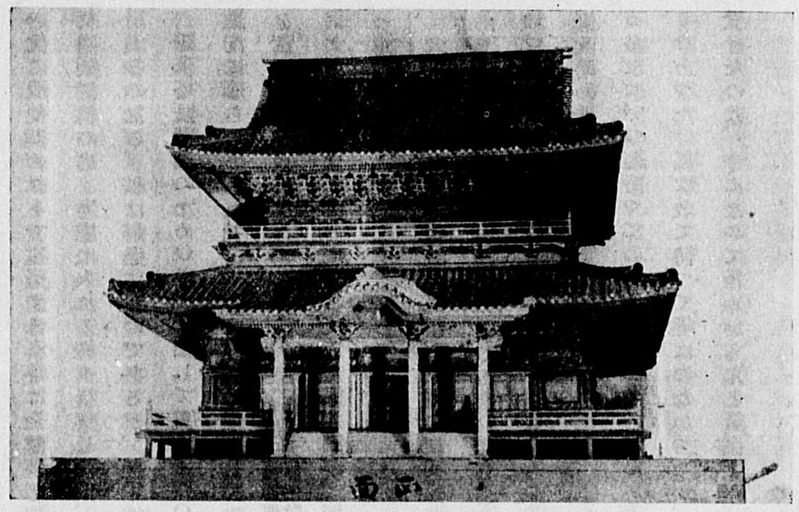
話が横道へそれて妙な方向へ進んだから、この邊であとへ戻すとして、その瑜祇塔の件で登山した後は、長期に亙り御無沙汰をしてゐた。ところがある日突然高野山からM師來訪、愈よ弘法大師一千百年遠忌記念事業として大塔を再建する事にした。就いては設計萬端よろしく賴むから、一度N氏と同道登山してくれないか、といふ話があつた。N氏は一にN師で通用する樣に、元は坊さんであつて佛教美術の研究者であつた。勿論同氏は塔の件ではないが、知りあひだから一緒にといふのであつた。

此時は既に電車ができ、高野下迄は樂に行ける樣になつてゐた。さうして高野下から自動車に乘りかへ、特別の專用道路で極樂橋迄は少しも歩かずに行けた。だから歩くところは極樂橋と高野山町との間だけになつて了つた。山上で金剛峰寺を代表した要路の坊さん方に面會をして、實地を見て相談をした。さうしてどうあつても純木造建築にする、第一弘法大師の時代に鐵やセメントで建築する事等は全然夢想だもしなかつたの等も、其理由の一とあつた。併し時代が時代だから、一應新建築材料の事も考慮に入れる樣に提案したが、當時の當局者は斷然木材のみで再建すとの意向であつた。鐵やセメントを用ふるのなら、私は辭退するのであるが、純木造との事だから、及ばずながらやつて見る氣になつた。

歸來塔趾實測のためO君に登山して貰つた。O君とは四十年來の知合ひで、氣も心もよく判つてゐたし、伎倆拔群精勵恪勤洵に珍らしい人物で、小生は絶體に信賴してゐたから、此人に製圖をして貰ふつもりであつた。同君はやがて塔趾の殘礎を實測して歸つたから、根來寺大塔（和歌山縣那賀郡西坂本村、大傳法院多寶塔）を參考として多寶塔型卽ち二重塔型に製圖する樣に依賴をした。何ケ月か後には小生の期待してゐた樣な圖が、同君の手で美事に出來上つた。そこで夫を高野山の當局へ渡して一段落となつた。

夫から多くの歲月は流れたが、大塔の復興はどうなつたか、圖はどこへ行つたか、まるで判らなかつた。尤もこちらも遊んでゐる次第ではないので、いつか忘れてしまつた。あるときこれも昔からの知合で東京方面は元より、大概の消息をよく知つてゐるN君が久久で來訪した。話をしてゐる中に高野の事になつた。N君は私に向つてかういふ事をいつた。「君は高野大塔の仕事を待つてゐるかも知れないが、あれは駄目だぜ、東京のO君の手で鐵筋コンクリートで施工する事になつてゐるんだ。いつ迄待つてゐたつて君ん所へなんか持つて來るもんか」と、あてにしてゐるのは大分おめで度いぞと言はんばかりであつた。私は敢て待つて等はゐなかつたが、最初建築材料に就いて考慮を促した時、斷じて木材にするといつたから引受けたのは、今になつて怪しからんと眞僞と確めもせず、少しばかり憤慨してみたが、それは何にもならなかつた。

*　*　*



高野山金堂模型　正面

（右方に立てる物差は曲尺の約五寸（六吋）・昭和九年八月十六日）

燒失前の金堂は重層入母屋造で前後に向拜を有する堂堂たる大建築であつた。其寫眞は私はついとつてゐなかつたので，繪葉書から複製もできず，金剛峰寺に保存してある小さい模型の寫眞を掲げ，ありし日の偉を偲ぶ事にした。これは割合によく出來てゐて，實物を髣髴させてゐる。これは元より燒失した金堂を全然知らない人のために示したので，專門家の參考に供する意志はないのである。

昭和元年十二月二十六日、不慮（？）の火災により、豪華を誇った金堂は瞬時にして灰になって了った。そこで其再建と高野山大學附屬圖書館新築と、兩方の設計を寺からT博士に依頼したとかで、ともかくも金堂の圖を何とかしてくれといふ話があったから、前に瑜祇塔の時も、次の大塔の時も、共に緣の下の力持ちに終ったのなら未だ我慢をするが、厭しつぶされて了ったのだから、三度目は何ぼ何でも敬承はできないので速に辭退をしたところ、マアそんな事を言はずに何でも形さへできてゐればとあったので、先年瑜祇塔の圖を依頼したY君に、そっくりそのまま、何でも形さへ出來てゐればと鸚鵡返しに再び製圖をして貰ってT博士へ渡しておいた。

其年即ち昭和二年四月二十八日、金堂の再建と引續いて大塔再建の要務で、T博士と同道登山をしたが、此時はT老のお供で行った最初の時から數へて足掛二十三年間に六度目、平均約四年に一回といふ勘定になってゐた。

やはり乘合自動車は極樂橋迄で、あとは徒歩か駕籠かであった。T博士は駕籠、私は歩いた。此時もまだ駕籠へのって世間で承認してくれる年輩に達してゐなかったから。比叡山延曆寺講堂修理に際し、何度も登山した時とはわけが違ふから。

天下の高野山の金堂を再建する工事に關係するのは、私には荷が勝ち過ぎてゐる。切に辭退したが遂に斷りきれなかった。第一鐵とセメントとで骨をつくり、夫に木材で衣服を着せるといふのが、はっきり腑に落ちなかった。結句T博士は構造方面を分擔して骨組をつくり、私は木材で被覆する役を引受けたのであった。即ち着物の柄、言ひ換へれば模樣體裁を考へることに話が決まった。

Y君に賴んで何でも形さへできてゐればで引いて貰った圖は、事實役には立たず、新に寺院當局の希望を主とし、私も相談會の席末に連り、今見る樣な左右に長いものにきめたのであるが、鐵とセメントで骨格を造るに當り、T博士は全體に就いて指揮されただけで、細かいところは部下の技術員が專ら衝に當ったので、强度の計算等は專門家がしたのだから、勿論不充分のあらう筈はないが、小生共の方面から申すと格好等に遺憾な點が相當にあり、着物がうまく着せられないので、少し肉を削らうとすると、骨が顏を出すだけなら我慢もするが、骨も削らなければ納らぬ所等もあった。併し夫ができぬとすると、衣服の方で讓歩しなければならないから、仕方なしにさうすると、外觀甚だ不滿足な所ができてくる。これには洵に困ったので、實の所仕立屋拜命は未來永劫辭退する決心をした樣な次第であった。此に比べると大塔は鐵骨を心にし、衣服との間が若干あいてゐたので、金堂の樣ではなかったのは幸であった。實は着物にしても、前者は何にしろ最初に出遇ったので、似合はない部分が澤山あるのは、申譯のない次第である。

金堂の工事を始めたのが、たしか昭和二年か三年の頃で、塔の再建を終ったのが昭和十年。相當に長い期間であったから、

一年平均三度としても、二十五度から三十度位は往復した筈である。交通機關としては電車で極樂橋迄行ける樣になり、索道もできた。これは謂はゆるケーブル・カアだから、料金を出しさへすれば誰でも乘れる。其終點から女人堂迄連絡の乘合自動車も運轉する樣になり、便利至極になってしまった。さうして行った序にいつも若干時間をさき、高野山にある國寶建築を全部見學をした。不動堂や金三（金剛三昧院の略稱）境内の建築等は、多少共其方面に趣味のある人は誰でも一應は見物するであらうが、奥の院へ參詣しても經藏に一瞥を與へる人は殆んどなく、況んや一心院谷の多寶塔の筋向ひあたりの高地にある藥師堂と位牌堂とに至っては、往來より遙に引込んだ所にあって、門には常に錠がおりてゐるから、まるで人の注意を惹かず、徒に雨曝らしになってゐるだけといった有樣である。例ひ古美術見學の目的で登山しても、彫刻・繪畫の優秀品が餘りに多く、其他靈寶館出陳の美術工藝品、乃至は奥の院道の徒らに大きいばかりで、形の方からはどれもこれも似たりよったりの香ばしくない五輪石塔に注意を集中し、類例稀な古建築の存在等は、全然省みないのが普通である。別に寺から依頼された次第ではないが、左に其略解を試みておく。

*　*　*

一、藥師堂と位牌堂（四〇—五一）

此等の二建築に就いては、既記の通り殆んど誰も其所在の場所を知らないといってもいい位である。而も入口の門は怪しげな苔の蒸した石階の上に、常にしめてあって南京錠がおろしてある有樣だから、塀をのり越えて侵入でもしない限り、一人で行っては建物の外側の瞥見さへ不能である。其南京錠と兩堂正面扉の鍵とは、靈寶館で監理してゐるのだから、前以て内部見學希望の旨を同館の事務所へ申出、誰かに一所に行って貰はなければ入る事はできない。併し申出たところで先方で

*　*　*

承諾してくれるかどうか判らない。だから不便至極である。

併し其不便は忍ばねばならぬ。金剛峰寺としては止むを得ずこんな事にしたらしい。理由は此等二棟の建築物の外側を一見すれば如何にも當然と頷かれるのである。即ち外側の壁面や棧唐戸の綿板につけてあったあらゆる彫刻は勿論、勾欄、擬寶珠、其他飾金具類、一切合財全部掠奪されてゐる（四〇・四一・四三）。内部では善美を盡した黑漆塗金蒔繪と極彩色の彫刻を充塡した廚子の扉・槌・懸魚・獅子口（四七—四九）、須彌壇羽目板の牡丹に唐獅子の彫刻、勾欄架木・枓・親柱柱頭等（五〇）、何れも暴力を以て毟りとってあり、實に亂暴狼藉の極みで慘憺たる光景を呈してゐる。

高野山には多くの塔頭寺院がある。眞僞の程は知らないが、道路傳ふるところによると、某某の寺には此等二建築に用ひた彫刻の破片があるといふ。現に堂内にも石炭箱に一ぱい位の破片はある。塔頭の人人のいたづらばかりではあるまい、參詣人でたちのよくないのも、何れも少しづつはもって行ったらう。だから寺としては正當防衛として、消極的ではあるが普通では入れぬ樣にしてしまったのであらう。即ち他の多くの例の樣に、かう窮窟になったのは、つまり觀覽人自身で不便にしたとすべきである。

とにかく現在は締切で荒廢する儘に任してあるが、當初は大變に立派であったのである。先づ此等二建築はどの邊にあるかといふに、女人堂の前の坂を下り、突き當りの番所の前から左折すると、波切不動尊をまつった有名な南院といふ寺がある。この寺の傍を更に左に曲り、大樹の下の蔭になった道を行くと、十數級の石階に突き當る。ここが入口で、この段を登り門を入り右折すると左手に二棟並んで建ってゐる。向って右手のが「藥師堂」で左のが「位牌堂」。二棟共同大同式。或は當初は壁面の一種の輪郭内につけた彫刻位は多少差があったかも知れないが、全部失はれた今では、その邊確實でない。

假に異つたとしても、そんな小さい所は第二で、全體としては同一と見られる。

建物は共に方三間寶形造柿葺で、正面に一間の向拜がついてゐる。其建築年代に關しては

寛永十二年兩府尹小出大和守吉英戸川土佐守正安將に台命を受けて……御靈屋尊牌堂並に本坊等を造建せんとす、同二十年落成す、其美贅言を絶せり

と古記にあるのを見ても判る通り、稀にみる美しい建築である。

位牌堂に向て左手、即ち西の方は高地になつてゐる。其高地から東を向いて兩堂を一緒にとつたのが四〇、塀の屋根にも堂の夫にも地面にも雪があるのでいやに白い寫眞ができてしまつた。藥師堂には家康の念持佛を安置し、位牌堂には秀忠の位牌を祀つたのださうな。この寫眞では椽下のところがよく見えないから、四一にだしておいた。即ち椽束は粽付の圓柱で、礎石上に更に「礎盤」があり、「隅扠首」や「椽桁」を受けるため枓栱を用ふ。これ等は總て唐樣である。勾椽は束上の枓に當るものが蓮葉にしてあるから、親柱上部は開花蓮であつたと思はれる。其上部は全部持去られてゐて、確かな事は判明しないが、何れも長い木の枘が殘つてゐるのでみると、精巧な彫刻を施した木材からできてゐたのではあるまいか。盜んだものは自分の家へ持歸つて手摺へつけたか、或は古道具屋にでも賣つて了つたのだらう。

兩堂共正面中の間に深さ一間、「向唐破風」の向拜を附してある、方柱で下に礎盤あり、柱間には虹梁をおき、中央は蟇股、蟇股と枓栱間は「雲に瑞獸」(麒麟)を充塡し、更に其上は「虹梁大瓶束」とし、「輪樋」との間に「雲に天人」を入れてある(四二・四三)。前方に出てゐる「撞」付の木鼻、及び左右の「象鼻」等、何れも正に桃山直系のものである。正面及び左右側面中の間に出入口を設け、兩開棧唐戸を吊込む。其「綿板」には天人・瑞鳥・鱗龜・唐草等を入れ、棧及び框の辻には飾金具を打つてあつたが、今一個も殘つてゐない(四五)。枓栱唐樣三手先詰組であるが、特に下方の尾樋の鼻を獏頭にしてある(四四)。普通の場合には二本共唐樣尾樋にしてあるだけで、この樣な仕事はしない(一〇七・一六三)。もつと美しく裝飾しようとするならば、內部廚子の夫の樣に二本共鼻に獸形を刻むのである(四七・四九)。樋は「地樋」も「飛簷樋」も共に放射形に配列されてゐる。これも亦既に述べた樣に、化粧隅木のうちの「地隅木」鼻に簡單な彫刻をつけ、「飛簷隅木」の先端を少し下を向けるのと共に、唐樣の一特徵である(四四。尙ほ一〇四・一六三・一七〇・一六八・一七〇等參照)。

支那・朝鮮等の木造建築はいつも隅の樋だけを放射形に配列する。即「隅扇」で、全體が扇のはないやうである。內地にも唐樣建築に隅扇のがあるにはあるが、稀であつて寧ろ特殊の例とみるべきである。然るに天竺樣に至つては、普通隅又は隅に近い所から扇になつてゐる。こんな點から考へると左のことが想像できる。鎌倉時代迄は化粧樋は常に平行しておかれたが、鎌倉時代に輸入された二新樣式は、何れも隅が扇の骨の樣になつてゐたのから暗示を得、一層の事ある一點から全部を放射させる配置法を考案し、この最もむづかしい全扇を發明したのではなからうか、果してさうなら支那・朝鮮にないのは當然といふ事になる。

樋の木口即ち先端に透彫の飾金具を打つ事は、隨分古くからあつたので、文獻は姑く措き、實物からいつても玉蟲廚子や海龍王寺五重小塔にある。併し夫等は室町時代に至る迄はほんの木口だけであつたが、桃山になつてからは横の方にも打つ樣になつた。即ち箱形につくり、木口と下端と兩横とを裝飾したのである。併しこの場合は臺輪・長押等の夫等と共に、一つ殘らず剝ぎとつてもつて行つてしまつてあり、徒にかたが殘つてゐるだけである。外部はこの樣にひどくなつてゐる。

併しながら內部は洵に美しい裝飾がよく保存されてゐる。大體が唐樣の取扱でありながら長押を用ひてあり、又天井は折

上小組格天井がはってある。**四六・四七**は僅に其片鱗を見せてゐるだけだが、其いかに美しいかは、これ等から略ぼ想像ができよう。長押が柱に會するところには「斗目模樣」を描いてある。模樣をかく代りに美しい鍍金の金具を打った例もある。此等の裝飾は桃山時代以降のものらしく、其以前には殆んど見受けない。京都でいふなら二條城二の丸御殿や高臺寺靈屋の夫等が有名である(**一八一**參照)。

內部後方中の間に唐樣須彌壇が置いてある。其勾欄親柱上の開花蓮は、藥師堂の分は二つとも盜まれて了ったが、幸に位牌堂のが殘ってゐる。この頭は盜んでも何かになるだらうが、架木等は何もなるまいのに、やはりどこかへもって行ってしまったらしい(**五〇**・**五一**)。黑漆で塗り、一面に金で唐草を描き、隨所に鍍金の飾金具が打ってある。上下繰形の間の羽目板の部分は、束を以て三つに區劃し、各羽目板に「牡丹に唐獅子」の極彩色彫刻を入れてある。

唐樣でも室町迄の須彌壇のは、束は常に眞直であった。桃山になっても其以後も、勿論其系統のものはいくらでもあるが(**例は一一三**)、同時に外方に少し張りだした曲線形をしたのもできだした(**例へば奈良法華寺本堂須彌壇・慶長六年**)。ここのも此種ので**五〇**で見る樣に外に膨らんでゐる。併しこれもよく考へてみると、桃山になって急に外に膨んできたのではなく、既に室町時代に屬する瑠璃光寺五重塔(**山口市**)の初重の圓形須彌壇の束が曲線狀を呈してゐるところをみると、既に其頃からそんな氣運になってゐたのかも知れない。どうも大して感心のできない形だが、後にはかうしなければならないとでも心得たものか、江戸末から明治へかけた——實は其後のも——大工棟梁の指揮した大佛殿のはきまってこの手である。

「牡丹に唐獅子」を羽目板に入れた最古の例は、例ひ後の修理が入ってゐるにせよ、弘安五年の建築たる鎌倉圓覺寺舍利殿の夫である。あの古い部分も、堂と同時のものか或は後れるか、その邊も實は研究はしてゐないが、大概よからうと考へてゐるのである。以後例は決して珍らしくない。殊に唐樣の佛殿等となると、この部分には牡丹に唐獅子を入れなければならないと思ふ樣になったらしい。時には子獅子を添へ、親子で一小間占領してゐるのもある。さうして敢て須彌壇ばかりではなく、墓股脚內を占領してゐる例も多い。

牡丹は支那が原產地だとか、或はもっと西だとかいふ事である。とにかく支那から輸入されたものださうな。白井博士の【植物渡來考】によると、天曆(**醍醐寺五重塔は天曆五年**)の頃には牡丹は既に渡來してゐたさうな。ボタンといふのはどこの國の發音か知らないが、植物學をボタニーといふのは、牡丹から來たのだらうといふ說は頗るあぶないさうである。建築裝飾に用ひられた牡丹の花は、殆んど白か紅かにきまってゐるやうだが、アカといふうちにもいろいろ變った色があり、又アカとシロの絞りや紫がかった色もあるさうだ。とにかくその謂れ因緣附の牡丹と唐獅子——獅子が渡來したのはいつか知らぬが、これは遙に早く文樣や裝飾彫刻として、圖案化されたものが廣く賞用されてゐた事は牡丹等の比でない——のうち、一つをそつくり其儘掠奪してしまってある(**五〇向って右端**)。

唐樣の須彌壇には、大概唐樣の勾欄がついてゐる。唐樣勾欄の第一の特徵ともいふべきは、親柱の頭が擬寶珠になってゐる代りに蓮花になってゐることである。擬寶珠といふのは、誰でも知ってゐる通り、橋の欄干の親柱の頭の形で、牛若丸が足駄ばきのまま、片足であの上に立ってゐる非常に不安定な感じのする繪でお馴染のものであり、偉大なる葱花の樣な形をしてゐるが、實はあれは蓮の蕾である。花瓣を其面に刻みつければ直に頷ける筈であるが、夫を略したに過ぎないのである。回教建築の勾欄親柱が擬寶珠型で、日本のによく似てゐるといふのも、やはり蓮蕾だからで、元は一つであるのである。古代の塔婆、例へば當麻寺兩塔の水煙に寶珠型のものがついてゐるのも、蓮蕾を意匠し圖案化したものである。併し蕾は其ま

まにしておけばいつか咲く。きく所によると蓮花は開いたりつぼんだり、一日中も時間によって一定してゐるのださうだから、咲いたからといって花瓣は下に垂れはしまいが、そこを少し意匠をすると**五一**の親柱柱頭の樣になる。だからこれは「開花した蓮」の圖案したものであるのに、一般に「逆蓮」と呼ばれてゐるのは間違ひである。この種の蓮を柱頭裝飾に用ひたのは隨分古いことであり、印度に於いて既に阿育王柱の柱頭に現はれて居り、現在北印度の各地に於いて見られるものである。恐らく日本へは蓮蕾卽ち擬寶珠は佛教建築と同時に輸入され、勾欄親柱は元より　寶形造の露盤の上、又は銅燈石燈等の頂上に用ひられたのであらうが、全部亡びたものの如く、古塔婆相輪の頂上及び曩に指摘した塔婆の水煙に殘ってゐる位のことで、現在は平安時代より古いものは未發見の樣な有樣である。

然るに開花蓮のは、蕾と同時に入って來ても直に趣味の相違から淘汰されてしまったものか、或は何かの都合で入って來なかったものか、鎌倉時代になって唐樣建築について、初めて――或は二度目に――入ってきたものらしく、禪宗建築の勾欄といへば、これでなくてはならない樣なことになって了った。柱も花も千差萬別で、いろいろの意匠があり、例へば柱にしてもこの樣に圓壔形のもあれば四角形・八角形等もあり、其面もただ圓いもの、或は胡麻殼決りを施したもの（**例へば一五三**）、乃至溝彫りをしたもの（これは實例非常に稀で、僅に京都深草の寶塔寺多寶塔須彌壇勾欄親柱の一例を知るのみ。室町時代）等をあげ得る。尙ほ其上方に向へる未開の部分の形にも種類があり、後世になると下に垂れた花の上に擬寶珠をのせたのがある。

親柱に開花蓮を用ひたときは、科束の科は普通の科を用ひず蓮葉にする。つまり「蓮葉束」にするのである。さうして正面の勾欄は三本の水平材――架木・平桁・地覆――を通さないで、途中適當なところで切る。平桁は途中に茨を一つつくり、地覆の上につけ、更に夫に平行して架木にも茨をつくり、其先端は「蕨手」にするのである。これが公式だが、夫を少しかへるといろいろ異なった形ができてくる（**一例は一五二**）。此場合勾欄は漆塗の上に金蒔繪の唐草で、立派ではあるが平凡である。

此須彌壇上の厨子は方一間、殆んど唐樣といってよろしく、科栱「三手先」詰組であるが、尾棰は上下の二本共獸化（象と獏とであらう）して居り、正面中央に軒唐破風があり、屋根は入母屋妻入にしてある。唐樣建築には蟇股は用ひないのが原則だが、ここには美しいのがある。これはほんの裝飾用で、いくらはがしても取れなかったぜゐか、幸に被害はないが、唐破風の「兎毛通」も入母屋破風の懸魚も、共に亡い。正面も扉はここのは持って行かれて判らないが、位牌堂の分が半方だけ殘ってゐるので、これも多分同じものであらうといふ見當がつく。よくもこの位荒したものだと、はぎとった跡を見ても只管感服するばかりである（**四七―四九**）。

次に軒の唐破風について觀察をしておく。兩堂とも向拜の上がやはりかうなってゐたが（**四二**）、あれは唐破風だけが前に出て居たのだし、これは軒の一部分になってゐるだけの差である。併し名を呼ぶ時には、前者の樣なのを「向唐破風」といひ、後者は「軒唐破風」といって區別をする。唐破風のついてゐる門を「唐門」といふが、これに二種あって、正面に向ってゐるのは「向唐門」、側面に向いてゐるのは「平唐門」といって區別をする。唐破風は鎌倉以前にはない。この形は例へば宇治の鳳凰堂中堂正面廂の中央の一段高い部分と、兩方の低い部分とを斜に結合して、其曲線を少しなめらかにすればできるから、さういふところから發達したのかも知れないといふ說を述べた人がある。如何にもさうらしく考へられる。此が果して事實なら、京都花園妙心寺塔頭退藏院玄關の梯形破風は、時代は新しいが原型をよく留めてゐるといへる。

「からはふ」といふ名稱はどういふ所からきたか私は未だ考へつかないし、調べてもゐない。その「からはふ」に「唐破風」といふ字を當嵌め、從て唐破風のついてゐる門は「唐門」と呼ぶ樣になった結果、「唐」の字がつくので支那式とでも思って

ゐる人もあると見え、「唐門」とは支那風の門と解し、ある時ある外國人が、からもんとはどの樣な門かとの問に、唐門とは支那の門といふ意味だ（Karamon means Chinese gate.）といふ答をしてゐるのを傍できいた事があった。これとよく似た話は、ある時ある所へ古建築を見に行ったら、そこに立札があり、此門は印度風のところがあって大變に珍らしく貴重である、といった意味の文句が書付けてあったので、何の事か判らなかったが、多分これは斯道の專門家から、謂はゆる天竺樣式のところがあるといふ事をきき、天竺とは印度の別名だから、天竺樣とは印度風といふ事と速斷し　其意味を記して掲げたものと見える。チャイニース・ゲートと印度式と、好一對の無意味な言葉として笑ってばかりも居られない。

其「から破風」の形は時代によって大分の差がある。なれない眼には同じ樣に見えるかも知れないが、一般に古いの程くりが淺くて兩脚（といふか或は兩袖とでもいった方がいいか）は充分に左右にのび、甚だ安定に見える。併し漸く新しくなるに連れ、くりが深くなってくる傾向がある、つまり彎曲の度が多くなり、脚も短かく從って兩端に水平な部分が少くなり　殊に箕甲の邊はおそろしく格好がわるく、外觀は大に醜くなって了うのである。まだ併し寛永位では相當に形はよろしい。

二、不動堂本堂（五二―六七）

此堂は元は一心院谷にあった。其頃のことは私は知らないが、古い寫眞によると、前掲の藥師堂　位牌堂を距る遠からざる所に、やはりあの側卽ち番所の前を左へ行った道路の左側にあったが、修理の時、多分火災の危險と監視の便との爲、現位置に移したのであらう。現位置とは金剛峰寺の方から伽藍へ參詣する道の終る所、大塔や金堂が建ってゐる高地への石階のある左手に東面してゐる（五二・五三）。鳥羽天皇の皇女八條女院の御願により、建久八年行勝上人の創建と傳へ、桁行五間梁間四間單層入母屋造檜皮葺の小建築であるが、四隅が少しづつ形を異にしてゐるので、其眺めは同じでない。そのためか四人の工匠が別別につくり、持よって一つに造り上げたといふ傳說がある。四角な堂等の四隅は常に同じであるべきのが、異ってゐるためこんな傳說をつくり上げたのであらう。

圖でみる樣に四方に廻椽があるが、正面と背面と中三間の分は一段高くしてある（五二）。中央の三間四面が主堂で、其北側と南側の室は附屬屋といった體裁である。だから主屋はこの部分だといふことが、外からでも明らかな樣にしたものか。椽は上記の部分を除き、兩側面から正背面の一部にかけて一段低い。又左脇の間卽ち北側の附屬室は、其後方が南側の夫より一間だけ少ない、換言すれば西北隅の方一間がないから、そこは入隅になってゐる（五三）。

正面兩端にある方一間吹放の部分の床は、椽よりは框一本だけ高く、正面三間は蔀戸を吊り、左脇の間の東面（卽正面）には引違繁棧戸をたて、右脇の間の東面には引違格子戸をたてある。同じ引違の建具であるが、北と南とで繁棧戸と格子戸との違ひ、僅かの事だが變へてある。併し主堂から直接にこの吹放の部分に出るのは、兩側とも同じ板扉を用ひてある。背面では中の間に兩開板扉を吊ってある。だから主堂と外部との交通は正面半蔀、兩側面東より第一の間及び背面中の間は兩開板扉である。

既記の通り屋根は入母屋造ではあるが、兩附屬室がなければ左右は切妻になったかも知れない。といふのは兩脇の間は前面から背面へかけて、卽東側も西側も「縋破風」を以て主堂にとりついてゐるからで、若しこれがなかったとすれば、丁度切妻になる樣であるから、さういふ風に思へるのである（五二）。斯樣に主堂の兩方へ「縋破風」をつけたのは、當代のものとしては京都宇治の宇治上神社拜殿がある。だから獨特とはいへないが、珍らしいことは確かである。かかる意匠は恰も近江阪本の官幣大社日吉神社の建築――神社建築としては特殊の樣式であるため「日吉造」又は「聖帝造」といってゐる――

の背面をみる樣で、夫とは幾分の差があるだけである。

故に此堂に於いては附屬室はどこ迄も附屬で、主堂との相違が下から上迄はっきりとしてゐて、輕快な形の變った建物である。さうして正面兩端に方一間の吹放の部分があり、其外側の椽が一段低くしてあるのは、前代の邸宅建築なる寢殿造から暗示を得たものと思はれるので、つまり邸宅建築が佛寺建築に影響した好例で、木割も細く正面には半蔀を吊り込んだりしてゐるから、これは佛殿等といふ四角張ったものよりも、寧ろ邸宅風を加味した持佛堂といった形、どこ迄も親み深い建築である。

主堂の椽と兩脇の間の椽と、一段の差があるのは敢てこの堂ばかりではない。脇の間ではないが、內陣の椽を一段外陣の夫より高くした例が、同じ鎌倉建築なる明通寺本堂(**一三三・一三四及び其解說**)にある。これも亦外から見てどこからが內陣だといふことが判る。未だもっと他にもあるであらう。とにかく鎌倉時代には時折かういふ風に造ったものかも知れない。

正面中の間に深さ一間の向拜をつけてあるが、外側の柱は總て大面取の方柱で方六寸八分、面內の幅四寸九分乃至五寸五厘位、故に面見付平均約九分だから、其比約$\frac{1}{7.5}$となり、鎌倉時代の割合といへる。肘木も亦下端は面取、枓は大部分——實は二所を除き——「三枓」を用ひてある。大枓幅八寸七分高五寸六分、其比約$\frac{6.4}{10}$、卷枓幅六寸七分高三寸九分、其比約$\frac{5.8}{10}$。鎌倉枓は大體幅さと高さの割合が$\frac{6}{10}$だから、卷枓は少し背が低い方である。棰と枓との關係も、大體は「六枝掛」になってはゐるが、勿論正確にさうなってゐる次第ではない。面白いのは北側附屬室軒下の枓栱が「舟肘木」にしてある事で、三枓でも何等差支があるとは思はれないのに、どういふものか變へてある(**五七・五八**)。**五六**から**五九**迄を比べてみると、三枓で工合が不良なら、柱を短くすれば別に工合のわるい事はない筈である。夫だのにかうしたのは、以前にはこの側がよく見える方にでも向いてゐたので、どこ迄も輕く見せる目的でしたのかも知れない。同じ樣な條件だのに南側の枓は三枓になってゐるのをみても(**五九・六〇**)、どうもさうしか考へられない。

枓栱間には純粹の裝飾蟇股が用ひてある。鎌倉一流の左右相稱の圖案的原始的(洗練されて完好ではあるが)彫刻が兩脚の間に入れてある(**五十・六二・六三・六四**)。種類は先づ三種だが、精確にいふと四種になる。最も多いのは**五七**・**六二**ので、總數十八のうち十五を占めてゐる。**六三**及び殆んどこれと同じ意匠のが一個づつ、さうしてこれは北面西端、卽**五八**の右端の位置にあり、他は同じく北面東端の外側(**六二**は吹放の部の內側にあるもの)に用ひてある。つまり二つ共北側にあるのである。さうすると前記の樣にこの側の柱上に、三枓の代りに舟肘木を用ひてあるのと共に、原位置にあった時の有樣も略想像ができ、建築家の苦心のある點も推察ができる樣な氣がする。

六四は背面中の間ので、左右から中央に向ってゐる唐草は最多の種類の夫と殆んど同一であるが、中心飾が花の上に乘った火煙付の寶珠から成ってゐるだけの差である。此花は蓮花とは思はれない、先づ牡丹か寶相花位のところではあるまいか。何であらうとも、とにかく花は花であるから、さう深く何であるかを詮索するには當るまい。他の部分がさうでなく、背面中央の間だけに寶珠入の蟇股を使った例は、奈良縣の高鴨神社本殿(南葛城郡葛城村)にある。さうすると鎌倉・室町時代に各一例づつあるわけである。

敢て背面中の間と限らず、中心飾に寶珠一個を入れたものは、少ない事は少ないが、さう大して珍らしいといふ程でもない。試みに記してみると

鎌倉時代

村社戸隱神社向拜（奈良縣添上郡東山村桐山）
淨土寺多寶塔初重（尾道市）
室町時代
八幡宮本殿（愛知縣寶飯郡八幡村）
官幣中社嚴嶋神社攝社荒胡子神社本殿（廣島縣佐伯郡嚴島町）
今八幡宮本殿（山口市）

位であるが、未ださがしたら幾棟か出てくるであらう。

右の內尾道市淨土寺多寶塔の分は、北側につかってあるが、塔は四方正面で、どこから見ても同じだから北側だからとて背面とはいへないかも知れない。併し南が正面で、內部の佛像も皆南面してゐるのからいふと、北はたしかに背面になる。さうするとあれも亦背面中の間に用ひた一例とすべきである。さうすると背面中の間にこの種の彫刻入の蟇股を用ひた例から鎌倉から室町へかけて三となり、何かそこにその當時は理由があったと思へなくもない。尙ほ寶珠三つを中心飾にした例なら、一個より珍らしくない。花肘木の中心へ入れたのなら圓成寺樓門（奈良縣添上郡大柳生村忍辱山）にあるし、其他軒瓦の中心飾・鬼瓦の額・佛像の臺座　光背・虹梁下端の錫杖彫等、と主して鎌倉から室町へかけて隨分廣く應用されてゐる。

次に內部に移るが、主堂は內外陣の境に太き圓柱を立て、外陣との區別をしてゐる。內陣は前後に長方形をなしてゐる。つまり三間四面の周圍に深さ一間の外陣をとり、內陣は一間二面になるべきの所を、梁間中間の柱をやめたので、方一間になったのである。其後方の柱間に板壁をつくり須彌壇を設く、外陣と內陣との境には長押以下には區別はなく、天井も內外

陣共何れも「折上小組格天井」であるが、內陣の天井が外陣の夫より一段高くなってゐるだけのことである（六五・六七）。これでは內外陣共天井は同じで、まるで差がないが、斯樣に全く同じ折上小組格天井を用ひた例は、既に平安後期の建築たる白水阿彌陀堂（福島縣石城郡內郷村）に於いてみる所である。內外陣の區別が嚴重な例は法隆寺の聖靈院で、正面柱間には六枚、左右側面柱間には引違の、何れも格子戸をたてたてある。これ等と比べてみると、當代には全く區別のないのと二種の取扱があったのかも知れない。其原因は建築の大小によったか或は宗旨によって異なったか、その邊は私には判然しない。

須彌壇及び勾欄（六七）は黑漆塗、勾欄寶珠柱の擬寶珠の形は、鎌倉に普通の先づ公式通りのものに比べて遙に大きいが、これは除外例とみるべきで、後世の夫の樣に不格好に大きくない限り、これでも少しも差支はない。「篠」（節のこと）の間には蓮花唐草の毛彫が一ぱいあるが、夫等から見ても、鎌倉時代としてよろしい。其他勾欄の各所に打ってある飾金具は、何れも當初のものである。須彌壇の羽目板に刻んである「格狹間」は、中心飾に花模樣を持った、此時代に類例の多い輪郭を有するもので、底板には盲連子が刻んである。

此羽目板は黑漆塗、輪郭の深さ約五厘で面は朱漆。中央の花模樣は、下の兩方に卷いてゐる部分は赤黑く、中心の上に向ってゐる飾の花模樣は鼠色の樣だが、原色はどうであったか判然しない。盲連子は白緣が塗ってある。この格狹間は堂內にある大壇の側面についてゐるものと殆んど同じで、實は全く同一といってもいい位である。さうして此分の彩色も亦須彌壇の夫と甚だ似てゐる。

此種の格狹間は、當代刳抜蟇股兩脚間に、兩肩から下がって來て中央で出あひ、上を向いて中心飾となってゐる彫刻と同じ意味のものである（例へば一三・一九二）。蟇股も格狹間も、この樣なのは鎌倉時代に入らなければ遺物はないから、できたのは多分

當代であらうといふ想像は事實に近いとして、然らばどういふところから斯樣な形ができたかは判然しないので、どうも甚だ遺憾ではあるが、凡その見當ならつかなくもない。即ち前代に於いて佛像の臺座等にこの種の形が見出される。夫をかういふところへ應用したものであらう。今のところ夫位のことしか言へない。

北側の附屬室（即左脇の間）は床に疊六枚を敷き、小組格天井ではあるが折上ではなく、主堂の側を除き長押と「天井廻縁」との間にせの高い肯連子を入れてある（**六六**）。主室の外陣のこの部分にも、內陣の夫程背が高くはないが、やはり肯連子を入れてある。斯樣な位置に縱なり横なりの肯連子を入れることも亦、鎌倉時代に始まったものの如く、さうして和樣建築に限られてゐる。一二の例を擧げるならば、法隆寺聖靈院・藥師寺東院堂の如きである。南側の分は前後（東と西と）の二室より成り、前室は疊三枚、後室は床拭板敷で猿頰天井。主堂と脇の間との境界の紙張襖は、明治四十一年ここに移して大修理をした時の推定復原といふ（**六七**）。

*　*　*　*　*

堂は桁行四十二尺八寸五分、梁間三十四尺五寸一分、本尊不動明王及び八大童子。純和樣建築。

三、**金剛三昧院多寶塔（六八—七四）**

貞應二年平政子の建立と傳へ、運慶作と傳ふる五智如來を安置す。外觀は略ぼ同時の建立たる石山寺多寶塔とよく似てゐるが、初層に椽勾欄がないのと、枓栱に蟇股を用ひてある差がある。併しながら此塔の椽は全部後補だし、修理前の狀況は知らないのだから、椽が全部とれてなくなってゐたか、或は少し位殘ってゐても再三再四の修理で勾欄を略してあり、從て確證がないのでやめにしたか、とにかく今は無いが當初の事は判然せぬ樣に思ふ（**六八**）。上層は公式通りのもので、別段眼

竿椽天井。

猿頰天井。

唐樣。鏡天井（一平面の天井の事）。

天竺樣には天井なし。但し除外例あり。

*　*　*　*　*

須彌壇は先年大修理の際、監督技師の意匠によって新に製作したものか、或は此時より以前の修理に當り、在來の型により材料を新にしたものか、何れにしても當初の型式とは思はれず、其意匠は寧ろ室町式で、鎌倉としてもずっと末期に下がるらしく、何としても貞應迄は無理であらう。どうも勾欄なんか室町迄もむづかしく、總てが輕薄で片片たる須彌壇である。此工事を監督したK技師は伎倆拔群で古建築に對する造詣極めて深い人であって、私は常に敬意を表してゐたのだから、恐らくこの樣な輕薄須彌壇を造りはせられなかったらう。金三できいても判らないし、文部省に於ける當時の工事關係者は皆逝去されたし、K技師は勿論幽明境を異にしたし、洵に殘念ながら今のところ判然しない。

四、金剛三昧院經藏（七五—七八）

文部省で作成された調書に「……貞應年間平政子の建立で、他に類例乏しき鎌倉時代の校倉造の一好標本……」とある通りで、小さいが珍らしい建築。多寶塔の正面の小高い所に、其右側面を向けて建ってゐる（**七六**）。正面出入口のところと屋根とに少し修理が入ってゐるが（**七五**）、大した事ではない。軒廻の構造は頗る面白くできてゐて、巧みな方法で桁を支へてゐる（**七七**・**七八**）。夫を簡單に説明してみると次に記す樣になってゐるのである。

欠

先づ内部に入ってみるに、桁行を三等分して其所に前後に桁を架渡し、其桁の中央から左右の側面及び隅行に繋梁を出す。此等が外部に出た先を肘木狀に削り、其先端に科(**七七**)又は鬼科(**七八**)をのせ、前者では桁の中央(正面及び背面では前後に架渡した梁の先を肘木にしてあるから、正面と背面とでは夫夫二)、後者は隅で軒桁の交叉點を支へ、その部に化粧隅木を仕掛けてある。更に四隅を補強するため、壁體を造ってゐる五角形の水平材のうち、最上部の二本を他のものより少しく長くして、其上に桁をのせてゐる。かくして容易に目的を達してゐるので、洵に巧妙なる構造法といふべきである。

五、**金剛峯寺奥院經藏(七九—八八)**

高野山奥院の弘法大師の廟墓の右手に、方三間單層寶形造檜皮葺の素木の建築があり、參詣者の一團が拜んだ直後は、線香の煙で殆んど建築物は見えない位、煙幕をはった如く濛濛として了ふ繁昌ぶりは不思議である。多分奥院へ參詣した序に何だか判らずにお參りをするのだらう。

七九の寫眞は夏の暑い時で天氣がよかったから、太陽は高く位置し、日があたってゐるのは屋根だけで、軒裏と軸部は眞黑で、何が何だかまるきり見えないが、實は正面軒下に大きな額が掛けてある。其表裏に文字が刻みつけてあるのを拓本にとっておいたから、參考のために挿圖しておいたが、銘文は大きな文字で極めて明らかである。これによると「慶長四己亥年三月二十一日」に書いたもので、此輪藏は高麗版の一切經を收藏すべく、石田三成が「悲母の菩提の爲」に建立した。さうしてその本願は「木食興山上人深覺房應其」だといふ事がよく判る。

外部は素木造で割合に簡單であり、科栱和樣出組、科栱間は蟇股であるが、背面は殆んど見えないためか、間科束にしてある。**八〇**は右側面の後方の隅柱上のところを寫したもので、これでみると和樣の圓柱と臺輪のところへ唐樣系統の木鼻を

高野山金剛峯寺奥院經藏額刻銘拓本　(上,表·下,裏)
(昭和七年六月十日·天沼手拓)

出して居り、この木鼻も桃山時代をよく現はした繰形をもち、其他ここに見えてゐるところは總て和樣であることが容易に看取できるであらう。其他寫眞には出てゐないが、軸部には長押を用ひ、窓は連子にしてある點、何れも和樣であるが、たゞ正面及び兩側面中央の間に吊込んである扉は、何れも棧唐戸であり（背面は何れも板壁で中の間に扉なし）、これだけが唐樣である。

內部は科栱出組、化粧屋根裏で、柱・臺輪・長押・科栱・壁板等隨所極彩色を以て線條文・唐草・佛像等を描く。大分剝落してはゐるが、上の方にはよく彩色が殘って居り甚だ美しい（八一・八二）。其上に化粧棰は丹、裏板は胡粉塗だから一層美觀を呈してゐる。床は拭板敷。

中央に輪藏がある。輪藏といふのは經卷を入れてある書架の樣なもので、殆んど常に八角、中軸で廻轉する樣な設備にしてある。ここのは下部は圓形だが上の方は八角形である（八三—）。【禪學辭典】に

一切藏經ををさめおく藏。經堂のこと。又は輪藏ともいふ。

と至極簡明に定義を下してゐる。【禪林象器箋】には、輪藏に長い說明を與へ、そのあとに

設機輪。運轉法藏ヲ也。傳大士創造ス。

とある。つまり內部の廻轉する書架が大事なので、建築其物は輪藏の覆屋に過ぎないのである。だから第二次的のものである。併しさうぞんざいにしてはない、のみならず時には非常に立派に裝飾をしたり、又經卷を轉讀する場合のためか、兩傍に前後に長く座席を設けたのもある。私の知ってゐる最も善美を盡し、設備の行屆いたのは日光東照宮上神庫前に東面して建てる外觀重層の寶形造の經藏で、內外共洵に申分のないものである。年中締切にしてあるのは勿體ないと思ふ。併しどこ迄も內部中央の廻轉し得る經架が主であるが、何百卷といふ大部のものを讀む事は容易でない、だから全部が箱に入ってゐるまま一廻轉して、それで讀んだ事になるのだから、人助けの大發明といふべきである。さうしてこの大發明をしたのが傅大士（デンダイシだの、ハクダイシだの、勝手な名で呼ぶ人があるが何れも間違。「傳」も「博」も字が少し異ふ）といふ人ださうな。傅大士は世人が經を讀む暇のないのと、字を識らないのとを愍み、轉輪藏を創め、之を推して一匝する時は則ち誦經と其功等し、といふことにしたのだといふことが書物にある。此人は東陽郡烏傷縣稽停里——といふのはどの邊か知識皆無で私には判らない——の人で、姓は傅名は翕字は玄風といひ、大建元年四月二十四日に亡くなったといふ。年表を引いてみると、大建といふのは支那では陳の宣帝の時で、其元年は我が欽明天皇の三十年、西紀五六九で皇紀一二二九に當ってゐる。何分古いことで、この邊確かかどうかよく知らないが、こんなに昔支那で發明されたのなら、もっと早く日本へ入って來てもよかったと思ふのに、どういふものか、室町時代より古いものは現存しないやうである。さうして輪藏の前に椅子に腰をかけた鬚を生やした人をおいてあるのは、傅翕氏の像で、發明者に敬意を表したためとか。時に左右に寒山拾得の樣な立像をそへてあるが、これは二人の子の普賢・普成だといふ。內部が狹いせゐか奧院經藏には何もない。

內地の寺の經藏の內部に輪藏がある場合は、いつも中央に一つにきまってゐる。經藏も大小の差こそあるが、常に正方形の平面だから、其中央に輪藏をおくのは當然である。支那のは知らないが、朝鮮には左右に長い經藏の內に、東西に一つづつ合計二つ、東輪藏・西輪藏とでもいったらよささうなのがある一例を知ってゐる。慶尙北道醴泉郡龍門面內地洞の龍門寺大藏殿が卽夫で、輪藏は何れも八角、型式も內地のとは大分異り、東方のは八方の格子の大部分が失はれたと見え、後補のもので間に合はしてある樣だが、西輪藏のはよく保存されてゐる。

* * * * *

扨てこの經藏内の輪藏であるが、これは除外例ともいふべきで廻轉をする設備になってゐない。つまりつくりつけである。從て輪藏といふ名は不都合であらうが、便宜さうしておく。床上に圓形の臺があり、臺の上に一種波形の繰形を有する座があるが、蓮座にすべきのを蓮瓣を連續してこの樣につくり、當初は彩色で描いたのかも知れない。其上に圓形の蓮座臺上に同じく圓形の無限勾欄を設く（八三・八四）。この無限勾欄の内方、輪藏の腰に當る部分も亦圓形をなし、柱をたて其柱から挿肘木を出し、三手先枓栱を以て上の椽框を支へてゐる（八三）。其三手先の肘木は唐樣で、挿肘木は全く天竺樣式であるところが寫眞で明らかに看取できる筈である。ここから上が八角形になるのである。

輪藏には大概引出しをつくり、一つの引出しに何部といふ工合に經卷を入れ、入りきらぬ場合は二重につくるから、前のをぬかなければ後ろの引出しをあける事はできないのである。だから殆んどきまって八角形である。さうして引出しはこの場合の樣にむきだしになってゐるが、叮嚀なのになってくると、各面に兩開の唐戸を吊り、先其唐戸を開かなければ引出しはぬけない樣にしてある（日光東照宮の輪藏）。何れにしても圓壔形では始末によくないから、八角とした上に各角點に細長なる柱を二本たて、僅かな場所をとり、上に天井を設け、内外の柱の連絡に小型の海老虹梁を用ひたりする。其上に經藏其物の樣式はどうであらうとも、輪藏はいつもきまって唐樣にする。日本國中隅から隅迄一つ殘らず寺を探したら、或は和樣の輪藏もあるかも知れないが、私は寡聞にして未だ嘗て見た事はない。

唐樣なら取扱はきまってゐる。而も前記の樣に形もきまってゐるとすれば、異なったところで細部だけの事である。組いの詰組の枓栱間にいろいろの透彫を入れてあるなかに、「瓜」があるのはさすがに時代が降ってゐるからである（八六右下）。木鼻が込み入った透彫にしてあるのも亦同斷。夫から天井に注意すべきで、組入天井を少し一方から壓し潰したともみられるが、確かに珍物たるを失はない。この種の「菱天井」も、大きな室へは少し似合はないかも知れないが、この位のところだとよく調和がとれてゐてよろしい。此他に目下の所私は奈良縣生駒郡富雄村の靈山寺本堂向拜の小天井が菱になってゐる一例を擧げ得るのみである。

嚴嶋神社五重塔と多寶塔

（八九—九九）

今の子供は活動寫眞でないと承知しないだらうが、私が小學校へ通つてゐる時分には幻燈しかなかつた。尤も古風な幻燈は今でもあるにはあるが、それは好事家が所望でみるだけで、實用にすることはできない。そこで現在は使用するにしても頗る高級のである。私は元來喋る事が不得手なので、講演の時等に其拙い喋り方を補ふために、反射幻燈を用ひて寫眞を大きくはつきりとだし、これでどうにかお茶を濁す。元よりこんな堂堂たる高級のものが昔ある筈もなし、又あつてもどうにもならず、子供の手遊び用の、極めて幼稚で粗末で不完全なものであつた。使用の燈火にしても、あの頃——今日より五十五六年前——あつた豆ランプ、心の直徑が一分五厘位で極小の火が點る程度、電球にしたら一燭光にも及ばないものだつたし、繪を擴大するに用ふる連子としては、泡だらけの球形中空の硝子瓶で、内に水を入れたもの。箱も杉か何かで造つた粗品であり、價三十錢とかいふことであつた。

硝子製のスライドも亦、此器械に負けない程の原始的のものであつた。數ある中に下から上にせり出す樣になつたものもあつたが、そのなかに「安藝の宮嶋」といふのがあつた事を記憶してゐる。これは嶋の寫眞ではなくて、あの廣い面積に配置されてゐる建築を、いい加減に幅一寸高さ七八寸位の硝子板に描き、桐製の細い枠のうちにおさめた嚴嶋神社の全景であつた。併し今ではどの樣な繪であつたか、全然覺えがない。けれども其繪を寫すとき、母から安藝の宮嶋だときかされたので、さうかと思つたのと、何にしろお宮さんの繪ばかりなものだから、なぜこんなに澤山神社ばかりあるのか判らなかつたのと、どうも子供心にあの繪はつまらなかつたので、私はすきでなく、寧ろからかさのお化けや達磨の踊りの方が餘程面白かつた。

其時から何年か過ぎ、中學から高等學校といふ工合に人並に順序を經て、卒業する迄は勿論、した當座は尙ほ土木工學を專攻するつもりの所、妙な方向から吹いて來た風に吹きまくられ、漠然と東大の工科大學建築學科といふのへ入學をした。第一學期の始る約十日前になつて轉科願といふのを提出し、土木から建築へ替つたのである。ところが一年生の修める科目のなかに日本建築史といふのがあり、古いところから順に講義を拜聽してゐるうちに、嚴嶋神社といふのがでてきた。これがつまり廣島縣佐伯郡嚴嶋町鎭座の官幣中社であることを知つた時、直に思ひだしたのは子供の時の幻燈のスライドにあつた「安藝の宮嶋」であつた。

社殿が山と水と空と相まちて、とても美しいといふ話を承り、何も判らなくても色盲ではないから、色の配合位は何とか見當がつく自信がある。だから一度行つて見度かつたが、凡そ旅行には暇と金とが必要だといふ鐵則があるので、何とも方法がつかないうちに、地球が太陽の周圍を十數度廻轉して了つた。一廻轉毎に一つづつ歳をとるので、年齢も三十を突破し、到底見込はなささうなので少しばかり失望をしかけた。所が實に幸なことに、明治四十三年三月末になつて初めて參拜ができた。幻燈でみてから正に二十四年目、學校で講義を承つてから十三年目、漸く目的を達し得た。今とちがつて汽車も隨分すいてゐたし、樂な旅行であつた。先づ社務所へ行き、當時の禰宜K氏に面會して來意を申述べた所、直に全部を案内して

頂くことができた。この時分は未だ大修理以前であったので、五重塔に相輪はあげてなかった。この時の有様は私の手帳に

嚴嶋神社五重塔

今各重支柱ヲ挿入シ九輪ヲ除去シアルガ故ニ格好整ハズ、唐様三手先、支輪ヲ用ヒズシテ代リニ板ヲ張レリ、柱ニチマキアリ、應永年間ノ建立トイフ、……

内部四天柱及側柱内側ハ朱塗、壁、長押、無目、臺輪其他全部極彩色ノ模様アリ、板壁ニハ八祖ノ像ヲ描ケリ

とかいてある。これでみると態態あけて頂いて初重内部をみたものらしい。併し心柱が二重目でとまってゐるといふ肝心の事項を初め、其他大事なことが大分ぬかしてある。當時多寶塔も見學したが、これは神社になって居り、加藤清正を祀ってあった。同じ手帳に「寶山神社社殿」として、タカラヤマと寶山に假名をつけてあり、其書き起しに「普通ノ多寶塔ナリ」としてある。

此時以後は長期間再遊の機がなかった。明治の末から大正の初にかけて、何度も奈良から大分縣へ往復したが、いつも船ばかりとは限らず、汽車の時も何度もあった、だから宮嶋驛へ下車すれば何でもなしに參拜ができたのに一度もせず、昭和六年一月になって第二回目で行った。此時は既に社殿其他一切の大修理が終り、五重塔には古い相輪を上げて完全に復原され、多寶塔も亦既に寶山神社ではなく、清正公は他に合祀し、其型式の通りの名に戻り、嚴嶋神社多寶塔となってゐた。明治四十三年の最初の參拜から正に滿二十一年の後であった。

此年には二度行った。その第二度目といふのは三月末から四月初めにかけてであるが、其翌七年三月末の時と共に主として神社所在の石燈を調べたので、これは拙著【石燈籠】の材料にする目的であった。併しこの後の時は五重塔や多寶塔及び其他建築物の寫眞もとった。更に又本社攝社廻廊其他攝末社各種の寫眞撮影のため、昭和九年秋と十年夏とに參拜したので、近頃になって急に何度も出かけ、其都度N禰宜に大變に御迷惑をかけ、いろいろ調査上便宜を與へて頂いた。だから嚴嶋神社の建築についてなら、相當の材料はもってゐるつもりだが、ここには五重塔と多寶塔に就いてのみ記しておかうと思ふ。

一、五重塔（八九—九二）

私は嘗て雜誌【東洋美術】第十號（昭和六年五月十五日發行）に此塔の事を記したが、別に其後特別に研究した事項もないから、大部分その記事により、ここに再び書いておく。

*　*　*　*　*　*

五重塔は有名な千疊閣に竝んで建ってゐる（**九〇**）。位置が高いので可なりあちこちから見える。此所の挿圖は反橋の上からであるが、もう少し近くなら東廻廊からの眺めは甚だよろしい（**八九**）。この二圖は繪端書式で頗る非學術的であるが、實は此塔の各重の軒が、隅に於いて著しく反轉してゐるところを見せるためである。同じ五重塔なる**一一八**と比べてみても、一見其差が明らかであらう。三重塔なら**三一**・**一四七**、多寶塔なら**九三**、何れを見ても屋根はこの様に反ってはゐない。附圖のうちで似た反りをもってゐるのは**一六〇**・**一六一**位のところである。何故こんなに強い反りをもってゐるかといふに、そこが謂はゆる「唐様建築」の一特徴であるので、和様ではこんなに著しく反り返ってはゐない。比較的近づいて隅からみると、まるで隅だけつまみ上げた様になってゐることがよく判る（**九〇**）。

私のみた書物のうち、現在の塔の建立を「天文元年」としてあるのが二種、「天文二年」としてあるのが四種あった。幾つあっても出所が一つなら何にもならないし、別であっても多數決にする事もできないが、大正元年夏二度目に行った時、屋

嚴嶋五重塔遠望（昭和十年七月十日）

嚴嶋神社西廻廊の端に近く「反橋」(ソリハシ)がある。其反橋の擬寶珠の一に「弘治三季卯月吉日云云」の銘があるので，私共の間には有名であるが，其最も高いところから五重塔を遠望したもの。遠景の左方大屋根は「千疊閣」で右が五重塔だが，其各重の軒の反轉が著しい點に注意すべきである。近景のうち，左下から中央に向へるは「西廻廊」の一部。右端白壁の切妻は攝社「大黒神社」背面。中景右端，卽ち白壁の後方は「本殿」の西妻，中央の入母屋造は拜殿。本殿と拜殿とを連絡せるは「幣殿」の，左端は「祓殿」の夫夫屋根であるが，其平面は「干」字形をなしてゐる。

根裏板の墨書を手帳へ寫してきたうちに

天文二年癸巳三月上嘗也　□□□

としたのが一枚、夫から多く文字をかいてあるが、年號のあるところだけを示すと

天文二季癸巳三月日

といふのが一枚ある。嚴島神社では大正十二年に菅原誠一良といふ人に、金石文全部を調べさせたものを一冊に綴り、【燈籠其他之金石文】と題して保存してあるが、その中に「五重塔露盤銘」として

天文二年癸巳三月十七日上野前司藤原興藤前掃部頭藤原廣就大願寺道本大願寺沙彌衆慶裕尊海宗觀僧阿全宗五十貫井尻筑前井戸彈正又左衞門治部鑄物師大工壹岐同安房小工次郎平子十二人

といふ文字を記してあるが、字配・行數も不明だし、露盤のどの邊にどういふ風に刻んであるかも書いてないので、折角だがこれでは價値は極めて少ない、全くないよりはいいといふ程度になって了ってゐるが、こんなのを參考すると、此時の工事は天文元年から二年へかけてであったのであらう。

併し同書に「元應永十四年七月の建立と傳ふ」とあるし、【日本百科大辭典】には「應永十四年丁亥七月建立せりと云ふ。其後殆ど頽壞に及びしを、天文二年癸巳に至りて改造し、壯觀舊に復し、……」とあり、又「應永十四年建立の後……」といふ風に肯定したのもある。曩に引いた講演集の中にも、應永年代の創立といふが證據はない、と書いてある。何れにしても應永のものとしては認められてゐないので、天文說が通用してゐるのである。

今神社に保存してある縮尺1/40といふ平面圖及び立面圖に物差をあててみて測った寸尺は

初重方十五尺、總高(*石口より寶珠まで)九十三尺八寸、相輪長二十三尺二寸

であった。寸尺が記入してないし、紙は伸縮常ならずだから、物差をあてがって測ったので甚だ以てあてにならないが、大體のところは判る。これでみると相輪は總高の殆んど1/4、塔身の約1/3となってゐる。

初重四方には椽を廻らし、擬寶珠勾欄を備ふ。擬寶珠に在銘のもの西側に四個と東北隅に一個とあるが、何れも江戸末文政二年のもので、銘全部寫し取ってはあるけれども、掲載にも及ぶまいから略しておく。椽は各重共あって何れも椽勾欄を備へてゐるが、第二・第三重は開花蓮の寶珠柱を有し、第四・第五重も亦同じく蓮花ではあるが花の工合が少し異なり、幾分手がこんでゐる。さうすると五重に三種類の寶珠柱があり、初重のみ江戸末修補(?)の靑銅製蓮蕾で、あとは木製である。そこで自由に想像をしてみると、當初は各重共木製開花蓮の柱頭を有する親柱の勾欄であったが、初重のは腐朽甚だしかっ

＊ 石口(イシグチ)とは礎石上端の事。地盤では凹凸があって不精確故、高さ等は常に一平面に近い礎石の上端から測る。

たか何かで、文政頃に青銅の蓮蕾型柱頭を寄附して貰って現在の様に改造したのかも知れない。

初重中の間は板扉で兩開きにしてあるが、二重以上は花頭型の輪郭をつくり、其中に縦の格子が入れてある。斯様な型の出入口又は窓等は、元來が唐様のもので、鎌倉圓覺寺舍利殿にあるの等が古い方。塔に用ひてあるのは向上寺三重塔（廣島縣豐田郡瀬戸田町）で、第二・第三重の分は裏から板を打ちつけてある。窓に應用したのでは此塔の初重の他に大阪市勝鬘院多寶塔　紀三井寺三重塔等である。まだもっといくらもあらうが今宙で記憶してゐない。中の間に普通外開きの扉をつけるが、其代りに花頭型の開口にしたのは蓋し稀有の例に屬するであらう。而して初重には窓なく、二重以上脇の間には連子窓にしてある。

柱は唐様で上に「粽」があり、頭貫の先は木鼻となり、臺輪は隅で交叉してゐる。枓栱は各重共外部三手先、尾垂は先端が細く扱てあり、垂は總て扇垂、化粧隅木は地隅木の先に繪様があり、飛簷隅木の先端は少しく下に向いてゐる。以上何れも唐様の特徴をもってゐるのに、枓栱は詰組でなく、枓栱間には「蓑束（みのつか）」を入れてある。上に行く程柱間が狹くなってゐるため、第三重迄は各間共蓑束があるが、第四・第五重は中の間のみにしてある。理由は脇の間は狹くて束を入れる餘地がないからである。支輪は蛇腹を省略して一枚板とした形で、つまり普通の蛇腹支輪の支輪板だけにした様なもの。全體が外方に曲線形をしてはゐるが、等間隔に斷面方形で曲った木を並べてはない（九九〇・一）。

初重内部で第一に氣のつくのは、大變に廣くて何もない事である。須彌壇も心柱もないから、伽藍堂でゆったりとしてゐる。併し須彌壇は當初はあったと見られるのは、來迎柱と思はれる二本の内陣柱の適當なる高さの所に、架木と平桁との入ったと思はれる穴が殘ってゐるからである。神社にどこのか判斷のつかない勾欄があるのは、多分ここのだらうとの事に、一見を乞うたところ、架木と平桁とは、持って行って當嵌めてみたのではないから確言できぬが、この柱の穴にあひさうな大さであった。併し様式からみると時代は大分に降るらしく、どうも江戸末期位、初重椽の擬寶珠の銘なる文政位のところではあるまいかと思はれた。だから塔のかどうかも判らない。

須彌壇が當初にあったのなら、床にかた位はついてゐさうなものであるが、全然ないのでみると、できずしまひか、失はれてから床板を取替へたか、どちらかといふ事になる。どちらにしても、どうも大分に變である。つまり私には判然しないので、どういふ風に考へるのが最もよろしいか、實は迷ってゐるのである。【嚴嶋記念講演】には此塔に就いて極めて簡單な記事しか載せてなく、其他の書物はどれを見ても、須彌壇の事をかいたものはなく、氣がつかなかったのか、ついても巧に暈したのか、殘念至極だが今以て何とも判らない。來迎柱に穴をあけるにしても、架木と平桁とばかりでなしに、序に地覆のもあけさうなものだが、何故かさうしてない。併し若し須彌壇を組立るばかりに他所でつくり、運ぶつもりであったのを急に他に轉用し、追てここのを造るつもりでそれなりになったとすれば、これでいいわけである。

心柱は初重の天井裏でとまり、下から礎石上にたってゐない。こんなのは古いところにはなく、私の知ってゐるのでは鎌倉時代からである、といふのは海住山寺五重塔がさうなってゐるので、これより古い例の有無を知らない。昔は三重塔も五重塔も、其以上の多層塔も、何れも心柱は礎石上から樹てられた。室生寺五重塔の様な小さいのでも、ちゃんと礎石の上に乘ってゐるのでも判るであらう。夫が恐らく平安後期になってから、木割の纖細な、とてもきゃしゃな三重塔ができる様になり、試みに二重目で心柱をとめてみたが、中中しっかりして少し位の風には何ともない。そこでこれを五重塔に應用してみる氣になり、思ひ切って二重目でとめてみたのであらう。この想像にして餘り事實を無視しないものとすれば、鎌倉時代に入って少したった位の時、大分に頭腦明晰な建築家によって試みられたと見られる。

海住山寺五重塔は建保二年の建立といふ。鎌倉へ入って三十年位たった時だから、どうもこれ等が最古の例であらう。この塔は規模は小さいから、心柱を初重からたてると、相當に邪魔になる。そこで二重目からにして初重を廣くし、四天柱の間に須彌壇を設け、羽目板には盲連子を入れ、柱の間には兩開板扉を吊り、扉面には六葉座をもった飾金具を四列三行に打って飾り、恰も廚子の如くし、内部には極彩色を以て唐草等を描き、大日如來の座像を安置してある。洵に巧みな纒め方がしてあるが、これ全く心柱を途中でとめたからできたのである。

當代にもっと此種の塔があったかどうか、三重塔なら――多寶塔は勿論――いふ迄もなくさうだが、今日に遺物がなくて判然しない。併し室町のは、嚴島神社五重塔・出羽神社五重塔（山形縣東田川郡手向（タウゲ）村）・明王院五重塔（福山市）の三塔を數へ得る。右の内出羽神社五重塔は慶長五年の建立といふことになってゐるが、例へ社記はさうであり、文部省作成の調書を初め、何れの書物も此塔に關しては何れも慶長建立説を是認してゐる樣であるが、私には樣式上どうも贊成できかねる。だからここには室町のものとして取扱っておく。とにかく此三塔は海住山寺のに比べて大きいが、やはり初重を廣く用ふるため、かういう風に造ったのであらう。

内陣上部は一手先の枓で通肘木を支へ、上には外陣同樣鏡天井を貼ってある。外陣の樣に一つ出た枓の上に三重がないから、大分簡單に見える。外陣は其一部を**九二**に掲げておいた。この樣なのは文句で書いたとしても、夫は書いた人にだけ判るだけで、讀んでも反て混雜するばかりだから、圖を熟視した方が效果がある。此圖に於いて臺輪が厚過る事に氣がつくであらう。もう少し薄い方が餘程格好がよろしからう。**九一**・**九二**に於いて柱の上の方が圓味を帶びてゐるが、これを「粽（ちまき）」といふ。肘木の下端と木口の區別がなく、其部が圓弧の樣な滑な曲線からなってゐる。繫虹梁が波形の曲線からできてゐる。

木鼻に「鎬（なぎ）」があり、其上に臺輪の鼻が乘ってゐて、同樣に鎬をもってゐる。こんなのが總て唐樣の特徴である。

初重内部は全部極彩色、内陣肘木等には線條文を描いてある。鏡天井にも繪がある。壁板には僧形を描いてあるが、八祖の像かも知れない。柱は總て朱漆塗で、何れも人人の寄附したもの。寄附者の姓名が何れも柱に黑漆で書きつけてある。今千燈閣に向った方（即西側）の右端（向て左、即西北隅）の柱から東へ南へ西へ北へ、初を一として順に十二迄、更に内部四天柱を同じ順に十三から始めて十六迄、十六本の文字を書いておく。

一、朱採色柱一本旦定琳妙運禪定尼
二、採色柱一本旦那山里小□林□□女房
三、採色（以下文字消滅）
四、採色柱一本旦那當嶋長兵衞女房
五、採色柱
　一本旦那當國神嶋安部四郎左衞門女房
六、採色柱一本
　旦那當社物師三部大夫女房
七、採色柱一本
　當國明石川野豐前女房

八、採色柱一本旦那廿日市山田治部女房

九、朱柱一本旦那江州觀音寺住中藏坊

十、採色柱一本旦那有浦江前與左衞門女房

十一、採色柱一本旦那廿日市鑄物師七□女房

十二、朱採色柱一本旦那猫屋□□□□□妙光禪定尼

以上側柱十二本全部。次は四天柱（側柱同樣東北隅より）

十三、朱柱一本檀那當所中江四郎左衞門女房

十四、朱柱二本檀那當所古野圖書女房

十五、再興朱柱一本檀那當國佐西郡玉海寺全宗

脇立普賢旦那當嶋南渡部……

十六、柱一本檀那當國山里山本和泉守奉□女方（ママ）

脇立文殊旦那當嶋有浦兒玉與三右衞門本願大願寺尊海□□□□□御本尊釋迦旦那當嶋有浦古野……

以上十六本の柱は何れも寄附になったものであるが、十四番の書き起しに「朱柱二本」とあるのでみると、總計で一本多くなるが、夫はどこへ用ひたのか。但し第三のが初めの二字「採色」だけ讀めて、あとは消えて了ってゐるから、他のの樣

に其下に「柱一本」とある代りに、何か他の字があり、其分と共に古野圖書の女房が二本寄附したのかも知れない。惜しいことに消滅してゐて全然よめないから、想像のしようがない。

側柱十二本のうち、右の通り一本は不明だが、殘りの十一本に就いてみると、坊さんが一人、尼さんが二人、女房が八人で寄附してゐる。四天柱は坊さんが一人、女房三人（内一人は側柱と共に二本？）で奉納したのである。さうしてみると初重柱の大部分は婦人が寄附者であるが、其主人の名だけだし、何某女房としてあるだけで、其女房の名は判らない。其主人に當る人も、當時其地方では相當に有名であったか、或は又何か工事の關係者であったか、何れにしても人名辭書に登載される程の重要人物でもなかったと見え、今となっては判然しない。ただこれ等のうち十六番目の柱にある「大願寺尊海」といふのが知られた名ださうである。嚴嶋町に大願寺といふのが今でもあるが、其寺所有の國寶のうちに、尊海渡海日記（八曲屏風裏書）一雙といふのがある。【日本古美術案内】の記事に「裏には本寺の僧尊海が天文八年……朝鮮に渡った時の日記が貼ってある」とあるから、尊海は卽ち此人であらう。手許の人名辭書を調べてみたら尊海といふ名は五つあったが、大願寺に關係のは一つもないので判らなかった。併し【日本古建築菁華】所載の此塔露盤の銘に此人の名があるから、右に引用した渡海日記の文と併せ見て、天文頃にゐた人だといふ事は確かであらう。

次に側柱の文字は寄附者に「旦那」とかき、四天柱の分は「檀那」としてあるのは何か理由があるのか、考へてみても今以て判然しない。其上に坊さんはダンナでもいいが、尼さんや女房のダンナは少しばかり變な樣である。どうも旦那は旦那で女房は女房でなくては工合がよくなささうである。併しこれは少しも差支はないので、寄附者卽ちダンナで、漢字は「旦」でも「檀」でもいいのである。

【佛教大辭典】には檀那の項に

Dāna 又、陀那、施と譯す。陀那鉢底、Dānapati 施主と譯す。遂に略して施主を檀那又は檀越と云ふ。……

【佛教大辭彙】には同じく檀那の字をあて

また拕那、馱羅とし、略して單に檀とするあり。布施と譯す。又梵漢並稱して檀施・檀信といふことあり。……この施者を檀那と云ふより轉じて家人より主人を呼び、或は商人より客人を呼んで檀那と稱するに至れり。

【言海】。ダンナ(名)檀那旦那

(梵語陀那鉢底ノ略轉、布施、又ハ施主ノ義)(一)僧ヨリ其道ニ惠ミヲ與フル信者ヲ稱スル語。檀越。(二)檀家。檀中。(三)轉ジテ家人婢僕ヨリ、其主君主人ヲ、恩義アルニ就キテ稱スル語。主公(四)又、轉ジテ、商人ノ顧客ヲ敬ヒテ呼ビ、又、賤人ヨリ貴人ヲ尊ビテ呼ブ語。或ハ其代名詞ノ如クニモ用ヒル。顧主、花主。

此位でもう澤山だらうが、とにかく寄附者・施主なら老若男女貴賤都鄙を問はず、百萬圓出しても一錢でも同樣にダンナである。主人は何もしないのに、女房が柱を寄進してゐるのだから女房でも旦那である。差向き女髮結の家庭では亭主は遊んで食はして貰ってゐるのだから、旦那さんといへば女房のことになるのである。有名な平泉の中尊寺金色堂の棟木墨書には

天治元季歲次甲辰八月廿日甲子建立堂一宇長一丈七尺廣一丈七尺 ■ 大工物部清國大行事山口頼近小工十五人鍛冶二人 ■ 大檀散位藤清衡女檀安部氏清原氏平氏

とあるが、曩に引いた【佛教大辭彙】に、檀那を略して「檀」とする事もあるとある通り、大檀那を「大檀」としてあるほか、女の檀那を「女檀」としてある。建立年代の墨書のうち、金色堂のは最古のものとされてゐるのだから、さうすると平安後期頃には時に女檀那は女檀と略稱されたのかも知れない。

ダンナの話はこの位にしておいて、四天柱のうち前の二本に、本尊釋迦如來と脇侍二菩薩の寄附者には 側柱と同じく「旦那」としてあるのは、これにも亦何かわけがあったのかも知れない。

內部北側中央出入口の西壁、頭貫下小壁に樂書の樣な墨書がある。消えた部分もあり、字もはっきりしないがその七行は

「方八月」「二十三日」「旅?しめ?」「住人宮原」のうち七「の」「永正五年」「三月五日」

らしい。このうち後の二行は明らかに永正五年三月五日とよめるから、この時にかいたものらしい。

* * * * * *

此塔はある一部には唐樣の塔として知られてゐる樣である。といふのは、日本に於いては唯一の實例とか、珍らしく唐樣の建築とかいふことが、書物に書いてあるのが目につく。これは大部分が唐樣だといふ意味かも知れないので、さうなら差支はないけれども、純粹の唐樣と考へてゐるとすれば、夫は確かに誤解である。然るに反てある案內記には、和樣に唐樣を加味したもので室町末期の好建築である、としてあるのは割合に正しい見方である。但しこの案內記の編纂者は專門家ではないのだから、何れ何か書いたものを見て書いたのであらうし、餘り簡に過ぎてゐて、どこがどうか判るまいから、左に私がみた區別を記しておく。

和樣のところ

一、建物周圍に椽のあること。

二、初重椽勾欄の親柱が蓮蕾(擬寶珠)であること。

三、枓栱が詰組でなく、枓栱間に蓑束を用ひてある事。

四、支輪は蛇腹を缺くも外側に膨れて居り、平たき板支輪にしてない事（今京都市東福寺境内に移轉修理をした元の萬壽寺愛染堂は唐様であるのに、板支輪は平たき一枚板ではなく、僅かではあるが前方に曲線形に膨んでゐる）。併しそれとこれとは全く意味が異ってゐる）。

五、四方の扉が板唐戸であること。

　　棰は各重共普通の繁棰であること。

唐様のところ

一、柱上部に粽あり、頭貫及び臺輪鼻が前方に突出してゐること。

二、肘木・尾棰・化粧隅木。

三、第二重以上の椽勾欄。

四、第二重以上の中の間の開口が花頭型をなせる事。

五、初重内部外陣に海老虹梁を用ひてあること。

六、初重内外陣共鏡天井なること。

等である。斯様に解剖をしてみると、これは「和様に唐様を加味した」といふ方が、確かに正しいことになる。尙ほ此種の塔では、この他に

安樂寺八角四重塔

向上寺三重塔

の二基を擧げ得る。前者は殆んど唐様ばかりといってもいい位で、ただほんの僅か、極僅か和様を入れただけである。但しその和様と認められる部分は、第二重以上の連子窓で、これは修理前には何も入ってゐなかったのだから、證據があってしたことか、或は推定復原かその邊は明らかでない。後者にしたところで枓栱間に蓑束を用ひたり、蛇腹支輪や菱支輪があったり、第二・第三重を繋棰にしたり、初重内部折上天井の龜の尾や來迎柱上の手法等、どうしても和様でなければならない。これでも近頃迄は嚴嶋神社のと同様、唐様の塔として通用してゐたのである。さうしていふ迄もないことだが、此等の三塔婆の相輪は、塔其物が如何に唐様分子が濃厚であっても、三基共純然たる和様である。

*　*　*　*　*

以上嚴嶋神社五重塔に就いて記して行くうちに、あちらこちらへ脱線はしたが、要するにいろいろな例を引合にだしたに過ぎないのである。さうして九輪だか露盤だか、何れが正しいのか私は見ないから知らないが、何れかに天文二年云云の銘があるし、其銘文中にでてくる尊海といふ大願寺の坊さんが、天文の人だから、今のは室町末期のものに相違ないとして、さて全部を天文のものとするか、或は細部のうちにも少し古いところは殘って居りはしないかを調べてみたが、どうも古い部分もある様に思はれてならない。つまり書物に引いてある露盤の銘なるものは大に尊重はするが、全部をさうとしなくともいいと思ふのである。初重の柱は一本一本明らかに銘文が書いてあるから、これ等はどこ迄も誤はない。併し枓・肘木・虹梁といふ様なものは、應永かどうか確かでないとしても、天文よりもあげて差支はないと考へられる。

併し同時に天文としても敢て不都合ではないから、さうすると寧ろ全體を天文とした方が無難であるらしいが、永正五年の墨書は天文二年から足かけ二十六年前になるので、説明がむづかしくなる。つまりあの板だけは古いのを再用したとする

か、又はあとから前の元號をかいたとするか、どちらにかしなければなるまい。だからそんなことにしないで、天文再興に際し、以前の材料で用ひられるところは全部用ひたが、初重の柱だけは全部新しくして再建したのではあるまいか。但し私は文獻を一つも見てゐないのだから、根據は頗る薄弱である。他日文獻調査の機があり、誤を發見したら、其時は直にこの結論を改めることにする。尙ほ以前は此塔の相輪に就いて想像をして書いた事もあるが、近づいて見た事はないし、所詮推察に過ぎないのだから、今回は全部省略しておく。

二、多寶塔（九三―九九）

多寶塔は大願寺後方の丘上に建ち、頗る形勝の地を占めてゐる。明治十三年塔の名稱を廢して加藤淸正をまつり、寶山神社と稱したが、大正七年豐國神社（千疊閣のうちの一部）へ合祀し、塔を嚴嶋神社に屬せしめたさうである。元は藥師佛を本尊としたさうだが、現今は何もない。大永三年六月の建立ださうだが、形式からでもそれが肯定できる。

多寶塔といふのは二重の塔で、下層方形上層圓形の平面を有し、上下層共四角な屋根がかけてあり、上層屋根の上に相輪が立ってゐるのだから、內地のどこにあっても、いつの時代のものでも、皆殆んど同じ形をしてゐる（九三）。夫は非常に美しい形で、例ひ夫が江戸時代に建てられたものであっても、三重や五重塔とは異り、形は大變によろしい。次に仔細に觀察したところを記してみる。

下層周圍に椽を廻らしてあるが、全部が新補で新しいものばかり、古い板は一枚も殘ってゐないし、椽束亦然り。現在勾欄はないが、當初からかどうか判然しない。柱は大面取の方柱で、此種の塔はいつも殆んどかうに決まってゐる。この場合は柱方七寸三分、面見付一寸から一寸一分で、其比約1/7―1/6.6。大永としては面は割合に大きい方である。

枓栱は初重出組に上層四手先だが、これも亦判を捺した樣である。四手先といっても、隅になると圓い胴に四角な屋根が架けてあるのだから、方形の場合より出が多くなり、從て手先は多くなるのは當然だが、私の知ってゐる最多のは、河內の有名な天野山金剛寺ので八手先である。併しこんなのは殆んど類例なく、先づ五手先が普通である。初重の組物に於いて、中央から前方に出てゐる木鼻と頭貫鼻とは同一の性質であり（九四・九五）、其形も曲線の工合も、決して優秀とは勿論、普通とも言ひかねる位のところ、批評をすれば薄く出すぎてゐて鎬も多過る。鎬のところに圓鑿で突いたあとのあるのも無いのもあるが、こんなのは大した問題ではない。

初重肘木下端・支輪・丸桁・桷下端等、何れも面取にしてある。遠方からは勿論見えないが、近くによったとき、きゃしゃに見える樣に考へたのであらう。面をとるのは取らないより手數がかかる。だから眼から遠く、餘り效果のない上層は、全部が面がとってない（九四・九五）。

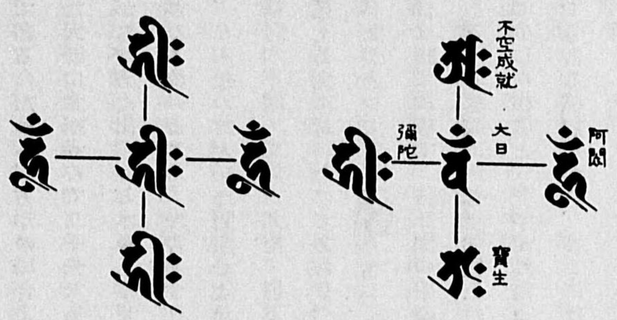
外部は總て和樣で、方三間の中の間には外部はすべて蟇股（九四）、兩脇の間及び初重內部は三間共「間斗束」（九六・九七）を入れてある。其蟇股は內部須彌壇上のでも而もついこの間の修理の時の模造ではあるが、大體九八の樣な形をしたもので、ただ唐草に少しの相違と、梵字が異なってゐるだけである。此唐草はよくできてゐるし、且つ時代をよく現はしてはゐるが、いくらでもある種類だから、ここには論じない事にし、中央の圓文內の梵字に就いて調べてみると（挿圖左方）

東・西　ウン
南・北　キリク
內部須彌壇上　キリク

となってゐるが、古いのは東側のものだけである。

今金剛界五佛の種子を見ると、いつどこにあっても、バン・ウン　タラク・キリク　アクで其配置は挿圖右方の如くである。即ち中央が大日如來でバン、東が阿閦のウン、南は寶生のタラク、西と北とが夫夫彌陀のキリクと不空成就のアクである。第二〇四頁の挿圖の四天王寺經藏の外部中の間の四方の墓股内にも、此順序で此と同じ文字が入れてあるのでみても、かうでなければならないであらう。私は實は梵字なんか知らないので、全くの聞き齧りで、それこそ僞のない正身正味の半可通だから、甚だ以て危險ではあるが、五佛を安置してある時でも、かうしてあると心得てゐる。さうすると此塔は五佛の代りに中央（内部須彌壇上）及び四方の墓股内の種子を以て、代表せしめたのではないかと考へられる。果して然らば東方墓股中央圓文内の「ウン」だけが正しく、あとはいい加減につくって入れたのではないかと思はれる。夫にしても「キリク」には一つも古いのがないのに、どうしてこれを造ったか、而も相當にうまくできてゐて、これなら室町でも通用しさうである。或はどれかに少しばかりどこか文字の一部が殘ってゐでもしたのを「キリク」の殘闕とでも誤認し、新しく造ったのかも知れない。どれかといった所で、「タラク」と「アク」とだから、空點か或は左上のあたりなら、さう見えるかも知れない。

金剛界五佛の種子（諸尊種子鈔ヨリ）



嚴島神社多寶塔初重墓股内梵字

昭和十六年十二月七日・刊

須彌壇の上のでも殘ってゐたのだと、又何とか判斷ができたかも知れない。若し愚考通り「バン」字でも入ってゐたのだと、問題なんか起らずにうまくいったかも知れぬ。東側の「ウン」と中央の「バン」さへあれは、あとは一つもなくても、既記の通りに取扱って大丈夫である。ところが内部のは風雨にも曝されず、比較的完全に殘ってゐたので、とうの昔に盗まれて了ったのだらう。もう少し空想を許されるならば、元來塔其物は大日如來を現はしてゐるのださうだから、須彌壇の上等に墓股なんかは用ひなかったので、從て藥師如來が本尊であったといふのも、果してさうかどうか判らず、或は大日如來を安置してあったのではないかと思はれるのである。石造寶篋印塔の塔身の四方には、寶篋印陀羅尼の種子のほってある場合を除いては、いつもきまって四佛の種子が刻んであるのからみても、かういふ想像はできよう。修理前から須彌壇上の臺輪と通肘木との間の板に、墓股の型でもついてゐたのならとにかく、萬一さうでなかったのなら、甚だ申しにくいが全く餘計な事をしたので、敢て後世ではなく、現代に幾多の疑問を殘してしまったのである。

素人のくせに斯樣なことを考へるのは、甚だ怪しからないし、全然見當違ひの議論かも知れぬ。さうして細心の注意と周到の用意を以て工事を監督された技師殿、現場に於いて專心研究を重ね、一木片と雖も忽にせず、熱心修理工事に從事された技術員殿に對し、大に禮を失する次第で、恐縮をしてはゐるが、疑問は疑問だから書いてみたのである。敢て識者の教を乞ふ次第である。

*　*　*　*　*

墓股で失敗してゐるもう一つの例に寶塔寺多寶塔（京都深草。京阪電車深草駅又は市電稲荷駅下車）がある。此多寶塔初重四方中の間に入れてある墓股は、兩脚内の彫刻が（東）蓮花　（南）牡丹　（西）桐・（北）（亡失不明）となってゐた。北方のは仕方がないが、東方は確かに蓮

花が入ってゐたので、これは既に先年K君が寫眞にとって居られた。あれはガタガタで直にはづせるさうで、隨分あぶない狀態であったが、寺ではそんなものに注意しないでゐるうちに、誰か持って行ったものか、修理の際は既に失ってゐたと見え、想像で勝手に牡丹を入れて新に補加したので、これも亦前例と同樣、立派に現代を誤ってしまった。K君や私は知ってゐるからいいが、知らない人は初めから牡丹入と思ふだらう。

板墓股なら總て同じでもいいが、脚間に彫刻を入れた後世の種類になってくると、其入れた彫刻だけで幾種でも異なったものができる。だからできるだけ周到の注意を以て、研究に研究を重ね、熟慮の上實施しないといけない。私は決して悪口の材料に寶塔寺の夫を引合にだしたのではない。墓股一つでもこの位やっかいなもので、ひまをかけて調べなければ、結果は甚だ面白くなくなる。折角努力しても、夫が反ていけなくなる、或はいくら調べても、金と時間とを費しただけで、何んもならないかも知れないが、それはどうも止むを得ない。

設計は中中むづかしく、如何にも技師でなくてはできないかも知れないが、たかが修理位、あるものを直すのだから大工だけで充分だ、月給の高い監督員を二人も三人もおき、其上に毎月一回遠方から技師がやってきて、僅か一日か二日ゐて歸って行き、出張兼遊覽をやって金をとるのはけしからん、あんなものは全く無駄だから、やめさせられないものか、と萬萬一考へていらっしゃる方方があるとすれば、夫はまちがった考へで、皆樣が輕く見ていらっしゃる修理工事は、新築よりもどの位むづかしいか判ったものではない。

嚴嶋神社の多寶塔の場合に、若し來迎柱間に外側と同じ樣な墓股があった事が確實なら、私にやらせるなら輪郭だけのものを新造して入れておく。いくら復原したくとも、判らぬものは判らぬのだから、これが最も穩當且つ正しいやり方であろう。どうせあでずっぽうでやるなら、勇を鼓して金剛界大日如來の種子「バン」でも入れておく。この方が「キリク」より理窟があるやうである。

*　*　*　*　*

四方の出入口には板扉が吊ってあるが、新補のもあるし、脇の間の連子窓は、額縁に古いのは殘ってゐるけれども、中に入れてある肯連子は大概新しく、壁板も亦新古取交ぜてある。枓栱間の蓑束は、內部中の間に用ひてある分(九六左方)が、外部では兩脇の間に入れてある。此場合に其名の起りの「蓑」に當る肩の飾は多分蓮花であらうが、こんなのは室町にはよくある。もう少し丁寧にほればいいのに、何でもないことと思ふが、こんな風にぞんざいにしたのもよくある。

次に內部に移って行く。須彌壇は其勾欄と共に推定復原である樣に思ったので、圖示を見合はせたが、其勾欄に就いて少し書いておく。勾欄は謂はゆる唐樣だが、地覆の上に枓を一つおき、其枓で蕨手に卷き上った架木の先を受けてゐるのは、餘り見なれないせゐか氣になる。さういふ古い勾欄がいくらか殘ってゐたのなら勿論さうすべきだが、推定なら一層のことが遙に形がよかったらうと思はれる。

來迎柱に圓　上に粽があり、頭貫及び木鼻が此粽柱に出遇ふ所、木鼻の形、其上の臺輪、何れも最もよく唐樣の手法を發揮してゐる(九七九九)。併しながら其上の三枓を受けてゐる肘木は、下端と木口とが明らかに分れ、且つ肘木の下端は大面取である事、側柱上のと全く同じである(九六)。此邊から木鼻は三方に出てゐるが、頭貫の鼻のが最も氣がきいてゐる。その頭貫鼻と同じ方向に、天井について出てゐる通肘木の鼻は、どういふところから考へついたものか、小さいながらも獨創的の

形をしてゐる。

内部の科栱間は總て蓑束にしてあるが、中の間のと脇の間のとは少しく異り、脇の間の分こそ前代からよくある最も普通の形である。束は下が少し開き撥型をしてゐる。束が梯形になりだしたのは鎌倉時代からの事で、平安以前にはない。だから下が開いてゐれば鎌倉以降といふ事は判るが、いつも必ず開いてゐるとは限らないで、四角な棒型のもある。其下が開いてゐるのにも、この様に「梯形」をしたのと、兩方が内方に反り、謂はゆる撥形をしたのと二種ある。だから間科束も亦鎌倉以前は一種だが、鎌倉以降は急に増して七種となったのである。即ち

間科束（長方形／梯形／撥形）　蓑束（長方形／梯形／撥形）　特殊形束（大瓶束と蓑束と蟇股とを合併した様な形の間科束（神宮寺仁王門科束（滋賀縣近江八幡市））））

である。何でも鎌倉以後は急に種類が増加するから、甚だ以て厄介至極である。尚ほ序ながら天井は鎌倉で唐様である。だから内部は和唐折衷式の好標本である。

來迎柱上に、大科から左右に出てゐる肘木は、圖でみる通り大面取で側柱上の夫と連絡がとれてゐるが、後方に出してある分は、正面からでは直接には見えず、その上に後ろの方だから大して重要でもないといふところからか、面はとってない（九九左上）。無駄な手數を省いたやり方は、後世江戸時代あたりのと大分の差がある。さうしてこの上は天井に接せる通肘木で側柱上の科栱と連絡させてある。從てこの後方の方一間の部分の天井は一區劃をなしてゐるのは、つまり來迎柱がいつ迄も眞直に立ってゐる様、補強をしたのである。

上層も亦型の如く、圓形に竝んだ柱の周圍に圓形の椽があって、椽には無限勾欄を廻らし、椽桁の下に三科を置く。下から眼鏡でみたところでは、勾欄は地覆のみ古く他は總て後補で、科束の科の形は大していいとも思へない。科栱は和様四手先で、肘木に面がとってないのは、高い所だから略したと見るべきであり、支輪に面のないのも亦、同様に解釋すべきである。軒には組入天井がはってあるが、總て材料は新しくなってゐる。さうして木鼻には、下層にも一二の例があった様に、鎬のところを圓鑿でついたのもある。

相輪は後補で、露盤の上端が側面と接するところは少しく起りがついてゐて、そこには管笥の環の様な模様が鑄出してある。此露盤に銘文があり、夫によると寶永三年の再興で、從て左程大したものではない。但し寶珠のみは青銅製らしく、これは古い様で、或は當初のものがどうかして殘ったのかも知れない。尚ほ普通の場合にある四隅に引いてある鎖は缺いてゐるが、初めからないのではあるまい。

要するに此多寶塔は、細部に多少の疑問はあるけれども、室町時代中期のものとしては、最もよく其時代の形式手法を現はしてゐるもので、傑作の一たるを失はぬものである。

*　*　*　*　*　*

此塔の初重内部天井廻が、知立神社多寶塔（愛知縣碧海郡知立町所在。上層屋根裏の木材銘に永正三年六月とありといふ）の夫と殆んど同じであると思った。もつと他に同種のがあるかも知れないが、見てゐないのだから何とも言へない。昔の東海道五十三次のうちに「池鯉鮒」といふ宿場があった。今では「知立」とかいてあるが、此神社のあるあたりは、さすがに廣びろとして洵に神神しく、堂堂たる神明鳥居の間から多寶塔の眺めは、神佛混淆かも知れないが、よく調和がとれてゐて、私の最もすきなものの一であるが、これ

は近頃修理をされて舊形に復したので、修理前は上層は入母屋造に改造してあったから、何とも不思議千萬な形をしてゐたのである。明治四十年五月、國寶に指定された時、當局作製の調書に「舊多寶塔なりしを明治元年相輪を去り上層の屋根を改築せしは惜むべしと雖其他は悉く現存し、構造形式皆よく當時の特質を示せり」とあるので判るであらう。

明治の初め神佛混淆は不都合だからとて、取毀されようとしたとき、九輪を下ろし上層を入母屋造とし、知立文庫といふ額を急造して掲げ、これは塔ではない、文庫であるといって、漸く助かったのだといふ。初重は方柱面取だが、一邊六寸九分五厘、面見付八分五厘、其比約$\frac{1}{8.2}$。此塔が嚴島神社のより十四五年先にできてゐるのに、面と一邊との比はまるで反對で、この方はずっと狹いが、夫はどちらかといふと、この方が先づ普通の割合で、あの塔の方が廣過ぎるのである。

前置が少し長過ぎたが、此塔の初重内部の來迎柱上のおさまりが唐様であり、枠肘木（但しこの肘木は純然たる唐様）を大料上に置き、鏡天井をはってあるの迄、全然嚴嶋のと同じく、ただ蟇股のない事と、肘木に面がとってない事と、側柱上の料栱間に蓑束のない事位の相違に止り、其他は臺輪の先端や木鼻の繰形が異ってゐるといった様な、極小さなどうでもいい様な差があるだけである。

既記の通り兩多寶塔建立の年は、僅かに十四五年の差であるが、どうも一方が他方の影響を受けた等と考へるよりも、こんな時代にはこんな型が流行したので、相當な建築家なら、誰が計畫しても、ものが同じ多寶塔なのだから、同じ様なものになったと見た方がよからう。雙方共天井板が全部新しいから、修理前は何れも鏡天井であったかどうか、嚴嶋のは見たが忘れたし、手帳にも書いてないし、知立のは修理前の寫眞を社務所で見ただけで、實物は知らないのだから、どうか判らないが、とにかくよく似たものがあると思ったので、序に一筆附加へておいたのである。

北陸の旅（一〇〇―一四九）

私はつい今迄緣がなく、北陸の古建築を見學する機會に惠まれなかった。可なり古い話しだが、明治三十五年八月十六日に東京出發、上野驛から汽車で直江津驛に下車、今でもあるかどうか知らぬが鳥賊屋といふのへ一泊し、翌十七日には附近の春日城址に遊び即日更に汽車で新潟へ行き旅館くし清一泊。更に其翌十八日新潟酒田間を運ってゐる三十噸の小蒸汽「度津丸」で湯野濱へ上陸した。豫て新庄（山形縣）の友人、故Kから湯野濱溫泉は日本海に面したとてもいい溫泉だから、是非泊れと勸告されてゐたので行ったところ、どの宿も大入滿員で、漸く玄關の一室の八疊間、既に先客が一人ゐるが、其人とあひ宿ならとの事に、お互に迷惑だからやめにした。併しとまる家がないので、一里許（と思ってゐるが、はっきり記憶はない。もう大分前の事だから）引返して寒川といふほんたうの寒村の淋しい宿へ泊った。この宿でも日本海に面してゐるにはゐた。

其時の服裝たるや霜降の色あせた學生服に目倉縞の行胖、刺子の足袋に草鞋をはき絲經に菅笠といふのだから、いくらゐなかの溫泉場でも、眞夏の夕刻豫告もなしに一人で行ったのでは、とめない方が當然かも知れない。夫だのにそんな事には一切かまはず出かけた所は、大に勇氣があったといへる。十九日には加茂を通って鶴岡町に出で、日吉神社の猿の彫刻を入れた蟇股や笈形付（？）間科束を見たりして酒田に出て泊った。勿論當時はこの邊には汽車が開通してゐなかったから總て歩

いた。酒田からは最上川の南岸に沿ひて東行し、川を渡り對岸のある小部落佐渡に歸省せる友人を訪ひ、二十日夜友の厚意で一宿、二十一日には新庄町に故Kの本宅をたづねた。

佐渡の友は當時既に相當の年輩で、令夫人と共に遠來の貧書生の身に餘る歡迎をしてくれた。臺所のあげ板をとると、砂地に清冽な水が流れてゐて、五六寸の鮎が數十尾潑剌としておよぎ、一隅には徑一寸位の大鰻が悠然と蟠踞せる有樣を見て、田園生活の羨しさをつくづく味ったし、新庄ではKは留守であったが、Kの實兄で當時新庄中學の教諭を奉職して居られた方の手厚き待遇に預り、八月二十三日に東京へ歸着したのは、約四十年も前だが、つい去年の夏の出來事の樣に、樂しい記憶にはっきりと殘ってゐる。

此時の八日間の旅行のうち、最初の二日間、ほんの北陸の一部を素通りをし、建築としては春日城址に近い五智如來の三重塔の、全體が瓦で出來た樣な相當入念に拙い相輪を頂いてゐるのを見て感心したくらゐの事で、當時はただ歩くための旅行であったから、歩く目的は達したが何一つ頭の肥料は得られなかった。

此時から烏兎早早歳月流るる事矢の如く、大正を過ぎて昭和も十六年となった春、幸に好機に惠まれ再遊を試むべく、二月九日に大阪驛を出發し、能登の妙成寺に向った。尤も此度の旅行に就いては、福井縣丸岡城修理工事を擔任せる建築家T君と、京都在住の技師兼教師のH君との間に數回書面の往復があり、妙成寺との打合せも充分しておいて戴いたから、何の心配もなく出かけられた。同行は「船場の旦那」略してSに園造子事略號Oの兩君にH君に私、四人で一小間を占領し、まっくらに疊って雪がちらついてゐるなかを、午前十時大阪發、起點が大阪驛なのに滿員の盛況、金澤で急行をすて普通車へ乘換、再び津幡で輕便車へ乘りかへたら、電燈もつかず暖房もなく換氣も不良であったが、夫でも漸くにして柴垣驛着、下車したら眞っ暗で雨がショボショボ降ってゐた。

斯樣にかくと何でもないが、實は大阪驛の起點から乘らないと、恐らく滿員で頻返しがつくまいから、私は大阪迄出かけてS老の引張り出し役を承り、九日早朝S邸へ推參したら、至極御機嫌よく同行されたので、大阪驛の乘降場で汽車を待ってゐるうちH君も態々京都からやって來られた。何れも今日は靑を奮發に及んでゐたのに、初めからぎっしり詰まって煙草の煙で濛濛として隨分苦しかったが、京都へつくなり私の前に赤を持って傲然としてゐた男が下車したので、其後釜にO君を坐らせる事に成功したのであった。O君は金があるのに赤を握り、元來が貴公子育で蒲柳の質と來てゐるのに、重量過大なるリュック・サックを背負ひ、蹌踉として空席を物色しつつ乘降廊を歩いてゐた痛ましい姿を、H君が素早く見つけて有無を言はせず引張込んだので、うまく一小間四人で占領できたのである。而も途中から丸岡城修理事務所主任のT君が乘って來て同行されたから、私共は非常な便宜を得たのである。

柴垣驛へ下車した時は、最早日は暮れてゐたし、腹はへるし寒さは寒し、こんな田舍の淋しい驛に下車したのは、我我の一行五人と他に一人か二人あっただけ、併しT君の配慮で寺から荷持兼案内のため提灯を持った男が出迎へてくれた。S老とHとTの兩君は荷物といふ程の荷物はなし、自分で持っても知れたもので、次は私のが幾分大きいが、夫とても傘に引掛けてかつげば持てなくはない程度であった。併しO君のと來ては容積も重量も莫大で、中版の寫眞機に種板五打十Aだから、空腹にあれを背負っては、心は矢竹に逸れども、恐らく立つ事もむづかしかったらうのに、眞っ闇で雨がショボショボ降るなかを、寺男は馴れたもので、提灯片手に小生の荷物と振り分けにしてかつぎ、田圃の畦道を辷らぬ樣に注意しながら、できるだけ近道をして寺へ急いだ。

寺男が來なくとも、道はT君がよく承知して居られるから、寺へ行くのは困るまい。併しT君も來てくださらなかったとすれば、道をきき度くも人家は驛前に少しあるだけで、而も寒いから皆表は閉ぢてゐたし、又荷物を持たしたくも人夫等は到底雇へないから、進退谷まった筈である。尤も宿屋はあらうから、ともかくも一夜の宿には困らないかも知れぬが、いくら寺との交渉がすんでゐて、行けば宿泊ができる樣になってゐても、私の經驗では、中中さう簡單には行かない。初めて見學に行くならば、日のあるうちに柴垣驛につくか、左もなくば驛前一泊の覺悟で行かぬと始末にわるからう。

寺は驛から十町とか、近道をすれば八町ですむときいた。鐵道省の案内記によると、「柴垣驛の東北一粁半」とある。さうすると十三町半といふことになる。近道をしたところで、恐らく十町にはなるまい。寺の近くへ來てから表門の方へは行かず、裏道の細い木の葉の一ぱい落ちてゐる道をぬけて漸くつき、座敷へ上って先づ落つく事ができた。其座敷といふのは、約二十年も前から一度見度いと思ってゐた例の欄間のある(一二二五・)書院で、其隣室にも變ったのが見えてゐた(一二二七)ので、すっかり嬉しくなった。但し其夕は風呂はたててなかった。これは望む方が無理かも知れないが、一日汽車にゆられ、下車して寒いところを十町餘も歩いたのだから、風呂ができてゐたら隨分有難かったらう。

翌十一日の紀元節は朝は大曇であった。T君は朝のうち全部案内をしてくだされた。一巡したら丁度晝食の時刻になった。其頃から晴れだし、遂に美しい青空になったので、そろそろ寫眞をとりだした。名名が思ひ思ひに寫眞機をかついで目的物に向った。何にしろ五人が五人揃ってもってゐるので頗る壯觀である。私は先づ第一に書院の欄間をとりだしたが、これは好晴に乘じ日光を反射させたら、定めて上等のが寫るだらう。明日の天氣は北陸の冬だからあてになったものではない。全景なら曇ってゐても埒はあくが、室内は天氣の方がいい事はいふ迄もない。だから先づ誰が何と言っても欄間からといふ量見で初めたのである。

フヰルムは虎の子の秘藏品を七本持ってきた。皆うまく行けば四十二枚できる理窟である。先づ桐と牡丹の透彫から始め、六枚寫して少し滿足をした。この樣な好晴の日に落着いて反射をかけて失敗する筈がない。併し全景を一枚とっておく必要があると思ったので、床の間に寫眞機をたてて室の一隅をねらってゐるうち、どうしたはずみか暗箱が雲臺からとれて疊の上に落ちようとした。ねじでしっかりとめてある筈だから、こんな事がありさうにないのに、落ちかけたから途中で受けとめる目的で手を出したが、受けそくなって疊の上に落ちた。土や石の上なら壞れるにきまってゐるが、疊だから大概よからうと思ひ、早速拾ひあげて一通り檢査したが幸に異狀はなかった(と思った)。

朝鮮での話だが、先年全南康津郡城田面の無爲寺といふ寺の極樂殿内部を寫すため、脇壇の上に寫眞機をたて、位置をきめ、下からとるつもりで注意をして下りたが、そのときに觸れでもしたものか、横に倒し壇上に激突させて了った。下迄落ちたらあきらめもするが、壇上だから萬一助かってゐるかと、怖る恐る手にとって見たら何ともなかった。あの時でさへ無事であったのに、今度は疊の上だから大丈夫な筈である、ときめてかかったのが失敗の因となったのは後に判明したので、此時はほんたうに何ともなかったと斷定をした。

夫から又室内を何枚かとり、紀元の佳節に當り、此上ない記念の寫眞ができたと思ひ、大に滿足してこのくらゐでやめ、翌十二日は本堂から順に内部をとりだした。日光がさした時もあったが、天候は概して面白くなかったから、一日寫していくらもできなかった。三日目の十三日は朝は割合に天氣がよかったので、五重塔の全景や本堂の内部入側のあたりへ反射をかけたり、大に活動をして七本全部とってしまった。

十二日の夕刻には寺で風呂をたててくださったし、又木炭等はいくらでもつかへたので、爐のある室を占領して坐り込み、火をカンカン起して駄辯を弄し、スフの混入しない純米に舌鼓を打って大に納ってゐたが、いつ迄も居候を極め込む事もできず、遂に十三日午前九時頃四人（T君は前日午後辭去されたから）が寺男に荷物を持って案内して貰ひ、再び柴垣驛から乘車、越中の國富山市へ向った。

宿は富山市の素封家で溫厚の紳士Hさんの御高配により富山館といふのに決まってゐた。實は四人で四室を得る樣に前以てHさんに御依頼をしておいたのである。止むを得ぬ場合を除いては、いつも一室一人主義が最もよろしいと確信をして、できる限り其通り實行してゐる。だから今度も四室獨斷でお願をしておいたのである。Hさんからは寒い時だから、蒸氣暖房付の室をとっておくといふお返事を戴き、夫れは暖かでさぞ心地がいいだらうが、同時に宿料も可なりだらうから、S老と其壘を靡するO君は平氣でも、H君や私にとつては寒氣よりはこの方がこたへるのではないかと、心配しながら辿りついたら、宿ではよく承知してゐて、直に表二階の四室竝んでゐるところへ案内をした。つまり二階全部が我我に提供されたのである。蒸氣暖房はない代りに、あたたかさうな炬燵がつくってあった。そのうちH紳士が來訪され、暖房の室は餘り高いからやめましたと言はれたので、安心して大に元氣がでた。

「明日はどういふ豫定ですか」とH紳士はきかれた。明成寺で働きすぎたせゐか誰も返事をしない。私は何にしろあらゆる點に於いて宿が氣に入ったので、ゆっくり休養を致し度かった。どこかへ行って寫眞でもとり度いのは實のところO君だけくらゐで、S老は無條件で私に贊成らしく、H君亦決して人後に落ちる樣な事はない。結句有耶無耶といふ事になった。其明日といふのは卽ち十四日のことで、此日は私は東京へ呼び出されてゐたのであったが、其照會が來ないうちに此度の旅行がきまり、出發の日も定まって繰合せがつかなくなったから斷って缺席をしたが、實は此日は東京の某所に我我にとっては重要な會議があり、私も其末席を汚す義務があったのに、こちらの方が先約なので夫を果したのは當然としても、見學でもして貧弱な頭に幾分の肥料でもやり、多少有意義に暮したのなら、申譯もできるかと思ふが、H紳士に自動車で市内の觀光をさせて戴き、靜かな大通に建てる豪華なホテルで晝食をして屋上から四方の雪の積った連山を眺めて暮したのはどうかと思ふが、もうすんだ事で今更どうもならない。

カガバイといふ腹足類の軟體動物が食膳に上ったり、名產の蒲鉾がでて來たり、餅菓子と蜜柑とは平げる傍からいつも不思議に盆に山盛になってゐて少しも減らず、妙成寺では輕重の差はあったが、一同糖分缺乏症にかかり、中には手後れになった患者も忽ち快方に向ひ、何れも愁眉を開き、滿面に笑を含んで嘯いたり、H君が食後蜜柑を續けて十八平げ、けろりとしてゐて皆を驚かしたり、H紳士の一方ならぬ御厚志を衷心感謝しながら大に納り、十六日には何れも無事自宅へ歸着をしたのは、何といってもめでたい次第であった。

歸った翌日私は可なりの自信を以て妙成寺での寫眞を現像にやった。ところが三四日目にO君が飛び込んで來て、國家の一大事の樣な顏をしながら、どうも大變なことができたといった。何事かと思ったら私のとった寫眞は殆んど全部光線が入ってしまってゐたとの事。「豫てから申してゐたのですが、旅行に出る前には必ず一應寫眞機を檢査してみないといけませんん、殊に蛇腹には最も注意すべきであります」といふ傳言を材料店の主人から賴まれて來たさうであった。御注意はまことに有難い。いくら素人でもその邊は心得てゐるのに、どうも不思議だから早速寫眞機を出してよくみたら、蛇腹を暗箱の枠に取付けてある部分が、妙成寺の座敷の床の間で疊の上に落したはずみに、糊がとれて半分許りとれ、そこから光線が入っ

た事が判った。だから最初とった欄間の透彫六枚は皆よく、其後も堂の内部等でうまく光りが洩れなかったものは助かったが、全景だのは無論皆失敗してゐた。つまり五本半の三十三枚ばかり無駄にしたので、先年態態姫路城へ行って八枚續きの616號のフヰルム四本を寫し、終って歸らうとした時、ある不注意で全部が失敗であった事に氣がつき、殆んど泣かんばかりに失望落膽したのと正に好一對の不覺であった。

昭和十四年四月、朝鮮平北成川へ出かけて、例の有名な客舍の寫眞をとってゐて、不圖氣がついたら蛇腹に孔があいてゐた。細い枝でも突きさしたのか、連子に近く徑一分位のを見出した。そんな事になってゐるとは知らずに三本ばかり寫し、偶然裏から蛇腹をのぞいて氣がついたが、最早及ばず、駄目と覺悟しつつも歸って現像させたら、不思議な事に十八枚の内二枚光りが入ってゐただけであとは助かった。餘程都合よくいったのだらう。

斯樣な奇蹟さへあるのに、妙成寺は運がわるくて失敗したが、他の三君のは何れも好成績であった。だから不足の分はH君のとO君のと、夫から先年飛鳥園主小川晴暘君があの邊を歩いて撮って來られたの等を借用して圖を纒めた。だから妙成寺のは四人合作の觀がある。

*　*　*　*　*

昭和十六年の夏は、年寄の冷水だといって人から冷笑されるかも知れぬが、雲崗の石佛見學を勸められたので行く氣になった。去る大正十四年の十一月、北京から出かけて行って寺へ泊り、數日を費して一通り見物したきりであったから、丁度いい機會だと思った。此度は小川晴暘君が大に斡旋して總て用意をしくださったので、私はただついて出かければいいといふ、洵に好都合にできてゐた。そこで同行者合せて四名が、七月中旬に出發といふ事に相談ができてゐたのに、八月上旬に退引ならぬ用事ができた爲、私獨り八月中旬迄出かけるのを延すことにした。併し丁度其頃は汽車も汽船も乘れるかどうか判らない大事件が起ったので、止むを得ず中止とした。ところが以前から若し小生が雲崗を斷念したら、明通寺へ行って見ないかといふ話を青井之登君からきかされてゐたから、同君にあった時、どうも雲崗は到底駄目らしいからやめにした。就いては明通寺へでも行って見ようかと相談をしたら、同君は贊成をして早速例のT君と交渉を重ねてくだされ、愈よ八月二十二日に出發に決まった。

朝六時三十一分に京都驛を發車、山陰線で行くと綾部へ八時三十三分につく、五分たって逆に引張られ若狹の海岸を行くと小濱驛へ十時半につく。つまり京都から約四時間で小濱迄行く事ができた。これは其當時の時間表なのだが、今でもやはりさうである。寺は此驛から約二里半ださうで、どうせ車は得られないとあきらめてゐたのに、斯道のエキスパートなる青井君は早速車宿へ行って話をつけてくれたから、こちらは其間日蔭へ立ってゐて恩典に浴したのであった。

此度はS老は身體の工合が不良だとか、多忙でひまがないとか、何とか言を左右に托して同行されなかった。そこで同行は明成寺へ行ったO君と青井之登君略稱A君と私と、もう一人暑休で拙宅へ歸省中の未成品を兩君の諒解を得て連れて行った。未成品だから略稱をMとしておくが、建築學を專攻する目的等は持合はせて居ず、私の最も不得手な方面で一人前にならうといふ志望のものだが、家にゐるよりは、私が寺へ行ってどの樣なことをするか、一度位見ておいても損はあるまいといふので、ついて來たのである。だから一行四名であった。

小濱驛で辨當を買って車にのせ、寺を距る一町位の分れ道迄のりつけた。庫裏へ行って來意を告げ、食事を終り一休して本堂へ行ってみた。最初にあった樓門と鐘樓なるものが、洵に感服致しかねる建築で、大分失望をしてゐたが、苟も本堂は

國寶である以上、相當なものに違ひないと思ひながら石段を昇って行った。さうするとそこは幾分廣い平地になってゐて、右手(北)に左(南)を向いて建ち(一三三・)、本堂を右手に見て突き當りの石段の上に三重塔が東面して建ってゐた(一四七)。やがてT君の姿が見えた。熊熊丸岡から新平野驛(小濱の次驛)へ下車して、徒歩で來てくだされたのである。寺へ泊る交渉にしても、A君とT君との間に手紙が往復し、日も決まってT君から改めて寺へ申入れて貰ったのだから、T君にしてみれば、あの連中困って居やしないかといふ樣な親切から、來てくださったことと拜察をした。

本堂は實に考へてゐたよりは遙に美事で面白く、よく來た事だと大に喜んだ。詳細は三重塔と共に後に記載するつもりだから、ここには總て省略する。寫眞をとるのは明日でもいいが、丁度天氣はよし、又いつ變るかも知れないから、今日のうちに少しでもとっておかうといふ事になり、梯子を借りたり賽錢箱を臺にしたり、Mを相手に大に若返って働いてゐたとき、若い洋服を着た人が一人來た。どこから來たか知らないが、暑い盛りに山寺へ來る人もあるものかと思つた。一通り仕事を終って庫裏へ歸ったら、其人は上段の間で何か繪卷物の樣なものを廣げて見てゐた。

非常に遠慮深い若いOといふ紳士で、東大の史料編纂所に勤務してゐると言はれた。「少し研究したい事があって來ましたが、中中時間もかかります。それで院主さんの御厚意で一泊させて頂く事になりました。折角皆樣がおいでになりましたのに、おじゃまをしてすみませんが、どうかよろしく」と、いとも慇懃に申された。間もなく私共一行四人と九岡城のT君と史料編纂所のO君と、都合六人で圓くなり樂しい夕食が始まった。さうして例により例の如く餓鬼大將は私なのだから、どうも洵に恐入ったのである。滿員の乘物中や荷物を持って歩く時、同行者があれば、そこは謂はゆるハッピー・エージで助かるのは有難いが、こんな時にはどうも目立って聊か困るのである。

お寺では「豫て申上ておきました通り何もありません」とて夕食の膳が運ばれた。京都あたりで食べる樣な、長いのや短いのや中位のや、其うちには籾や石ころの混った、普通名稱をスフ入といふのとは異なり、純綿であったから一同喜ぶまいことか、A君等は堂堂九杯を超特急で平らげ、破顏一笑したところをみても、他は類推ができる筈である。

夜はなごやかな話が續いた。明通寺の樂しい第一夜は更けていった。此寺へは實はもうやがて十年餘りにもならうが、是非行って見度く思ひ、二三人で計畫したが目的を達し得ずにしまった。其時以來の懸案は今度漸く果す事ができ、一同大に滿足をした。小泉八雲氏の謂はゆるアンビッヅン　ゲスツは相當に入ってきた。Mはミンミンの8を捕へ、珍らしい(京都では)からもって歸るといってゐたが、餘り鼻がつまった樣な大聲をだすので逃がしてしまった。割合に蚊が少なくて涼しくてよかった。

翌二十三日は朝起きた時は好く晴れてゐた。洗面をするなり直に本堂の前へ行ってみたら、東方から其前面にかけて朝日があたってゐた。正面五間全部が蔀格子で、夫は修理の時全部新しくされてゐたが、そこへ横から日がさしたのだから、ほんたうに美しかった。蔀其物の樣式に就いては、私は少し感心しなかったが、此種の格子は横から日光をあてて見るに限ると思った。

史料編纂所のO君は十時頃辭去されたが、其時此寺には浦島太郎の繪緣起があるので、夫を見に來たのだといはれた。晝食の時住職に尋ねたら、O君の見た儘にしてあったので、一同で拜見に及んだが、頗る面白かった。T君もひる少し前に歸って行かれた。今朝はここから左程遠くない神宮寺へ三人は出かけさうな風に見えたけれども、私はやめる事にきめた。第一は歩くのが面倒だし、第二にはここでゆっくりして、どこ迄も意匠の優れた建築の中にとけ込んで了ひ度かったからであ

る。併しそのうち皆で評議をしてやめにしたらしく、一人も行かなかった。さう深くはないが、山のせゐか朝の好晴はまるであてにならず、間もなく曇って雨が降り、歇んだり照ったり終日不定であった。

第三日卽ち二十四日も亦早起して本堂の部に日のあたるのを見に行った。見學は午前中でやめ、午後は前前日約束していた車の來るのを待ち、二時半になって時間だからと挨拶をして出かけたと同時に、分れ道の所で警笛がなった。時間が精確に守られたのは洵にうれしかった。小濱の町の相當な旅館へ一泊する旨申込んで置くように、運轉手に賴んだが、時間がこの位精確なのだから、此約も勿論果されてゐた。車は四人をのせた儘、海岸に面した靑濱館といふのへ着いた。何故に心地のいい純綿の寺へもう一泊しなかったかといふと、次の朝早く小濱驛發で丹波竹田驛迄行く事にしたからであった。

室は美しかったが、どうも何となしに不愉快であった。きくところによると、このあたりは海水浴をする逗留客を主とするので、一夜泊りなんか相手にされないのが普通ださうである。朝もそんな早たちの客には食事は出さない規定だとか。此頃は宿屋へはとめて貰ひ食事もたべさせて貰ふのだから、何でも先方の言ひなり次第。隣りの室はあいてゐるのに貸さず、六疊と四疊半の室に二人づつ、ともかくも寢た。

最後の日なる八月二十五日朝は早起、洗面して淋しく宿を出た。六時三十七分小濱仕立大阪行の汽車にのり、朝食は驛辨といふ事にして客車の中へ持込んだ。此汽車は乘換なしに九時二十分丹波竹田へつく。下車して遠くない淸薗寺といふのへ貞和三年在銘の石燈籠を見に行った。此石燈は兵庫史談會會員河邊賢武氏の發見に係る。全體變改の個所なき立派な美術品であった。此日は大凡の見學にとどめて更に他日を期し、午後一時四十六分再び竹田から乘車、福地山經由で夕刻京都へ歸った。かくして前後四日に亘る北陸方面第二回の見學旅行は終了をした。

* * * * * *

妙成寺（石川縣羽咋郡上甘田村瀧谷）

此寺には國寶建築が九棟あるといふので、全國に於いて妙心寺（花園）と共に第六位だと頗る御自慢の樣に見受けられる。寺で發行してゐる一枚刷の略說にも其事が書いてあるが、餘り古い建築はない。古くて桃山のもの。但し日蓮宗の伽藍としては珍らしく各種の建築が揃ってゐる點に於いては、確かに唯一といへよう。

寺傳永仁年間（其元年は今を距る六（四九年。鎌倉中期））の建立、金榮山妙成寺といった。其後天正二年前田利家武運長久を祈り寺領を寄附、慶長十七年本堂・開山堂を建立、同十九年大阪出陣の際番神堂・方丈等を建て、元和四年五重塔成り、其他の諸堂は寛文頃になって建築されたさうである。全體としては祖師堂・本堂・三光堂（祈願堂）が南面して並び、東方には樓門と鐘樓、西方には番神堂（鎭守堂）と五重塔と何れも相並び、前二者は西面後二者は東面して建ち、五重塔と矩手に其東南方に北面して經堂がある。經堂と樓門とは大分離れてはゐるが、とにかく此等八棟の建築が東に二、北に三、西に二、南に一と大四邊形をなす如く配置されてゐる。書院だけが少し別のところに建ってゐるが、主要建築の斯樣な配置は注目に値するであらう。

本堂（一〇〇—一〇三）

方五間單層入母屋造棧瓦葺。正面中央の間に深さ一間の向拜がついてゐるが、其向拜の兩端縋破風の上あたりに圓瓦を二本並べて葺いてあるので、向拜の屋根だけは別になってゐる樣に見えてゐる。元は柿葺であったさうだから、さうして棧瓦なるものが江戸時代になってできたのだから、初めからこの樣な式にしてあった筈もないし、餘り感心もできない手法であ

る。棧瓦なるものは、どうしても社寺建築には似合はない。

本堂内部では外陣入側の繫虹梁と化粧隅木下の持送りが注意を惹く。繫虹梁は**一〇一**―**一〇三**に見る如く、此邊の地方色かも知れないが、其彎曲の仕方が非常に目立つてゐる。これで眉や袖切や錫杖彫がなければ、法隆寺あたりの奈良時代の虹梁の樣な氣がする。夫から隅の持送は、形も彫刻も推賞はできないが、こんな所へ用ひたところが面白い(**九**・**一〇**)。科栱は柱上は出三科だが、木鼻(**一一〇**)・大瓶束(**一一〇**)・虹梁の眉と袖切と錫杖彫(**一〇一**―**一〇三**)等に室町式のところが多分にある。出所は一つであらうが、この堂について書いたものをみると、何れも足利末の特徴がある桃山式の建築といふようにいつてゐるのは、右記載の樣な點からいふのではあるまいか。

以前は柱間に建具はなかつたと記したのもあるが、現今は昭和六年の大修理を經てゐるので全部ある。入側化粧屋根裏の部分等は、柱間が開放しであつて**一〇一**乃至**一〇三**のやうな寫眞はとれない。入側と內外陣の境は少しく差をつけ、鏡天井をはつてある。內外素木造。

祖師堂(開山堂)(**一〇四**―**一〇九**)

慶長十七年前田利家が再建したさうで、方五間單層入母屋造棧瓦葺である事も大さも本堂に似てゐる。さうして本堂に竝び其東に建ち、廊で本堂に、及び正面廊で鐘樓にも庫裏にも連つてゐる(**一〇四**に於いて右端のが正面廊、左端のが本堂に連つてゐる廊。左上に少し見えてゐる唐樣の化粧隅木及び繁棰は本堂のそれ)。本堂も科栱は唐樣詰組であつたが、組物が至極簡單な「出三科」に過ぎないので、軒下は至極さつぱりしてゐたが、祖師堂のは同じ詰組でも「三手先」で、其間に尾棰が入つてゐるから、隨分込み入つてゐて、どうなつてゐるのか不馴な眼にはうるさく見えると思ふが、「二手先」の分は既に**四四**にあつたし、三手先の詳細は**一六三**を見れば凡その見當はつくであらう。

外部で注意すべきは妻飾である。妻飾とは側面の鈍角等脚三角形をなしてゐる部分の裝飾をいふのである。全體は**一〇五**にあるが、此では餘り小さくて判然しないから、其2/3位を**一〇六**に掲げておいた。そこでこれに就いて一通り說明をしておく。先づ第一にこの二圖を比べると、拜の懸魚の一方の鯖が、後者にはあるが前者にはない。後者は奈良飛鳥園の小川晴暘君が、去る昭和七八年の頃北陸行脚の折自身撮影されたもので、前者は昭和十六年紀元節藤原君が寫されたのだから、鯖の一つはこの間にどうかしたものと見える。外して寺に保存してあるかも知れないが、ついきかなかつた。あとは變つたところはないやうである。

先づ懸魚から始める。懸魚は「三花懸魚(みつばたけけぎょ)」である。新しい此種のは降りの分になると、場所がなくて一方にしか花が出せないから、自然二花となる。さうして此は「鬱懸魚」である。カブラケギョとは其面に、古くは一點より放射形に、新くは平行した同曲率の弧線模樣を附するのである。故に此は「三花鬱懸魚(みつばたかしわけぎょ)」である。私の知つてゐる最古の例は永保寺開山堂禮堂妻の夫である(**一一六**)。三花も鬱も何れも室町時代で相當に用ひられたが、多い方ではなかつた。夫が桃山以後になるとずつと增してくる。併し形は遺憾ながら拙くなつてきた。鯖も亦鎌倉末になつて新しく(恐らくは木鼻から)案出されたものの如く、やはり永保寺のは最古の一と考へられる。鯖も漸く發達して若葉となり雲となり浪となり、牡丹となり菊となり、といつた風で、これも他の彫刻類同樣、桃山時代に入つてから隨分美しくなつたのである。祖師堂のは拜みの分は「浪に兎」、降りの分は「若葉」であるが、ここでは前者を講究してみることにする。

「浪に兎」の模樣は室町時代に起原するものの如く、石燈籠の火袋に「浪・兎・新月」の浮彫をしたのがある。建築彫刻で

は桃山時代の板墓股の中心に圓文を凹め、その内にほったのがあるし、江戸初期になっては墓股の兩脚内に見出される。江戸でも末期（或は明治かも知れぬが、様式は江戸末）の一例として、向拜の手挾に用ひてゐる。私は寡聞にして鎌倉にあるか否かを知らない。だからここには室町以降としておく。さうすると祖師堂は桃山建築だから浪に兎はあって少しも差支はない。南（向て右）のは兎が左を向き浪の上をかけ上り、北のは振り反って後ろの兎を見ながらかけ下りてゐるところに、僅かながら變化を求めてゐる。何でもないやうだが、これでも充分考へてやってゐることが判る。

次に妻飾を全體としてみると、「二重虹梁大瓶束」で、奈良時代に起原せる二重虹梁墓股の墓股を、大瓶束を以ておき變へたに過ぎぬのであるが、其虹梁・大瓶束・科栱等は本堂のと同様式でやはり室町の色彩甚だ濃厚である。下方虹梁は餘りに長くて一木では得難かったか、中央で二つ接いであるが、其下に裝飾を兼ねた科組の内、敷面に彫刻をした大科に含まれた繪様肘木の上に二科をのせたものが大瓶束の下方に用ひてある事を看過してはならない。この大科は敷面の横に文様を充たした格狭間を刻み、さうして繪様肘木に二科をのせたところ、正に鎌倉直系である。

其次には兩大瓶束の間に用ひてある大きな墓股を逆置した様な彫刻物で、これは何といふ名にしたらいいか考へてゐる。つまり大瓶束下のでいへば、繪様肘木上の二科に含まれてゐる「實肘木（さねひぢき）」が異常な發達をしたもので、これでは實肘木といふのは少し當らぬやうだし、去りとて花肘木といふのも工合がよくない。どうもこれ迄他では見受なかったし、從て名稱も知らないし、困ってゐるが、名無しでおく事も出來ないから花肘木の變種として取扱っておく。さすがに變種だけあって隨分込み入った彫刻がしてある。先づ其下の二科を觀察する。

其二科は大瓶束下のと同じものだが、大科の科繰の背が少し高い。三つとも同じにしても、上の方で高さを少し位調節するのは何でもない、然るになぜ高くしたかといふに、夫は私が計畫したのでないから、單に想像に止るが、變形花肘木が餘り大きいから、いくらか科繰で加減するつもりか、或は其背が少し足りないので、丁度適當の木材もなし、旁大科の科繰へもって行ったのかも知れない。次に其上の大きな彫刻に移るが、人物がほってある所に注意すべきである。何の場面を現したのか、いづれ支那の古事か何かだらう。列仙傳のうちからとって來たのかも知れないが、とにかく人物がゐる。日本建築に於いては、人物は古くて室町末位のところで、昔は全くなかった。此點埃及・印度・西亞・希臘・羅馬あたりの建築と全く異なるのである。

而して日本では桃山からあちこちに珍らしくない。京都附近で二三の實例を擧ぐるならば、大德寺唐門・御香宮神社表門墓股・園城寺金堂墓股等で、寛永になると日光東照宮唐門には群像がある。江戸末から明治にかけてのものなら京都には本願寺に代表的の墓股がある。先づかういった様な次第であるから、この場合浪があり山があり、左方に坐してゐる女と右方に何が擔いで鬚を生やした老人がゐても、それは此建築が桃山時代だといふ事に考へ及ぶと、當然この様な彫刻があってよろしいのである。恐らく室町建築であっても、若しこの位置にこの様な大きな彫刻を用ひるとすれば、文殊院白山堂（奈良縣磯城郡安倍村安倍村社。文殊院境内所在）側面の大花肘木の様なものにしてあるに違ひあるまい。

次に内部外陣を調べて見よう。第一に**一〇七—一〇九**と**一六七—一六九**とを比較してみると、そこにどれだけの差があるか。多分誰でも直に氣がつくことは、大瓶束の形が前者は太く結綿が短く、後者は太さは同様だが結綿が長い。あとは肘木下端の持送りが、甲は草花乙は雲の差がある位。科栱は外部三手先は内部二手先全く同様で、虹梁もよく似てゐる。ただ祖師堂のは本堂のと同じく地方色が出てゐるだけの事。だから失禮な申分かも知れないが、遠慮なしにいふと、熟練しない眼

にはどちらも同一に見えるのである。妙成寺の建築のうち本堂・祖師堂・塔婆に就いて、文部省宗教局に於いて作成された解説のうちに、「共に禪風の建築にして造構巧麗、大體に於いて足利末期の特質を遺存し、之に加味するに桃山風の雄麗なる手法を以てせるは極めて珍奇なり」とあるが、正に其通りで洵に巧に評がしてある。

鎭守堂（一一〇—一一五）

方五間單層入母屋造桟瓦葺。開山堂に比べると頗る簡單なもの。圖にも明らかな樣に枓栱は出三枓であるが詰組でなく、枓栱間には何もなく、棰も單に繁棰だから、唐樣には違ひないが其要素は大分稀薄である。此堂一名三光堂（堂内に日天子・月天子・明星天子を安置するので三光堂とも呼ぶと同寺略縁起にある）といふさうで、どこにもさう書いてあるが、ある一書にだけ別名を番神堂としてあるのは、祈願堂（六一）の夫と入れ違ったものと見える。元和九年の建立。内外素木造。

内部正面内外陣のうち中央の三間は、欄間に牡丹唐草を入れてある（一一一）。中央に花があり、殘部は便化した唐草式の葉を埋めてあるが、夫も圖に示した一例は左右相稱にしてないところに、幾分形式に捕はれてゐない、獨創的といふ程ではないが、變った手法を見せてゐる。須彌壇は**一一二**の如く和唐折衷ともいふべきもので、正面三つの羽目板の特殊格狹間の牡丹か芍藥か面白いが、これは第二にして、最初に輪郭を考へてみる。私はここに格狹間とかいたが、普通にいふ格狹間とは大分形の變ったもので、平安以前には見ない形である。

然らば此種の輪郭はいつ頃からできたかといふに、はっきり判らないが平安後期、つまり藤原時代ではないかと思ふ。但し其頃はかういふ所へ用ひられなかったらしく、臺座等の出隅位にどうかするとこんな形がほってあった樣である。鎌倉以前は格狹間といへば其輪郭は殆んど一手にきまったもので、大概**一八二**—**一八四**の樣であったが、鎌倉頃からもう一種**二七**・**六七**の樣なのができてきて、相當にあちこちに用ひられたから、つまり二種類になったのである。このあとの方のも、よく考へてみると鎌倉になってから突然に出現したのではなくて、早い話がこの形が隅の所で背中合せになってゐると思へばよろしいが、その樣なものが用ひられだし、夫が鎌倉へ入ってから、格狹間が行詰ったから、向ひ合はせて一つの輪郭を形成させ、格狹間の代りに其場所に應用したと考へられぬ事はない。併し又一方、東大寺開山堂廚子臺や、唐樣須彌壇勾欄の平桁地覆間にこんな形のものが入れてあるから、もう少し調べてみないと確かな起原は判然しないやうである。

判然はしないが、鎌倉以降ある事はある。鎌倉から室町を通り、桃山にあるのは當然である。更にまた前記した樣に、この輪郭を背中合せにした樣な形は、平安時代迄下らないでも、奈良時代に似たものが存在してゐる。正倉院御物の中に、多く見出される小工藝品の脚は殆んど此種であり、又法隆寺五重塔初重内部北側涅槃像の臺にもある。だから或はその頃から追追といろいろの所へ應用されて、平安を經て鎌倉に現はれたのかも知れない。

輪郭の事は其位にしておいて、内部の花と葉とに移って行く。先づ第一に中央のをみると、中心にこちら向きの滿開の花、左右に蕾を配し、あとは便化した葉と莖とで、大體が左右相稱になる樣に、實は少し異なってゐるのは變化をもたせるためか、或は略ぼ似ればよろしいと考へてか、とにかく然るべくやってある。どうも牡丹ではないらしく、「しゃくやく」か「天竺ぼたん」の樣である。どちらも渡來植物とあるが、前者は亞細亞東北地の原産で後者はメキシコださうだし、又前者は葉を少しく便化すればこの樣に容易になり得るから、さうらしく思はれるが、牡丹が初めて建築彫刻の一部に用ひられたのは鎌倉時代らしく、私の知ってゐるのでは弘安五年の建築たる圓覺寺舍利殿の須彌壇羽目板に入れてあるのである。だから其後にあるのは當然である。

而て中央に花左右に蕾（又は半開の花、乃至蕾や半開の花を然るべく配置し、間に莖葉を入れた）といふ様な配置をとりだしたのも亦鎌倉末からしい。さうして桃山になって殆んど型が定まり、其儘江戸時代に持越したのである。だから此場合でいふと、中央の分（一一四）が典型的のもので、上と下（一一三・一一五）とは略式だが、一はほんたうの蕾とし、一は半開としたのは面白い取扱である。此等の装飾は縦から見ても横から見ても桃山は動かない。

祈願堂（番神堂）（一一六・一一七）

純然たる神社建築で三間社流造、正面に軒唐破風がある。此種軒唐破風の最古の例は、法隆寺聖靈院廚子・石上神宮攝社出雲健雄神社拜殿等に於いて實例があり、共に鎌倉のもので、鳳凰堂中堂下層廂の中央の一段高くしてある部分の兩端を下げて、左右の廂に接せしめると、軒唐破風になるところから考へると、鎌倉時代に初めて出來たとしてよささうである。室町の一例を記すと上醍醐清瀧堂拜殿であり、桃山では飛雲閣第二層には三方（正面と兩側面）にあるし、もう少し降って日光東照宮の時代になると、陽明門の上層には四方についてゐる。京都の北野神社拜殿正面にもあるから、むやみに飾り立てた桃山建築には、ある方が寧ろ當然といへよう。同寺でつくった諸堂解説に「慶長十九年藩主二代利長公京都天滿宮より移建せられたるもの……」とある。果して事實ならこの様な外觀であるのは決して珍らしくはない。

向拜の部分は兩端に柱を立てただけで、三間持放しとしてゐるにも係らず、柱も虹梁も總て割合に木割細く、其他の部分も一般にきゃしゃであり、蟇股等も甚だできがよく、輕快な建築で時代の特徴が遺憾なく現はれてゐる。

五重塔（一一八）

元和四年の建築といふ。【日本古建築菁華】によると「破損甚だしく東方に傾くこと一尺五寸、明治四十三年暴風の爲九輪破折し……修理するところとなり稍面目を一新せり」とある。境内諸堂の解説に（尺單位）

方　一六・〇〇、　全高　一一二・八〇、　露盤下迄　八〇・〇〇。

とある。方十六尺は柱眞なるべく、高さは石口からであらう。さうして修理の時に測定した寸尺らしいから確かであらうと推察される。さうすると、相輪の高さは三二・八〇となるから、相輪と塔身との比約 $\frac{1}{2.4}$ となり、割合に長い相輪である。だから形も相當によろしいのであらう。どの書物をみても室町末期の特質を備へてゐるとか特徴を示してゐるとか書いてあるが、文部省宗教局で作成された調書に本堂・開山堂・塔婆共、「禪風の建築にして造構巧麗、大體に於いて足利末期の特質を遺存し……」とあるのから出てゐるのであらう。一見したところでは出羽神社塔婆（山形縣東田川郡手向村出羽神社境内）の様である。

修理の際落雷の危險を考へたものか、避雷針を架けたのは結構だが、各重の屋根の隅から其頭部を斜に上を向けてだしてある。屋根は柿葺だから、三つに分れた避雷針の頭が、恰も「カゲロウ」か「イトトンボ」の偉大なる幼蟲がむかふ向きに休憩をしてゐる様で、大分目障りになってゐる。もう少し眞っ直にたてるか、左もなくば一本にしたらさうでもなかったらうにと思はざるを得なかった。

初重四方出入口の棧唐戸がどこ迄も桃山式である（一一九）。辻に四葉を打ってあるところは、可なり此種の裝飾としては原始的で、もう元和位になったらば、普通ならここにも少し用ひてある様に辻金物（十字形又は丁字形等）にすべきである。綿板の彫刻は鳥獸を入れてあり、又植物では柘榴を用ひてゐるのは珍らしい。四方共左右表裏で皆替へてあるから、一つ一つ見ると面白いが、手帳へつけて來なかったので、皆忘れて了った。

初重内部では須彌壇（一二一）と天井廻（一二〇）とに注意すべきである。四天柱上部は頭貫の木鼻と臺輪も共に唐様である

のに、天井は小組格天井で、臺輪と天井廻縁との間には彫刻を入れてある。このあたりは和様と唐様との折衷をよく現はしてゐるが、これは時代が時代だから、勿論さうあって然るべきである。次に須彌壇であるが、これは先づ唐様といってよからう。圖の通りで別段説明しなくてもよからうが、羽目板に蓮の彫刻を入れてあるところが、幾分室町系であると思へるのである。

鐘楼（一一二）

寛永二年の建立といふ。袴腰のある普通の鐘楼で、この種のものは決して珍らしくない。既に鶴林寺鐘楼のところで記した様に、鎌倉以前に見ない型であるが、其以後は先づ費用が充分ある場合はこれで、不充分の時は四方轉びの四本脚のを建てた様である。

樓門（一一二）

此建築物も亦寛永二年ださうで、三間一戸八脚門入母屋造桟瓦葺。何れ當初は柿葺であったのだらう。鐘楼でもこれでも別段特に秀でた點があるといふこともないし、どちらかといふと平凡である。日蓮宗の伽藍として、多くの建物が全部揃ってこそ、勿論價値はあるが、これだけ一つや二つはなしたのでは、忌憚なく言へば大したものではない。

經堂（一一三）

寛文九年の建立ださうだから、鐘楼や樓門に後れること四十五年で、これが最も新しい。正面は三間だが、側面が五間の四注造。此内に天海版一切經及び法華經版木を收む。三間五面の前一間を吹放してゐて、柱も總て方柱をたててゐる上に、吹放の部分の兩側面は窓の様に開放がしてある。本建築は細部等大して見るべき點はないが、經藏としては型破りで、餘り類例のない形式である。これは當初から桟瓦葺であったかも知れない。

書院（一一三四―）

寺では慶長十五年と言ってゐる様だが、文部省の調書其他には元和二年とある。これに從っておく。桁行七間梁間五間單層切妻造桟瓦葺だが、元は柿葺の説が正しいのである。書院には各種の欄間があり（一一三五―一一三〇）、各室皆異なってゐて面白い。書院造を專門に研究してゐる人から見れば、いろいろ變った點もあるかも知れぬが、私は其方面には素人のためか建築としてはさう興味を惹かなかった。豫てから見度く思ってゐた欄間をゆっくり觀察ができて非常に滿足をした。其うちの若干に就き、左に略説をしておく。

桐と牡丹の透彫は、どちらも同じ様なもので、夫夫中心飾が桐（一一二五）及び牡丹（一一二六）で、前者は骨線が上から下へ、後者は下から上へ波線をなし、夫から便化した唐草葉が出て、空隙を巧に充たしてある。牡丹の方は確にさうらしいが、桐の方は或は蔦の葉かも知れない。桐なら大概五七とか五三とかいふ様に花が三本上の方に出てゐるのに、これは葉に中肋も支肋もないし、三枚の主葉の間にも上にも小葉がついてゐるし、桐とは少し異なってゐる様である。とにかく植物の葉であることは確かといへる。

次の一二七・一二八は多少圖案化した偉大なる劍酢漿（けんかたばみ）であらう。どうも餘り大きすぎて、少しばかり似合はない様である。併しよく桃山式を現はしてゐる。

次の二例は篋欄間（はさらんま）の中央へ格狭間を入れ、其格狭間の内は何れも精巧な彫刻を充たしたもので（一一二九・一一三〇）、甲は「水に鴛鴦」に菖蒲（アヤメ、カキツバタ、ハナシャウブ、イチハツ、どれか知らないが、とにかく「あやめ科」の植物）」、乙は「粟に鶉」である（一一三一）。此等に就いて研究をしてみよう。

筬欄間なるものが、凡そいつ頃から發生したか、實ははっきり答がしかねる。研究不足で未だそこ迄はっきりしてゐない事を卒直に告白するが、大概桃山頃ではないかと考へてゐるのである。河内觀心寺庫裡(書院)には筬欄間の隨分美事なのがあるし、桃山・江戸時代の方丈や書院等の夫に珍らしくないからである。さうしてその中に此場合の樣に精巧なる彫刻入の格狹間を入れたのも、例へば恩賜元離宮二條城二の丸御殿の夫に見る如くである。だから慶長十五年としても元和二年としても、其頃の書院造の欄間に此種のものがあってよろしいのである。

其次に格狹間であるが、この輪郭をみると、まるで締のない曲線の連續で、其間に「茨」をつくってゐるだけであり、全體としては單に漫然と膨んでゐるに過ぎない。膨んでゐるのならまだいいが、上から壓しつぶされかけた時、上側の曲線が波狀を呈した樣で愈よ拙くなって了ってゐる。もっと惡口をいふと、逆にしてもやはり格狹間として通用させられる。併しながら桃山になると、總てといっていい位に曲線はまづくなるのだから、この時代にこの樣な輪郭のがあって當然である。時には驚く樣なしっかりしたのもあるが(一八二—一八四)、先づこんなのが通り相場だから、さう思って我慢すべきである。

夫から其内の彫刻を考へてみるが、「粟」は確かに言へないが、「花菖蒲」の方は桃山位から相當に賞用されたものの如く、一例を擧ぐれば京都大德寺唐門の墓股内の彫刻にある、さうして其花菖蒲が池に生えてゐて、其池には雌雄の「おしどり」が遊んでゐる場面で、粟と鶉が秋とすれば、これは夏であらう。内部の彫刻がまことによくできてゐると反對に、輪郭がまことに拙いのが、大變な矛盾の樣に見えるが、いつもこれで矛盾でも何でもない。若し少なくともこの輪郭が鎌倉・室町位であったとすれば、夫こそ不思議千萬で、隨分考へさせられるのである。讀者諸君若し少しでも疑はれるならば、桃山　江戸時代の墓股を研究し給へ。板墓股は常に話にならないし、刳抜の方は洵に心細いなさけないブクブクの輪郭内に、勿體ない樣な美事な彫刻の入れてあるのが普通であるのを見出すであらう。

*　*　*　*　*

明通寺（福井縣遠敷郡松永村門前）

遠敷は字の通りならトホシキだが、夫では通用しないので「オニウ」と訓む。甚だやっかいであるが仕方がない。寺傳によると大同元年の創建ださうで、本堂は正嘉二年、三重塔は文永七年の再建といふ。正嘉二年と文永七年とは相距る事十二年。僅か十二年だから、細部等似てゐる方が當然である。三重塔に就いては「鎌倉時代に於ける此種塔婆の好典型なり」といふ評がある。夫は勿論さうであらうが、私は本堂が大に氣に入ったので、こんなに面白い意匠の働いたものである事が知れてゐたら、もっと早く來ればよかったと思った。

本堂（一三三—一四六）

桁行五間梁間六間單層入母屋造柿葺。先年大修理の時の測定によると(單位尺)

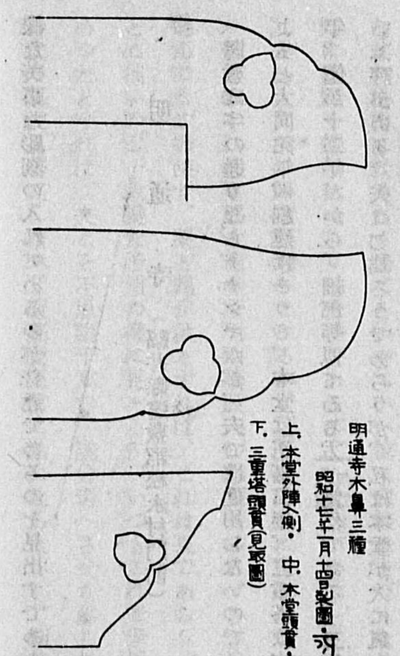
正面(柱眞眞)	四八・六〇	側面(柱眞眞)	四九・〇八
棟高(礎石上端より箱棟頂上まで)	四一・七八	軒高(地上より)	一八・二四

とあるが、礎石は總て一平面上にあるとして、どれから測っても同じだからいいが、軒高の「地上より」といふのは、まさかに地面は水平ではあるまいから、これでは少し曖昧であるが、大體の見當はつく。尙ほ記入の寸法によると梁間は桁行に比べて僅に四寸八分長いだけで、それが八間以上もある大きな建築だから、殆んど正方形の平面であるといへる。夫で前の

方の深さ三間が外陣で、殘りの三間が內陣になって居り、周圍の椽は內外陣の境のところ卽ち側面中央の柱の所で、後ろの方が一段高くなってゐる、といふよりは一段高くしてあるといった方がよささうである。

正面中の間に深さ一間の向拜がついてゐるが、これは姑く措き、主屋の枓栱は「出組」、枓栱間は正面は蟇股、兩側面と背面とは「一間枓束」(一三三—一三八)。他に木鼻と椽束の圓いことが注意を惹く。入母屋の妻飾は「二重虹梁大瓶束」、向拜及び繫の海老虹梁と共に、大凡桃山頃に修補又は補加されたものではあるまいかと思はれる。但し向拜の蟇股は古式を後に見習って造ったのかも知れない。遠慮なく批評すると、向拜は大して感心ができかねる。併し主屋の蟇股は注視する必要がある。

一三七は正面の蔀戸を吊り上げて、其上に寫眞機をたてて寫したものだから、殆んど立面圖に近い形になってゐる。これでみると發達洗練された左右相稱の原始的鎌倉式刳拔蟇股で、幾多の類例があるにはあるが、內緣に沿ひて其中頃から中心飾を形造るべく出た幹莖の下端に接する邊から、逆の方向に苞が出で、其苞から蔓莖が出て二つに分れ、其一方が內緣の上方に達して幹莖と平行をしてゐるために、兩脚內は實質と空間とが洵に面白い文樣になってゐる。此點に於いて此種の蟇股としては儕輩を擢たものといってもよからう。



明通寺木鼻三種
昭和十七年一月十四日製圖・河
上、本堂外陣(側)・中、本堂頭貫・
下、三重塔頭貫(見取圖)

尙他に頭貫の鼻を觀察すべきである。一三八に小さく寫ってゐるが、これではただ其輪郭が判るだけだけれども、挿圖で其「猪目」が謂はゆる瓢箪形をなしてゐることがはっきり判ると同時に、其瓢箪の向きこそ異なってゐるが、ここのは總てからなってゐるのは、地方色といへないにしても、少なくとも明通寺に於ける鎌倉建築の特色といへるかも知れない。ある書物に外部は唯その細部樣式手法が藤原時代の遺風を繼承せるのみだといふ樣な批評がしてあるのを讀んだことがあるが、これは少しひどすぎる書き方ではあるまいかと思う。

此堂の內部の評に「複雜混然名狀すべからざるものあり」といふのがある。これは多分餘りに込み入ってゐて、大して感心ができかねるといふのであらうが、私としては多少意に滿たないところがなくもないにしても、大體に於いては、洵に獨創的意匠をだしてゐて、珍らしい作だと見てゐるのである。平凡な建築家では、到底これだけ自由自在にこなし得なかったらうと思ふ。

以下に夫を記してみるが、外陣から始める。

既記の通り此建築は桁行五間梁間六間であるが、他の多くの例の如く深さ一間の入側が周圍を一廻してゐる。入側の部分は總て化粧屋根裏で、繫虹梁を以て入側の柱との連絡をとってゐる(一三九・一四〇)。併し入側柱の方が側柱より長いから、此等繫虹梁は一方は柱の上部に近く取りつけてあるが(一四〇)、他方は柱上に出三料を組み、この內方に出た肘木上の枓に虹梁の下端を含ませ、其端は通肘木と合缺きとし、其通肘木の上に板蟇股をのせ、此板蟇股で內から見れば極掛(一四〇右下・一四一)、外から見れば通肘木を支へてゐるのであるが、外の方は蟇股ではなくて三枓にし

明通寺本堂大虹梁の鼻

(昭和十六年八月二十二日)
總て一木から刻み出してある。木鼻の形及び瓢箪型猪目は前頁挿入の凸版の上圖に明かである。

てある(一三六・一三八)。さうして其紫虹梁の鼻は肘木と同じ寸法をもたせて前方へ伸ばし、外部に於いて一手先目の枓に含まれた肘木と合欧ぎにして其後方でおさめるか(一三六・一三八)、或は中央の間の兩側に於けるが如く、裝飾として前方に突出せしめてある(一三五)。入隅の部分はいふ迄もなく直角に曲ってゐるから、平たい蟇股は使用できない。そこで中央から縱線で直角をなしたものを平氣でつかってゐる。私共では中中この樣な氣のきいた考へはでて來ない、全く自由自在で敬服にたへぬ(一四)。

何れにしても內外では、正面に於いて蟇股の位置と種類が異なってゐる。卽ち外部で刳拔蟇股の位置に內部では間枓束があり(一三九右)、外部で出組枓栱の位置に內部では枠肘木を組んだ出三枓と板蟇股とがある。併し側面及び背面に於いては、外部で間枓束の位置に內部でも同じく間枓束があり、外部で出組枓栱の位置に內部では出三枓と板蟇股があるのである。だから內部では側柱の上部の壁面のところは、四方共同樣にしてある(一三九)。外部では正面と側背面の枓栱間の裝飾を異にし、正面を立派に見せてゐるのに、內部入側のところでは四方共同じにした上に內外の取扱や細部の手法をかへて變化をもたしてゐるのである。これが私の感心をした一つである。

次は外陣に移って行くが、外陣では中央の二本の柱の間に、前後に太い大虹梁を架渡してある。實に大きいもので、これこそ僞のない正眞正味の大虹梁。冀に少し意に滿たないところもなくもないとかいたのは卽ちこの大虹梁を指したので、全くどうも太過ぎて始末によくない。これ位のものを使用しなければ、上の荷重を支へきれないのかも知れない。左樣なら致し方はないが、見たところは困るのである(一四三・一四四)。けれども其鼻卽ち入側に突出してゐる方の取扱はうまくしてある。決して外陣のあの不樣な大きさと太さとで困る樣な事はない。卽ち挿圖に見る通り幅だけおとして肘木と枓と木鼻とを一木から刻みだしてある。形だけは肘木が出て其先に枓がのり、其枓で更に其上に木鼻に終れる肘木を支へ、其肘木の上にもう一つ枓が乘り、其枓で實肘木を受けてゐる樣に見せてある。正面外陣と入側との間の柱が四本たってゐるうち、中の二本の上に大虹梁が架けてあるから、そこがかうなってゐるので、兩端のは一四〇の上に見る樣にしてある。かうして比べてみれば其差が判るが、下から眺めた位ではまるで區別がつかない。

外陣は入側の部分より一段床を高くしてあるが、其部分には組入天井をはり、又枓栱は三枓で兩側面中央の柱上からは二先手(前方にだけだしてある)の枓栱を以て天井の骨組を支へてゐる、尙ほ其他細部の有樣は一四三・一四四を見れば自然に判明する筈である。夫から此等の二圖に少し見えてゐる引違格子や欄間の菱格子は新補か推定復原か或は取替へたものか知らないが何れも新しくなってゐる。さうして內外陣境の柱上は三枓上に實肘木を含ましてあるが、これはさう見えないところだから、簡單でよろしいわけである。

內陣三間の內兩脇の間は外陣同樣組入天井であるが、中の間だけは天井を高くし新しい格天井をはってゐるのは、疑もなく後世の變改と考へられる。內陣の奧に須彌壇があり、和樣で蕨手附の勾欄を廻らしてある。內陣は總て光線が不充分で、疊った日や雨天には天井廻りは薄闇くて見えにくいが、奧の方の入側との取合はせの部分が、他に殆んど見た事のない變った手法を用ひてあるのは看過できない。其部分を漸くのことで寫眞にとり、一四五・一四六に掲げておいたが、圖だけでは判りにくいから、次に簡單に記しておく。

折角とったものは何年たっても全然進歩しない素人寫眞に過ぎないから、黑くてまるでわかるまいが、大體かういふ事を頭に置いてみると、いくらか目鼻がついて來るであらう。內陣須彌壇後方の二本の柱は、側面の入側境の隅柱(一四五左手に見えてゐる太柱)より少し——ほんの少しばかり——後方に位置してゐる。其後方の柱に挿込んである貫は背面入側の繫虹梁に側面に取

付いてゐる(一四五・一四六)。其眞上に榧掛を入れて、間に壁をつけてある(一四五・一四六)。ところが內陣の天井廻椽は後方の入側境の隅柱の丁度眞上を左右の方向に通って居り、夫を隅柱上の科栱で支へてゐるから(一四五上方左から右へ、一四六右下から左上の方向へ、兩者とも前方にだけ出てゐる二手先の科栱を以て支へてゐる)、組入天井は其廻椽の所で終りとなり、そこから後方は入側の化粧屋根裏の榧と、榧間の白いところが見えてゐる(一四五では左上から右下に向ひ化粧榧の全長が見えてゐるが、一四六では一部分しか見えず、其上陰になってゐるから遺憾ながら判然しない)。其上此兩圖に於いては、柱上部から內陣に向って出てゐる木鼻が、他の部分の夫と同樣特殊の形をなしてゐる事が判るし、又背面の側壁のところも、正側面同樣柱上は出三科と板蟇股とであるが、當初からのやり方か或は後世の仕事か、繫虹梁の上下に白壁をつけてあるから、出三科も板蟇股も縱に折半されて了ってゐる(右下一四五)。さうして一四五は西北隅を東南方から、一四六は東北隅を西南方から見たものであるが、前者は光線不充分であったのに、後者は朝で强い光りを反射させたものだから、まっ黑な影が白壁にうつり、反て混雜して判りにくくなって了った。要するにこの樣な寫眞でいくら說明を書いても、夫は書いた人に判ってゐるだけで、机の上でいくら圖と首っぴきで讀んでも隔靴搔痒の感は免れない。實物一見に限るのである。

三重塔(一四七—一四九)

本堂を右手に見てつき當ると、數十級の石階があり、其上に東面して和樣三手先科栱の三重塔が建ってゐる。旣記の通り文永七年の建立ださうである。「手法鎌倉時代の特色を發揮し、その形態がまた美しい」、といふ批評があるが、文永の再建が是認されてゐる以上、當然過る位當然な評である。現在棧瓦葺だが、以前は柿葺であった。外部では第二　三重の勾欄に腰組の代りに卷科を竝べてあるのと、木鼻に例の瓢簞猪目が用ひてあるのが眼立ってゐるが、初重勾欄擬寶珠の中の篠の上下にある銘の一例をあげると

元祿十五壬午歲　若州明通寺　田中伊賀　御室御所佛具師　藤原爲秀作

であるが、他のは元祿十五壬午年」八月日」と二行にほってあったりする。とにかく元祿の擬寶珠では、見ないでも大概其程度は想像ができるだらう。これを造った田中伊賀といふ店は今でも京都にある。さうして諸寺へ出入して何か造ってゐる樣であるが、其家の先祖の作と見える(一四七)。

內部は床拭板敷、四天柱は極彩色の文樣を描き、和樣須彌壇があり、柱下も須彌壇地覆下にも、全部優美な複瓣蓮花文を廻らしてゐるが、其上のチリに珠文を竝列させてゐるのは、雄蕊か蓮實かを便化させたものであらう(九一四)。和樣須彌壇に和樣勾欄を廻らし、四方の羽目板には橫の盲連子を入れてある。壇上には正面向に釋迦三尊、背面向に彌陀三尊を、丁度背中合せに安置してあるが、いづれ後者は臨時のものであらう。內外陣とも折上小組格天井で、格椽には唐戶面、小組格には猿頰面がとってある。

四方の出入口を除いた八つの壁と四天柱とに十二天の圖がある。丁度十二場所があるから、一天づつ描いたものと見えるが、其繪はずっと後世のものと見られ、到底鎌倉のものとは思へない。だからこれ等の十二天も當初からかどうか、文書でも調べてみたら何とか判るかも知れぬが、さうでないと困りものである。其配置は

東側北	梵天	東側南	梵天	北側西	帝釋天
南側東	毘沙門天	南側西	風天	北側東	伊舍那天
西側南	水天	西側北	火天	東北四天柱	日天
				東南四天柱	月天
				西南四天柱	羅刹天
				西北四天柱	焰摩天

となつてゐる。これで正しいかどうか、專門外なので判然しないが、とにかくかうなつてゐる。そのうちで水天像の七分身を一四八に掲げておく。なぜ特に水天をだしたかといふと、蛇殊に印度の蛇なるナガに就いて大に關心をもつてゐるからである。

水天像の頭上からは、蛇頭が幾つ出るべきものか、【佛教圖像集古】所載のものは七、堂本印象氏が四天王寺五重塔の四天柱に描かれたものは九頭だが、大和長谷寺金剛界曼荼羅成身會のは五蛇がでてゐる。さうして此場合にも亦五頭蛇である。私にはよく判らないが、奇數でさへあれば三・五・七・九どれでもいいのだらうが、三は餘り少なくて淋しいせゐか、五か七か九を用ふるのだらう。尙ほ同圖錄には「左手拳右手取索」としてあり、圖もさうなつてゐるが、明通寺のは右手に劍を持ち、左手に持つてゐる索は耳のある小蛇にしてある。これでは三昧耶形が有耳蛇で大分面白い。糞誡の事をかくと相當に長くなり、話が横道にそれる心配があるから、これ位でやめておくが、すべて十二天共畫風はこの樣である。そこで私はこの樣な繪は凡そ桃山時代位にかいたのではあるまいかと思つた。本堂の妻を修理したり向拜をつけたり、三重塔初重內部に十二天像を描いたり、時の住職が大に手入をして面目を一新したのであらう、と思つてみたのである。

岐阜愛知紀行

此方面の古建築見學旅行は既に何回か試みた。初めて永保寺へ行つたのは昭和二年一月の事で、既に今を距る一昔半前であるが、翌年九月再度永保寺へ行つた序に、初めて定光寺を見た。其翌翌年なる昭和五年夏飛驒の高山へ行く機會に惠まれたが、汽車は下呂の一つ手前の燒石迄開通して居ただけで、ここから自動車で高山（當時は未だ市にはならず町であつた）へ向ひ、途中久津八幡神社へ參拜、高山町に滯在中國分寺・安國寺・荒城神社等を見學することができた。次はまた夫から二年目の昭和七年に、一月と二月と續けて此等二縣の一部分を歩いた。其次はまた二年目の昭和九年十二月に、名古屋を中心としてそこいらを見學したが、此時豫てから希望の寶飯郡八幡町八幡宮本殿へ參拜することができた。斯樣にしてともかくも前後六回、この邊へ行つたが、夫限りになつてゐた。

昭和十六年春、初めは冗談の樣な話から遂にほんものになり、大に若返つて雲崗の石佛寺へ再度の見學に出かける事にきまつたので、實は副產物に望を囑してゐたところ、國家非常時にも係らず、二年目に一回實地見學をするから是非一所に歩けと、前からの信州勇猛團との約束を實行せねばならぬ事となり、夫が八月一日から六日迄と決つたのと、他に事情もあつたので、大同へは行けなくなり、斷然割愛して了ひ、七月初旬に團長Y氏代理副團長T氏と打合はせた結果、やはり名古屋

から高山邊へかけて歩き巡る事となつた。その豫定のうちに定光寺は入つてゐなかつたが、有志者は七月三十日の夜郷里を發足、三十一日に定光寺驛で落合ふことにしたので、遂に第七回目でこのあたりへ出かけることになつたのである。旅行記は主として去年の時のをかき、都合により所所へ以前のを入れることにした。

*　*　*　*　*　*

定光寺は昭和三年九月十五日に初めて行つたが、此時は未だ修理以前で、上層には假屋根が架けてあつた。其後修理ができ、上層も推定復原ができた事は承知してはゐるが、見る折がなかつたので、先方に希望者あるのを幸、七月三十一日の朝京都驛から汽車へのつた。同行は例の園造子と他に名前からだと日本人らしくないが、純然たる内地人の塵伊賓。名古屋で乘換定光寺驛で下車したら、既に驛待合室に老いたりと雖矍鑠壯者を凌ぐ副團長T老と團員五六氏、他に豫て打合はしておいた攝津國は伊丹の住人H氏が私の到着を待つて居られた。

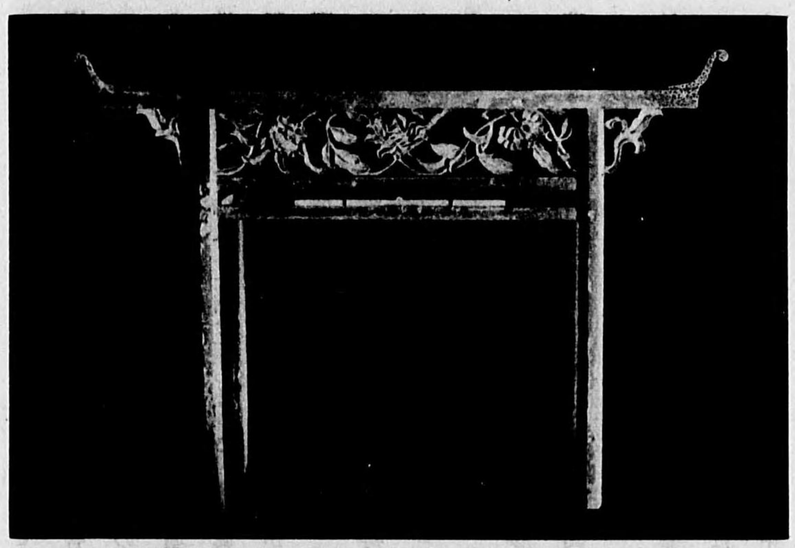
寺は驛を下りて十町位もあらうか、乘物はなくて歩くより仕方がない。住職は大に歡迎してくだされ、心よく一同の要求を容れ、他ならぬ研究團の事だから、佛さまに失禮に當る樣な行動以外は、何をしても少しも差支はないとの事に、副團長以下充分滿足する迄細部の摺本を作つたりした。寺の近くに德川家康の第九子義直の廟墓がある。私は一度も行つた事がなかつたが、今回は勇猛團の二三氏とH氏と塵伊賓と私と、住持の案内を受けてお參りをした。そこの建築なる祭文殿其他は、先年國寶に指定されたので、旁見學を思ひたつたからであつた。祭文殿正面の扉は棧唐戸で、上の方の大きな間の綿板に大きな龍の彫刻が入れてあるのが大に目立つた。義直の墓標は正面の高所に、向つて右方に殉死者寺尾土佐守直政以下五人、其後方即ち最右端に陪臣殉死者四名の墓があつた。

定光寺本堂は唐樣建築で、上層は切妻の假屋根で覆ふてあつたが(一〇五)、修理をして完全になつた(一一五)。此種の建築は我國に類例が多いから、推定復原をするにしても割合に容易な筈である。總評としては申分のない出來榮であるといへる。

須彌壇へのつて細部の寫眞をとると都合がいいので、住持の承認を得るべく庫裏へ行つたら、上り段に一個の卓がおいてあつた。實に立派なもので、幸なことには少しも壞れて居ず、さうして稀にみる古代のもの、大凡室町時代位ではないかと推定をした。爰に挿入した圖は即ち此卓で、脚は眞直で大面取、細い貫が吹寄せに二本あり、其上の方の貫と甲板と柱とで限られてゐる長方形の部分には、牡丹唐草の透彫が入れてある。この牡丹唐草たるや、左右の若葉からできた持送りと共に、實によく時代を現はしてゐる。

此卓は牡丹の透彫と筆返しとがなく、柱左右の持送りが、ある種の繰形からできてゐるとすれば、法隆寺にある鎌倉時代と認められる卓の木割を少しきやしやにした樣である。そこへ時代が下がつてゐるから、この樣な美しい透彫が入つたのであらう。

正方形でも長方形でも、或は蟇股の樣な特殊な形のものでも、凡そある面積内に牡丹唐草を入れる時は、大概は中央に開花したものを、左右には蕾又は半開の花をおき、其間隙を骨線と葉とで埋める樣である。蕾は時に四隅、其間隙を骨線と葉とで埋める樣であるが、必ずしもさうと限らない。京都太秦廣隆寺桂宮院本尊の聖德太子の曲彔の凭の上の方にほつてある牡丹の透彫は花が中央になく、鎌倉時代の除外例であるが、此系統の蟇股の脚内彫刻をもつてゐるものに室町と江戸のもの一例づつを知つてゐる。先づこんな風だから、數は少ないが探せばもつと出て來るかも知れない。蕾は上の隅とばかり限らず、四隅にある時もあるが、そんな場合は骨線が中央滿開の花から對角線に出されてゐる(一例は日光東照宮の棧唐戸綿板)。今此卓の場合、



上，定光寺藏卓正面．　下，同細部詳細

（上圖物差は曲尺の約一尺（一呎）・兩圖共昭和十六年七月三十一日）

牡丹唐草が平面的で，中心飾の左右が相稱に近き唐草より成れることと，

筆返しの形とに注意せよ．

牡丹唐草が横に長い長方形の内に入ってゐるが、若しこの通りのものが蟇股の兩脚内に入ったらば、どの様な形になるであらうかといふに、骨線は確かに鎌倉系統の形をとり、中心飾が牡丹の花に進化したことが一見明らかであらう。さうしてこれが平面的できゃしゃなところ、洵に精巧なできといへる。この唐様がこれ程繊細でないと、同じ室町時代の須彌壇なる佛通寺地藏堂（廣島縣豐田郡高阪村許山）の羽目板の彫刻と全く同じくなるし、尚又同時代の東禪寺藥師堂（今治市）の夫とも差がない位である。其他類例を擧ぐればいくらもあらう。つまりいつどこにあっても、唐草の性質は同一の時代にあっては變化なく、一見大差がある如くに見えてゐても、ゆっくり氣を落つけて觀れば容易に差のない事が了解できるものである。さうして此牡丹唐草は鎌倉でもなければ桃山へももって行けない性質のものである。さうして其上に筆返しの形が非常によろしい。私は此を見る迄は桃山時代のが最古最優のものだと思ってゐたが、どうもこれには及ばない。甲板は黑漆塗本堅地、筆返は朱漆塗。

此は殊のほか優秀品で非常に珍らしいから、充分時代の標本となすに足る典型的の卓故、どうか大事にして、むやみにそこいらへ出しておかない様、取扱に御注意なすって牡丹の唐草を壞さぬ様、特に御配慮を願ひます、といふ様な事を住持に進言し、見學につき便宜を與へられた點は副團長から禮を述べ、元來た道を定光寺驛へ向った。此夜は虎溪山永保寺へ一泊するやうに準備が勇猛團の手で出來てゐたからである。

以前には汽車に連絡して、あちこちへ行くバスがいくつもあり、その中の一つは目的地へ行く途で、永保寺のある山の下を通るから、夫にのれば容易に且つ安價で目的を達し得る。又タキシを雇へばもう一層便利で、寺の後ろの小高い所迄樂に行けたが、今回はそんな贅澤なものは一切ない。折柄驛へ客を送ってきた人力車を雇ふべく交渉したが、先約があるとか何とかいって、とにかく目的は達し得なかった。そこで私は歩くときめたが、實は小鞄二個のうち、一個は廉伊賓が持つとし

て、もう一個を如何にすべきやといふ問題があるので、もっと早く決心ができなかった。併し殘りの一個は勇猛團員が交代で持って行く事にきめてくださったから、私は幸に晴雨兩用の蝙蝠傘一本を杖の代りについて歩けばいいことになった。

寺へ着いたのは、もう日が暮れかけてゐた時分であった。三十一日の夜はゆっくり寺へ一泊した。翌八月一日早朝、信州から後發隊が「最重最輕最大」なるY團長を先頭として到着したので、一行十三名が揃った。揃ったのはいいが此日は大曇で、雨の降らないのが不思議な位、どうやら天氣は絶望に近いので、朝からこれでは困ったといって、園造子は妙な表情をしてにが笑をしてゐた。同君は寫眞を撮りたい許りに出て來たのだから、氣の毒でならなかった。

此寺はつい先頃迄は、廣い境内に觀音堂と開山堂とが建ってゐただけで、殆んど他に建物はなく、庫裏もずっと奥の方に、左程大きくないのがあり、あたりは閑寂そのもので禪寺としては申分のない環境であった。然るに寺に何か考へがあったと見え、庫裏を擴張する目的で、適當と思はれる大工の棟梁にでも命じたものか、設計圖ができたらしかった。そこへ私が行き合はしたらしく、丁度いいから一つ相談をしてみようといふ樣なことからであつたらうか、夜になってから青寫眞に燒いた圖をだしてきて、擴張の部分は大體この樣にしようと思ふが、腹藏のない意見をいってくれとの事に、ともかくも一見をした。昭和三年九月の時であったと記憶するが、或はもっと後であったかも知れない。

遠慮なくいへば、其圖は實は大して香ばしいものではなかった。だから私は其間に對し、折角新築するなら、開山堂や觀音堂と調和のとれた、識者の笑を招かぬ樣なものとせねばなるまいから、夫には現場には經驗に富める技手をつけ、又隨時必要に應じて斯道の專門家にみて戴く必要があらう。就いては幸ひ名古屋高工にはT教授やK助教授の樣な方方が居られるから、先方は御多忙ではあらうが、そこは一つ寺から無理にでも顧問といふ樣な事にお願ひをして、時時來て戴いたり、又は圖を持參して檢閲を願ひ、拙ければ筆を入れて戴き、できるだけ立派なものにする樣にしてはどうですか、さうでないと到底滿足する樣なものはできますまい。どうか篤と御考慮を願ひます。と申しておいた。

然るに增築のできた後行ってみたら、不幸にして私の忠告は全然先方にはいれられなかったらしく、恐らく自己推薦の古建築に通ぜぬ人の手に成ったものと見え、先づ車寄せからして洵に遺憾なものができてゐた。折角金をかけてあの有樣では、寺としてもつまらなからうが、そんな事は素人には判らないから、あれでもよくできたと思ってゐるのだらう。知らぬがほとけ、といふ諺はこんな所へも間に合ふかも知れない。お寺だからほとけさんもあるし、丁度よからう。

世間一般の人達は、圖が大事なので、圖さへあればあとは大工に任しておいても、何でもなしにできるから、監督者とか現場の技手とか、そんなものはいらない。監督や技術員をおけば月給をやらなければならない。それが實際にむだな事だ。設計をさせるためには成程技師も必要であらう。圖さへ彼等に作らせれば、あとは何にも監督なんか不用なのに、是非おけといふのは圖が不完全なのだらう。といふ風に固く信じてゐるらしい。

成程これは一應は尤も千萬らしく聞こえる。併しよく考へてみると根本的の謬見で、認識不足の結果である。$\frac{1}{100}$とか$\frac{1}{50}$とかの計畫圖は勿論、例ひ原寸圖を引いたところで、大工に任しておいて、夫で出來るものではない。といふのは曲線の性質が判ってゐないからである。虎を描いて猫に類する程度なら、同じく猫科の動物だから我慢もできようが、鰐を描いて守宮か蜥蜴に類するものになると、同じ爬蟲類ではあるが、鰐魚目のものが蜥蜴目又は有尾目のものに似るのだから、これでは甚だ不都合である。畫家に虎を註文して夫が猫としか見えなかったり、鰐がやもり又はゐもりの樣であっても、註文者は夫で滿足するだらうか。恐らくだまってはゐまい。それは註文者に判るからである。

然るに大金をかけてろくでもない中途半端の建築を造り、夫でだまってゐるのは註文者に判斷力が全然缺乏してゐることを天下公衆に示してゐる樣なものである。見る方も同樣のあきめくらだから、結構な御普請ができましたな等と世辭を言ふ。言はれた方はにやりとする。大工はそれで安全に生存を續けて行くといった有樣で、洵に天下泰平で、めでたいには違ひないが、これではこまる。やもり乃至ゐもりの繪なら、卷いてしまっておけば見えないが、拙い車寄せ等は鼻の先に突きだしてゐるので何とも始末によくない。

相當な建築家でも、新築なら申分はないが、古典趣味を取り入れたものになると大分にむづかしい。東京市所在のある有名な公共建築が、日本式の正面をもってゐるので好評嘖嘖だが、其正面出入口の枓栱は、全部江戸時代の好ましからざる形式のものが用ひてある。折角やるなら、平安時代とか奈良時代とかの型式をとったら、もっと遙に觀者に快感を與へたらうに、この一例をみても充分研究してからでないと、簡單にはできない。殊に古建築の細部を應用しようといふ場合には、此頃そこいらにざらにある圖版と首っぴきでは駄目である。所詮つけ燒刄ではものにならない。充分研究して頭の中にとけ込んでゐて、ステインレスになってゐなければ、容易に手をだせるものではない。

八月一日の朝の大曇は不幸にして一日中續いた。此日は朝食後觀音堂から開山堂を一巡し、あとは皆さんにお任せしておいた。寺でも私共に對し特別に開放してくだされたので、一同感謝しながら研究をした。だから十二分の滿足をして夕刻庫裡へ引あげ、夕食後天氣稍や見込がありさうになったので、境内を散歩をしたりしたが、遂に一日の夜中から雨になり、二日の朝は相當に降ってゐた。勇猛團の面面にそんな弱蟲はゐないし、最年長者の副團長T老等、甲斐がひしい身なりで歩く用意をして居られたが、私は前回の例にならひ、歩かない方が樂だから車を呼ぶつもりで交渉を寺へ頼んだところ、其返事に運轉手は八時頃でないと出勤しないから、こんなに早く（といった所で當時は朝の六・二五多治見驛發名古屋行の汽車にのる爲であった）車は廻はせない、とあったので、やはり世の中は大分變ったと思はされた。そこで素足に例の愛用してゐた白ゴム製の朝鮮靴をはいて歩きだした。此白靴はもう買ってから十年位はたってゐるから、ゴムも大分かたくなり少し危險狀態にあるが、もう賣ってはゐないし、昭和十年から十一年にかけて、私と行を共にして隨所で愛用したところの、何物にもかへ難い貴重品である。其貴重品をはいて歩いたら、寺から驛迄の間に兩足の外踝の下方の表皮が靴のへりと摩擦してすりむけてしまった。

名古屋へ着いた時は、大體雨はあがってゐた。名古屋驛が改築されてから、八月二日に初めて下車したのであるが、餘り大きいので少なからずあきれた。同じく建築を專門にしてゐても、私の樣に古寺や古宮の半分壞れかかったものばかり相手にしてゐる時代後れの一布衣徒を驚倒せしむるには充分であった。汽車から下りて人の行く方へ歩いて階段を下り、これで椽の下へ入ったのだから、もう一度階段を上らなければ、外へ出られないと思ってゐたのに、さうではなくて外へ出られた。實際西洋だか日本だか、わけの判らない樣な停車場を外へ出た時はヤレヤレと思った。西洋人の設計した新橋のステンショの正面の出入口の前で、陸蒸汽の出る前に驛夫が鈴を振り、愈よでる時に兩開の引戸を閉めて人を入れなかった時代を、子供ながらによく知ってゐるものには、洵に頗返しのつきかねる大規模な停車場であった。其停車場を出てつい近くの初めにSの字がつく宿屋へ行った。

此S字館は全く田舍者相手の道者宿であった。着いた時には取敢へず大きな何十人も入れる樣な大廣間に投げ込まれた。ところが其天井が實に珍無類で、如何に大工任せと雖これはひど過ると思ったが、やがて私獨り別室へといふ事で、特待で案内された室は全然氣に入らず、再び元の大廣間に戻り、一休して直に見學に出かけた。雨はあがりかけてゐたけれども、

念のため蝙蝠傘を持ち、寫眞機はおいて行ったが、これは正に大失敗であった事は、神ならぬ身の此時は知る由もなかった。

最初に七つ寺へ行った。本堂見學のためである。すんだ頃に薄日が出だした。伊丹市のH氏は今日中に歸らないといけないとの事で寺の門前で分れ、さて私共は近くの高性院の表門をみるべく行かうとしたところ、つい一月ばかり前に遠方へ移轉したと聞き、夫が同じ市内であるにしても、乘物は市電しかないのだから、一同相談して割愛する事にし、直に熱田神宮に向った。

熱田神宮では鎭皇門から海上門をみた。ところが幸なことに、今回初めて土用殿をみることができた。一度でいいから土用殿をみたいものだと、隨分前から念願してゐたが、遂に機會が到來したのであった。方一間の板倉で、懸魚等に隨分古い形が殘ってゐる樣に思はれた。勇猛團員で寫眞機持參の面面は、我後れじと寫してゐたが、何にしろ朝が雨であったし、最早とるものもさうないと思って宿へおいてきたのは大失敗。園造子にとって貰はうと思ったが、鎭皇門で暫くの間に見失ひ、どこへ行ったか不明で、第一土用殿のたってゐる境内へは入って來なかったし、從て遂にあきらめてしまった。天氣はすっかり晴れて了ひ、どんな駈出しが寫しても、必ず寫る樣な好機を逸したのは、何といっても殘念至極であった。

土用殿をすましてから本社へ參拜し、直に本遠寺へ行かうとしたが、園君の消息は杳として不明であった。團長は團長で思ふ方面へ探しに行かれたし、私は私で多少責任があるから心當りを尋ねたが、全然行衞不明であった。萬一土用殿の建ってゐる柵内へ捕虜になってゐるかと思って氣をつけたが、影も形もなかった。どうも困った事になったが、苟も園君である以上、どこかに居るに違ひないから、警察へ搜索願を出す事は暫く控へ、とにかく本遠寺へ行かうといふ事に相談一決をした。そこで團長だけ惣代として神宮の係員へ挨拶に行き、一同は其歸りを待って本遠寺へ向った。

寺は神宮から程近い所にある。正面の楼門を入ったら、夏でも暮近くなったせゐで溫度も幾分下がったためか、園君は涼しい顏をして門の寫眞をとってゐた。もう皆こちらかと思って來てみたが、誰もゐないので寫眞を始めたといった。さんざん探したので來るのが一層おそくなったのだと誰かにきかされ、アーさうでしたかすみませんは、少しばかりのんびりしすぎてゐる樣である。

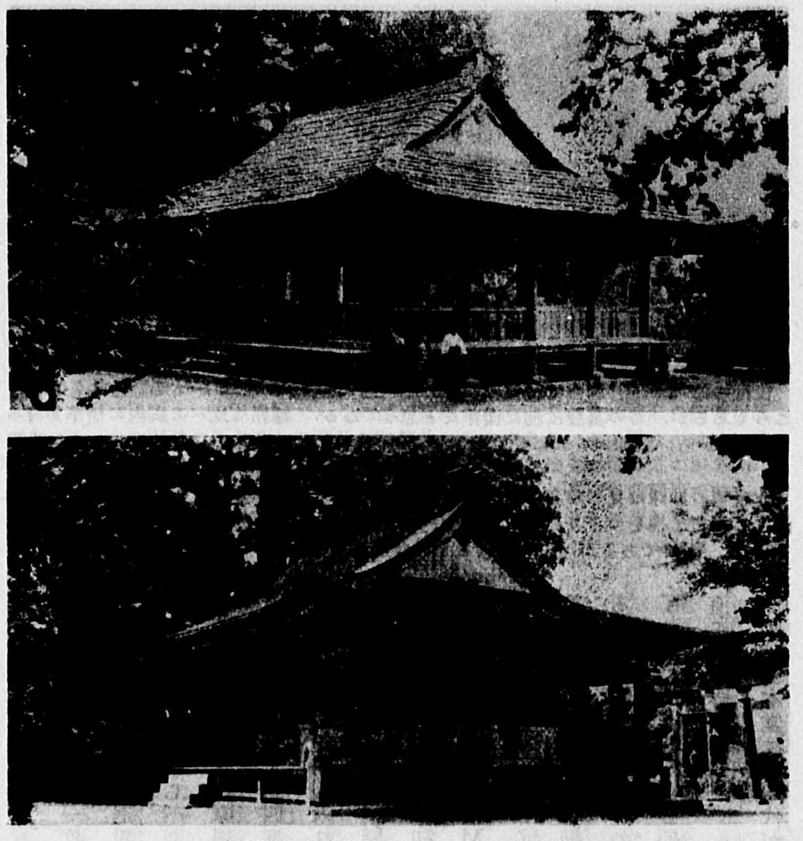
後に詳述するが、實は此門の墓股の一つを豫てから私が問題にしてゐるので、夫を皆さんにみて頂き、脚内の彫刻が何だか決定したかったのであった。幸にこれは其面にかけてあった金網をとりはづす事ができたので直に解決をした（一八八五・一八八六）。尙ほ此時初めて驛迦堂の内部をみる事ができた。大して愉快でない向拜が前方に突き出してゐたり、外側は後補の部が多いので、内部もどうせ大した事はあるまいと思ってゐたのは大間違。虹梁に古いのがあったり、圓枓附の大瓶束が立ってゐたり、ざっと京都の東福寺三門上層を素木で小規模に簡單化したやうで、室町時代ではあるまいかといふ見當をつけてみた。

日が暮れやうが腹が空にならうが、左樣な事には無關心で摺物をつくる團長副團長其他一騎當千の勇士の面面とのお附合は、我我風情には到底できないので、お先へ失禮することにした。神宮前で電車を待ったが、來るのも來るのも皆滿員で見込はなかったので、汽車で名古屋驛へ引返すべく方針をかへ、熱田驛迄徒歩で行ったら、僅か一分かそこいらの事で汽車は出てしまった。次のを待つと大變に時間が無駄になるので、再び逆戻りをして、どうかしたらのれる樣な電車も來るかも知れないと思って大通り迄出たら、客待をしてゐたクキシがあり、夫で漸く明るいうちにS字館迄歸れた。私がお先へ失禮しますといって園君と廬伊賓と共に本遠寺を出た時、一緒に來てくだされた團員が總て世話をしてくだされたから少し早く歸ることができたので、私が獨力でしたのではない。

歸宿してみたら、私だけ別室がとってあったが、夫は朝見た室よりは大分よかった。やがて女中はお膳と小さいおはちとを私の前へもって來て、お食事で御座いますといってさっさと引揚げてしまった。暫く日本旅館へ泊らなかったうちに、世間は大分に變ったと此時も思はされた。宿屋はいくら斷っても必ず女中がお給仕をするものと、其瞬間迄思ひ込んでゐたのに、夫だのに膳をつきつけて引揚げたのだから、あとは正に大風一過といった有様で、出て行ったあとと膳と見比べて暫時感心した後、おはちの蓋をとって見た。其内容は汽車の和食堂車のより尙ほ少量な麥飯であった。いくら何ぼ何でもこれでは腹がもたない。晝食は汽車の辨當ですましておいたので、夕食に多大の期待をもってゐたのに、其希望は根柢から覆へされて了った。まさか饂飩屋へ出かけることもできず、隨分に弱ったが、遂にがまんをして了った。後にきいたのでは、一行は他の廣間に移り、めしは充分にあって滿腹できたさうだ。

私の室の斜下は廊下が少し廣くなってゐて、そこに長椅子があり、手のすいた女中の休憩所になってゐた。だから女中はそこに集り大きな聲で話をする。それが實にうるさいので、辛抱ができず、帳場へ抗議を申込み、漸く少し靜かになった。S宇館は一度でこりごりした。

其翌日卽ち八月三日は寶飯郡八幡町の八幡宮と額田郡福岡町の八幡宮(土呂八幡宮)へ參拜し、夕刻またS宇館へ歸って宿泊。翌四日は早朝名古屋驛より乘車岐阜に出で、高山線にのりかへ萩原驛下車、徒歩で久津八幡神社へ行った。去る昭和五年夏、東京目白のS高女校長のO先生と燒石驛から自動車で高山へ初めて行った時、途中でよって拜殿を見たが、其時このかた十年餘り再度參拜の折がなかった。當時は修理前で屋根等は杉皮をあてがひ、雨洩を防いでゐた有様であったが、その後立派に修理ができ、きちんとしてゐた。昭和五年八月十日の寫眞と、其時から滿十年と三五九日目の寫眞と、比較に便なる樣挿

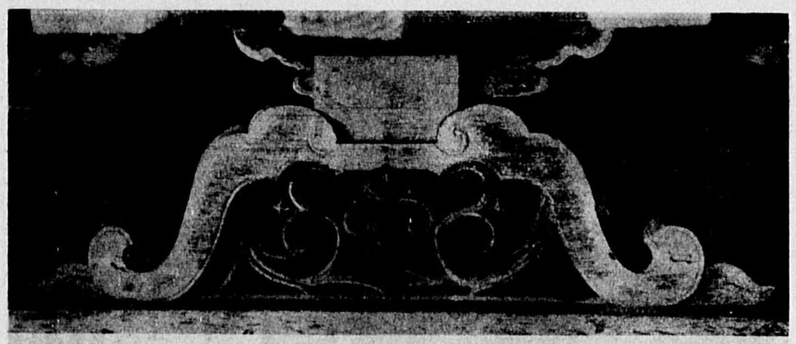


岐阜縣益田郡萩原町，久津八幡神社拜殿

上，修理前(昭和五年八月十日)．下，修理後(昭和十六年八月四日)

圖として入れておいた。萩原驛を下りて眞直に一町許り、突き當って右に曲り、十二三町もあったらうか、お宮さんは極めては判り易く、樂に參拜ができた。

前回は本殿の側面を瞥見した位で辭去したので、室町位であったといふ樣な薄い記憶があるだけだったが、今回はゆっくり見學のつもりで、社司に導かれて先づ參拜し、向拜を見て先づこの墓股に感心をした。拜殿の修理後の狀況をとるため、フヰルムが四枚殘ってゐるから充分だと思ひ、鞄は驛へ一時預けとして出かけ、四枚使用した後に此を見つけた。伊賀は自轉車を借りて驛迄行って鞄



久津八幡神社本殿向拜蟇股（昭和十六年八月四日・近藤氏）

後世の修補が――例へば蟇股上の實肘木の襟に――入ってゐるので，面白くないところもあるが，この蟇股は洵に傑作だと思ってゐる．輪郭に比べて脚内の唐草がきゃしゃ過るから，調和がとれぬ點は確かにあるが，唐草の面白さ。そんなことは全然隠されて了ってゐる．

此唐草の妙味は見てゐれば自然に判る．書いてもうまく書けないが，とにかく中心飾として巧に桐をつくり，左右に一つ巴を反對向きにうまくこしらへてある．これは蝌蚪であるが，室町時代とすれば，この襟なのがあってもよろしい．

をとって來ようと申出たが、暑い時に氣のどくだからやめにし、近藤君のとった寫眞を一枚燒いて貰って製版し挿圖にしておく。丁度幣殿の屋根の上から理想的の寫眞がとれる樣にできてゐる。勇猛團は全員摺物をこしらへた樣であった。

午前は九・三五萩原驛に着いたのだが、午後は二・二三同驛發の汽車へのり、三・四四高山驛へ着いた。久津八幡では五時間足らずの間に往復の時間も入れて充分仕事ができたのである。高山驛の改札口を出ると、豫て宿屋の周旋を御依頼しておいたOさんが出迎へてくだされたし、先年初めて私が行った時お近附になった當時の高女校長、今の高山市長M氏も來てゐてくだされたので、大分に恐縮をした。一度宿へ落つくと出るのが億劫になるし、又勇猛團は名詮自稱明日は大に其勇猛振を發揮して、大活動後夕刻解散直に歸國するとの御託宣があったので、とにかく國分寺だけは此日のうちに終了せしめねばならぬ必要に逼られたから、この二つの原因で驛から直に國分寺へ向った。

國分寺本堂は、時代が左程古くはないが、向拜の木鼻と内部虹梁

飛驒國分寺本堂大虹梁上板蟇股（昭和十六年八月四日）

國分寺本堂は天正十六年の再建ならんといふ．又ある書物には桃山時代の建築と認められるとある．私は以前から桃山に下げたくなく，室町末にしておき度く思ってゐたのであるが，證據があれば止むを得ないけれども，若しさうでもなくば，やはりもっと古く考へてゐるので，どうしてもこの蟇股は兩肩に附いてゐる螺旋形の飾りが頗る面白い．つまり兩肩の卷き込みの部分を裝飾化したのである．この襟なのはつい他に見たことはないが，これと類似なのは室町のものとしては法界寺藥師堂のがあり，又鎌倉末のものとしては，奈良生駒の添御縣坐神社のくりぬき蟇股が此種類である．だからかかる傾向は鎌倉末位から萠し，江戸時代に至るまで續いたのである．此板蟇股は全く獨創的のものといへる．

上の蟇股とが珍らしく、又妻飾にも木鼻の變ったのが用ひてある。一同は主として虹梁上の板蟇股（挿圖參照）の摺本をつくり始めた。最重最輕最大最强にして同時に溫厚恭謙且つは臂力衆に勝れたるY團長は、大きな梯子をやすやすと妻の軒にかけ、銅板で平葺をした考へただけでも辷りさうな屋根へ登って行くこと、平地を歩行するが如く、忽ちにして妻懸魚後方の木鼻の摺本をつくって見せてくだされた。我我は申す迄もなく、團員一同はどうしてあんな輕業ができるのだらうと、今更の樣に感嘆したのであった。

既にして永い夏の日も漸く暮れやうとしたが、一同に退去の景色は少しも見えなかった。だから本遠寺の時と同一の手段を講じ、園君及び伊賓と共にお先へ失禮し、Oさんに案内して戴いて二の町のN旅館へ行った。M市長の御聲がかりで、最上の三室が一行三名のためにあてられてゐたので、大に納まる事ができた。勇猛團はあらゆる方面に勇猛で、旅宿の如きも團の方針を伺ひ、豫め其條件をみたす樣な家をOさんへお願ひをしておいたので、ここでは私の一行とは別の家であった。

翌五日は荒城神社と安國寺の見學で、めでたく大團圓となる豫定である。私はOさんに貸切自動車の談判をお願ひをしたところ、夜になって小型五人乘一臺ができた。貸切は高價だが、ある程度迄は思ふ樣になるから都合がよろしい。往路には古墳を見て荒城神社の鳥居のところ迄のりつけた。ところが團員全部既に到着してゐたので、一休の後直に本殿へ參拜、續いて見學を始めた。

荒城神社墓股（昭和十六年八月五日）

此が板墓股であったとすると，國分寺本堂大虹梁上のを簡略にするとこれになり，これを複雜にするとあれになる．兩肩の有樣を見れば頷かれるであらう．中心飾は一個の寶珠であるが，高野山の國寶建築のうち，不動堂後面墓股のところでのべた通り（六四），かかる中心飾を用ひたのは，鎌倉時代以降のことと思はれるのである．

荒城神社は岐阜縣吉城郡國府村宮地鎭座の鄕社である。三間社流造柿葺。元中七年の再建といふ。此建物も亦修理ができて美しくなってゐたが、正面向拜中央の刳拔墓股の中心飾に寶珠一個を用ひてある點に注意すべく、其輪郭の兩肩に簡單ながら飾がつけてあるのは、後世の例へば國分寺本堂大虹梁上に用ひてある板墓股兩肩の飾の原始的のものと解し得る等、いろいろ調べてみると、中中興味はつきない。只この墓股は脚の內輪に茨がないので、どうも締りがない樣に見え、いくらか物足りないが、これは反て獨創的の意匠が働いてゐると見るべく、物足りなく思ふのは見つけないからであらう。

其向拜の兩方には木鼻や肘木をだしてあるが、ここがまた面白いものの一である。本殿は舟肘木であるのに、向拜は方柱面取に三枓で、木鼻は天竺樣唐樣との混淆樣形をもち、其上の枓は枓尻に樣形があるから、明らかに天竺樣系統であり、さうして肘木は唐樣だから、實にどうもいろいろ交ってゐる。よくもこの樣に各樣式の細部をうまく取入れたものだと思ふのである。夫から向拜柱の面であるが、柱一邊六寸四分乃至五分、面見付約七分、故に其比約1/9。此比例からだと共に室町時代の建築たる京都醍醐寺清瀧堂拜殿及び奈良縣南葛城郡の高鴨神社本殿の柱の割合と同一である。だから室町の柱といふことができさうである。

前回見學の際は本殿の柱や舟肘木は古いが、向拜――現在は向拜の樣に吹放になってはゐない――虹梁・豕扠首　向拜柱・枓栱・墓股等は後のものではないだらうかといふ結果になった。所が今度もやはりさういふ風に考へられたのである。今日ではどうか知らないが、以前は平安後期の建築かも知れなといふ說がなくもなかった樣にきいたが、向拜のあたり等は到底そんな所へはもって行けない。總體素木造。

本殿の內には、今は既にお祀をしてゐない神像數躰がある。大きいのも小さいのもあり、何れも平安初期の樣に思はれた。私はすっかり忘れてゐたが、前回はM市長が高女校長の時代で、私と此神社へ同行され、これ等の舊神像を一緖に見たといって居られた。だから私としては二回目であったらうが、初めての樣な氣がした。夫から寶藏でいろいろの寶物を見せて戴き、約半里を引返して同村大字西門前の安國寺へ行った。國寶建築たる經藏を拜觀するためである。

經藏は庫裏に向って左手の高地に建ち、石段數十級を昇ると其正面にでる。方三間入母屋造柿葺。經藏は天井裏に「應永十五年六月十八日超一敬建」といふ墨書があるさうだし、樣式手法は室町だと思ふので、これを應永の建築とみて少しも差支はないのみならず、さう見るのが至當であらう。ところが【飛州志】に「一切經藏上龕之文」といふものを載せて居り、その中に「時明德元年庚午夏六月初一日沙門木瑞謹立」とあり、又【斐太後風土記】にも「經藏凡四間四面、其中央に輪藏あり、明德元年建之、一切經を藏、……」とある。文部省で國寶に指定した時の調書にも「明德元年六月本尊佛龕成る」とあるか

ら、此等を綜合すると、輪藏は明德元年にでき、周りの建物は夫より後れること十九年の應永十五年にできたといふ事になる。輪藏ができた後相當の期間は、どういふ狀態におかれたか、さうして夫が明德元年にできた時に、どこからどこ迄全部でき上ったか、欄間の精巧なる透彫も同時か、或は又少し後れるか、その邊もはっきり判らないと思ふ。私は夫等の透彫は樣式上からみて、寧ろ少しあとからできたとした方が穩當ではあるまいかと考へてゐる。そこで「今日遺存せる我國最古の輪藏」といふのに異議はないが、彫刻・裝飾皆吉野時代の優秀な標本だといふのは、もう少し考へて見度いのである。率直に言へば應永頃迄下げ度いのである。この輪藏欄間の彫刻のうち「牡丹に猫」が後に引合にでてくるので、此際少し長いが愚見を書いておいたのである。

前回にもこの輪藏欄間の透彫に就いては非常に興味をもったので、下からではあったが隨分よく見たつもりであったが、見落したと見えて氣がつかなかった。今回は大小二本の梯子をかつぎあげ、其一本を柱にかけて、割合に近いところでよく見たところ、どうせ原始的平面的であるのは當然だが、牡丹の透彫の一端に、猫がゐたのは思はぬもうけものであった。これが桃山になると時に鳳蝶が添へられて、手狹とか墓股とかの中に納るのである(一九四一)。

* * * * * * *

最後の日の最後の見學は、斯くしてゆっくりと十二分の收穫で有益に終了した。勇猛團は即時古鄕に引返されるさうで、最寄の飛驒國府驛に向ひ、昨日からいつも一緒にゐて世話をしてくださったOさんと共に、私は園君と伊賀とを連れ、迎にきた車で高山市へ引返す途中、同じく國府村上廣瀨鎭座の村社諏訪神社へよって、附近發掘の古瓦をみた。此も亦Oさんの斡旋で、朝から頼んでおいたので、いろいろの發掘品をこの村社の拜殿に陳列してあったから、僅かの時間で一通りみることができた。此機會に皆樣に御禮を申上げる。

夜は市長主催の宴に招待を受けたので、固辭したがつい御好意を受けることになった。翌六日朝高山驛發、岐阜經由で夕刻京都驛歸着、七日六泊の見學旅行は無事終了をした。

定光寺と永保寺（一五〇—一七二）

定光寺本堂（一五〇—一五五）

定光寺では注意すべき建築は本堂だけである。本堂の創立に關しては【定光寺本堂維持修理報告書】（昭和十五年六月）に曆應三年（興國元年）の創建とあるが、文部省の調書には建武三年の創立とある。僅か足かけ五年の差であるが、今の所私にはどちらが正しいか判斷する材料がない。鐵道省の案内記にも建武三年としてあるが、これは多分文部省の調査によったものと思はれる。かく其創建に少しの差があるが、其後の沿革は皆同じである。そのうち詳しいのを書いておくと、明應二年再建、永正七年地震のため破壞、天文三年二月十一日斧始、四月二日立柱式をしたといふ。他の書物には何れも單に天文三年修理再興といふ樣にかいてあるから、其修理がどの程度に行はれたものか、その邊が判然しないが、【修理報告書】によると、創建當初と認められる材料が上層頭貫や脇壇等に殘ってゐるさうだし、文明九年に寺は燒けたとあるが、當初の材料が殘ってゐる以上、本堂は全燒したとは思へない。下層頭貫臺輪等に室町中期と認められる材料があるので、文明火災後の修理にあたるものと思はれる。永正震災に關しては、內陣の大虹梁や須彌壇上の廚子等に、天文頃と認められる材料があるから、被害は相當なものであったらしく、再建に等しい修理をやるため、斧始や立柱式をやり、在來の材料をできるだけ再用したのであらう。

理由は當初のも其後と認められる材料も、殘ってゐたので明らかである。

以上が昭和十三四年大修理の際工事關係者の眼に映じた本堂の狀態である。私は修理の時も知らなかったし、從て解體した時材料を觀察する事ができなかったから、此に就て何等批判はできない。ただここに斯る有樣であったさうだといふ事を紹介したに止まるのである。ただ私の貧弱な經驗からいふと、材料を見ただけで夫れが曆應だか天文だか、文明だか明應だかそんな事が判るものかといふ風に讀者諸君は考へるかも知れないが、如何にも三年や五年や十年位の違はそれが數百年も經過した今日では、字が書いてでもなければ、とても判らないが、そこに相當年代の差がある以上、凡その見當はつくものである。そこが現場等を長くつとめあげた熟練なる技術員であれば、曆應と文明と天文とこれ位の見當は殆ど誤りなしに精確につくのが當然である。だから私は證人には立てないが、この記事はたしかであるとして、敬意を表する次第である。

* * * * * *

私が昭和三年九月十五日に初めて定光寺へ參詣した時は、須彌壇廻りの寫眞をとるのが主要なる目的であったので、當時——ばかりではなくその後十年間位——は上層が假屋根であり、どうも寫眞をとる氣になれなかったので、自分はもってゐないが、一五〇に中野藝術院撮影の正面寫眞をだしておく。どうもこれでは格好も整はず、室町時代の二重佛殿としての眞相を捕捉し得まいが、二度ととれない貴重寫眞である。この上層は一體どうしたのか、忍辱山圓成寺（にんにくせんえんじょうじ）樓門（ニンニクセ）の樣に初めからできずに、つまり未成品に假屋根をかけておいたのか、或は前にはあったのが何かの原因で假屋根になったのか、現在の樣に推定復原で上層がつくられて了った後は、共に當初の有樣は判らなくなる。併し定光寺の場合は、「後世上層の枓栱以上を撤却し假屋根を架」したと文部省の調書にあり、他の坊間に流布してゐる書物には、皆これによって

（奈良縣添上郡大柳生村大字忍辱山）

ゐる。ところが【修理報告】には種種調査の結果

……現在の建物は、室町中期再興の時、上層枓栱以上は計畫だけで造られたことがなく、後者の臺輪を設けた時は、全く上層設置の考へさへなかった事が明瞭である。然らば創建當時の本堂は如何であったか。

といふと、本堂には創建當時のものらしい完備した脇廚子があるが、こんなのがある以上、上層は無論完備したものであったらう。そこで

……上層を失ったのは、文明九年の火災の時以後と思はれるが、其正確な事情は明かにし得ない。

といふ一種の想像説が述べてある。

右のうち私も想像ではあるが、當初に完備した廚子があるのでみても、上層は多分あったらう、といふのは全くの推定で、夫は多分さうであったかも知れないが、さうでなかったかも知れない。廚子と上層の屋根とを結びつけるところに少しばかり無理があるのではあるまいか。併し再興の時は上層は出來ずにしまったのだらう、といふ説には贊成である。圓成寺樓門がさうであったのからみても、夫はさうであらうが、上層設置の考へさへなかった事が明瞭であるは、少し筆が走り過ぎてゐるらしい。いくら設置したくとも、金がなくては設置は不能である。上層に假屋根をかけ、どうも折角完成させようと思ったのに、資金が不足で出來ませんでした、と天下に公表し度くはなかったらう。「考へがなかった」といふのをさう解さないで、恐らく筆者は「設置したくもできないから、初めからなしでがまんしておくつもりであったらう」といふ意味で書いたのだとればいいが、この文句ではさうとばかり解せないから損である。江戸時代東大寺大佛殿の再建に當り、元通り正面十一間で計畫はしたが、出來ないので七間でがまんせざるを得なかったのと同じであらう。果してさうなら後世上層の枓栱以上を撤却しといふのが少し工合がよくない。「撤却」といふとあったものを取去った樣である。取去ったのではなくて、出來なかったのである。

然らば修理後の上層の屋根は何によったかといふと、報告書にもある通り、他の同一形式の建物から見て、宮殿の比に倣ひ、勾配及び破風をつくる場所等をきめて、入母屋にしたのださうな。既記の通り此種の佛殿は類例がいくらもあるから、割合に復原は容易な筈である。その方針の下にでき上った建築の側面は**一五一**の如くで、まるで見違へる程立派になったのである。

内部は普通の此種の佛殿に見る如くで、別に大して新機軸をだしてゐると思はれるところもなく、須彌壇も亦類例の多い型に嵌った唐樣であるが、勾欄が餘り類のない型式である。これも亦唐樣勾欄に過ぎないが、親柱に「胡麻殼決り*」がある事と、架木**及び平桁の先の取扱に注意すべきである(**一五二**・**一五三**)。

勾欄親柱に胡麻殼決りを施したのは鎌倉以前の和樣勾欄には實例がない。以後にもあるかないか知らない。どうも此種の裝飾は唐樣勾欄の親柱に始まったものの如くで、既に鎌倉時代から實例があるが、何も飾りのない圓壔形のものよりは遙に

* 胡麻殼決り(ゴマガラジャクリ)といふのは、其決りのついてゐるものの水平斷面が菊花文の樣になってゐるのをいふ。古典建築の柱の溝彫(Flutings)の反對。

** 勾欄は殆んど常に三本の水平材と、適當の間隔に挿入された束とより成る。最上部の水平材は圓形の斷面が普通であるが、これを架木(ホコギ)といひ、其次のを平桁(ヒラゲタ)、最下の最も厚く背の高いのを地覆(ヂフク)といふ。

少ない。和様勾欄の親柱にこの様な裝飾をつけて、上に謂はゆる擬寶珠をのせたのでは何となしに調和しないし且つ落着かないが、唐様の開花蓮を柱頭につける時は**一五三**にみる如く、少しも不自然に見えないから、こんな事を考へついたのであらう。

次に唐様勾欄は正面の中央の部分を必要なだけあけておく、即ち途中で切るのである。塔の須彌壇の様に四方正面の時は四方共切る。和様勾欄にも時たまかうしたのもあるが（醍醐寺金堂須彌壇勾欄）、多分これは唐様勾欄の影響であらう。須彌壇のでない和様勾欄で、やはり途中を切ったのが、よく層塔の各重につけたりしてあるが（例へば室生寺五重塔二重以上の如き）、その様なのに當初のもので殘ってゐるのはなく、大概は後補だから、初めからさうであったかどうか判らない。さうするとやはり鎌倉以後唐様勾欄の影響と見るのが當然らしくなる。そこで勾欄を途中で切るのは唐様式と考へてよささうである。

扨て其勾欄を切る場合、其切ったところを如何に取扱ふのが普通かといふに、架木の先を「蕨手（わらびて）」にするのであり（**一一二**・**一一五九**・**一一七九**）、そこへ親柱をたてたりするのは寧ろ稀なやり方である（**一一二**）。然るに此須彌壇上のは全然型破りで、平桁は反對に下を向いて蕨手をつくり、架木には洵に珍らしい事に鯱が刻んである。そばに立ててある曲尺一尺の物差と比べてみると判る様に、小さいものだが正に唯一の珍意匠の勾欄である。ただここで少し意に滿たないのは束で、唐様につきものの蓮葉束であるのはいいが、葉の内面が見えてゐるのが厚きに過ぎ、私はすきでない。其意匠の良否は第二の問題として、何といっても變ったものである。

先づ平桁の先であるが、平桁と地覆との間の部分は、別の木をこの様に削り、アリにして木口から挿込んだので、これは木を儉約する上に於いて元より當然のことだが、今この下の方にでてゐる部分と同じ形のものを反對に上につけ、平桁の上端を中心とし、上下同じ形にしておいて、右を下にする様に垂直に立てるときは、丁度懸魚の様なものになる。これは又同時に和様建築の出入口幣軸（へいぢく）*に打つけてある裝飾兼用の金屬製蕨座**にも似てゐるのである。つまりある一時代に於いては、懸魚でも蕨座でも曲線の性質は皆きまってゐるから、一つが充分呑込めれば、直に應用ができるといふ事を、讀者諸君によく知っておいて貰ひ度いために、長たらしく餘計なことを書いたのである。

架木の先は蕨手にしないで、同じ様に卷き上ってはゐるが、鯱にしたのはどういふつもりであらうか、大體鯱といふものは、いつ頃から用ひだしたかといふに、はっきり判らないが室町頃ではあるまいかと思ふ。いふ迄もなく往昔は鴟尾即ち沓形であった。平安時代迄は大棟の兩端は鴟尾（玉蟲廚子・唐招提寺金堂・東大寺大佛殿）が獸面瓦（鬼瓦）（新藥師寺本堂東大寺轉害門）であった。鎌倉時代に鴟尾があったか又は鯱か乃至雙方共あったか、實例をあげる事が今の私にできないのは洵に遺憾千萬である。そこで室町になると鴟尾は知らないが鯱はでてくる（長野縣小縣郡浦里村當郷大法寺觀音堂廚子大棟）。其後は桃山・江戸と續いて鯱が全盛を極め、鴟尾は跡を斷った様である。其跡を斷ったと思はれる鴟尾が、寶形造の隅降棟と稚子棟の末端に突然出現する様な番狂はせがあり、從て一の鴟尾・二の鴟尾とか、一の沓形・二の沓形とでもいふ新しい名でもつけなければ始末にわるい場合も稀にでてきてゐるが（**八一七・一八八**）、物には總て除外例といふのがあり、議論してゐて困ってくると、このうちに入れて巧に逃げて了ふ常用手段を私も拜借して、除外例はあるが一般には室町以降は鴟尾に代ふるに鯱を以てする様になったとしておいて差支はない。

* 幣軸とは和様建築の場合、唐戸（普通板唐戸なるも後世は桟唐戸の時もあり）の兩方又は左右上の三方にある繰形付の材。

** 蕨座とは扉の回轉軸を承けしむるための金具の周圍に、裝飾として取つけある金具。上は幣軸に、下は長押上端に取つけてある。唐様・天竺様に於いては、特殊の繰形の木片を貫又は地覆等にとりつけ、其木片に更に金物をとりつけてある。

此様なところへ鯱をつけたのも、つまり時代が室町位になって來たからと考へられる。さうして水に緣のあるものだから、或は火伏せといふ様なことも考へに入れてつくったのかも知れない。さんざん議論はしたが、或はこれは鯱ではなくて摩竭*魚かも知れない。宇治の黃檗山萬福寺の門には、大棟の兩端に前肢を有し、尾は蝸牛殼式のと魚尾式のと二種の摩伽羅が乘ってゐる實例があるから。併し何れにしても鴟尾でないことだけは確かといへるであらう。

先づこれは假に鯱としておいて、見える方は鱗迄一つ一つ彫刻してあるが、裏の方は口のあたりを示すためか僅に線を二本入れた位のことで、著しく略してある。平桁の先も蓮葉束の上部も、何れも見え隱れは大に省略してあるのは當然といへよう。

一五四は脇壇の上部である。創立當時の材料が殘ってゐるといふのは、報告書を讀んで初めて知ったのであるが、この壇の細部卽ち同圖に於いて虹梁・大瓶束・科栱・木鼻・如意頭文等、あらゆる細部が鎌倉から室町へかけての典型的唐樣細部だといふことは、少しくこの方面に關心をもつものに取りては、この小さい寫眞からでも異議なく承認ができる筈である。少し小さくては無理ではあるが、**一七二**及び第一五九頁の挿圖と比較すれば、ある程度迄は首肯し得る筈である。

最後に中央の須彌壇上の廚子を考察してみる。廚子の內には本尊が安置してあり、從ていろいろの飾りつけがあって、まともから寫眞をとったのではものにならないから、柱上の科栱と木鼻との關係を、前圖よりもいくらかはっきり見せる爲、其部分だけを擴大してとった寫眞を**一五五**に揭げておいた。古い方のが小さいので、比較も困難であらうが、この二つを比べてみると、新古の差が實物では割合によく判る。第一如意頭文にしても、下向きの茨が二つで形がいいが、新しいのは圖にも少し見えてゐる通り、茨は一つだから物足りない。木鼻にしても出てゐる工合は同じだから、前述の目的には叶ってゐるが、實は其形となると、今度はこの方が茨が一つ多いし、全體の形も、どうも脇壇の程思はしくない。其他虹梁・大瓶束等皆然り。讀者諸君にして若し實地を見學する機會あらば、何卒兩者を比較されん事を希望する。比べてみれば直に相違點を捕へる事ができるので、圖では木鼻と如意頭文とが不滿足だといふ事位しか判らない。

* 摩竭魚、摩竭魚ともかく。摩伽羅・摩迦羅、Makara、鯨魚・巨鼈等と譯す。海中に住する巨大な魚ださうで、印度の佛塔玉垣圓文內の文樣に現はれてゐるものは前肢を有し、象化した樣なものもあるが、又繪には全く鰭ばかりで、魚と變りのない形をしたのもある。尾は螺旋形に蝸牛殼の如く卷いたのも、魚尾の樣なのもあり、一定してゐない。

永保寺（一五六—一七二）

定光寺驛の次が多治見驛で、永保寺へ行くのはここからである。虎溪山永保寺といふ。支那廬山の虎溪に似てゐるのでさういふのださうである。寺は長瀨賴氏の保護を受け、夢窓國師の法弟佛德禪師が開祖だといふ。靜かな景勝の地で、國寶建築が二棟ある。

其一。**觀音堂（一五六—一五九）**

永保寺の境內に大きな池があり、池には反り橋をかけ、橋の中央に方一間の小亭があり、風致が非常によろしい。其橋を渡ると前に少し平坦の地所があり、觀音堂が建ってゐる。入母屋造檜皮葺の二重佛殿で、正和三年の建築ださうだが、これが和唐折衷の洵に面白いものである（**一五六**）。どこがそんなに面白いか、以下書いてみる。

此建築は唐樣で通用してゐる樣である。私の手許にある三種の書物には、何れも鎌倉の圓覺寺舍利殿と比べ、唐樣建築の

創始的のものとか、鎌倉時代での禪宗建築の雙璧とか、唐様建築の二大標本とか、その様に記してある。併し唐様建築としては

一、礎盤（從て柱下部に粽）のない事

二、椽のある事、正面に廣椽、兩側面（及び後面一部）に椽

三、内部床拭板敷なる事

四、枓栱が詰組になつてゐない事

等が條件を充たしてゐないと思ふ。

礎盤のないのは建物に床があつたり椽があつたりするから、必要がないのでやめたのであらう。尤も後世になると礎盤だけあつて粽のない柱のたつてゐるのもあるが、夫は床のない建物のことである。觀音堂の場合は、木の床がはつてあるため、礎石は床下にあるから、礎盤は不用なわけである。

唐様建築は飛鳥・奈良建築の如く石壇上に建つてゐるのだから、床も石又は瓦敷で椽もない筈である。換言すれば石の椽に石（又は瓦）の床であるが、ここでは夫等が木（即ち板）でつくつてある。これは和様建築の特徴とみるべきである。天竺様でも淨土寺淨土堂や燒失した醍醐寺經藏等は床は拭板敷だから、或は木の床は和様とは限らないで、天竺様とも言へるであらうが、唐様でないことだけは確かである。

枓栱が詰組であること（例へば一〇四・一〇〇・一六七―一七〇）が又唐様の一特徴であるとすれば、此建築にありては枓栱は柱の上にあるだけで、柱間には何もない（七一五）。外部ばかりではなく、内部亦さうである。天竺様も詰組ではないが、あれは建築の性質上詰組にはできないが、和様はさうしようとすれば出來るがしない。だからこんなところに和様の考へが入つてゐると見られるその様なところから、唐様を主としてあるが、觀音堂であるため、特にかかる折衷式を採用して、新意匠をしたのではないかと思つてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊

方五間だが下層正面深さ一間を吹放しとし、方柱面取の椽束を用ひたる廣椽を設けたところ等は、我國に發達した住宅建築の要素を佛寺建築、而も當代支那より移入した新様式の建築に取入れたと見るべきで、我國の當時の建築家が外國建築の直寫に甘んぜず、我國の風俗習慣に適する様、床をはり坐式禮拜を可能ならしめ、同時に住宅的安易を得しめた點は、洵に敬服すべきである。

其他に面白いのは、柱間に花狹間（はなさま）入棧唐戸を吊込んでゐる事である。ただ惜しいことには全部材料が新しいから、修理の時に一枚もなかつたか、或は江戸位のつまらないのがつかつてあつたので、多分監督技師は開山堂の夫に倣ひ、推定復原をしたのだらうが、實は開山堂の扉のは勿論、窓の花狹間は全部新しく、祠堂正面の分は少しばかりあやしい（理由は後述する）から、餘りあてにならないが、開山堂修理の時、窓に少し古いのが殘つてゐたからだと、當時の現場主任技手であつたHさんの證言を尊重し、例ひ花狹間は新しくとも、充分信を措いてよろしいと思ふのである。夫からもう一つは、上下層共軒に化粧垂木が一本もない事（七一五）、ただ化粧隅木と茅負とが目立ち、あとは軒に裏板が見えてゐるだけである。これは開山堂祠堂下層軒も同様であるところをみると、此等建築の設計者が、ここにこの様な手法を試みたのであらう。この種のやり方は他にもう一つ、法隆寺塔頭、元の興善院、今の福園院境内に建つてゐる單層寶形造の小建築なる本堂（室町初頃か）に於いて見てゐる

だけで、つい他に例を知らない。

内部は簡單でよくできてゐて、中央後方來迎柱前に唐樣須彌壇があり、羽目板には牡丹唐草を入れ、又勾欄の平桁と地覆との間にも透彫唐草が入れてある。須彌壇其物も勿論唐樣の一代表作であるが、嵌込んである透彫の唐草は何れも壇其物に相應しい立派なものである。白綠で塗ってあり申分のない作とみてゐたので(**九一五**)、昭和十六年八月一日迄、正眞正味正和五年の品と心得てゐたが、夫が全部材料が新しいといふ事が、勇猛團の某某によりて發見されたのであった。さうするとこれは全部修理の時の補作であることになる。といったところで、古いのが殘ってゐたが、到底使用に耐へないので、夫により忠實に作りかへたのかも知れないが、私はさうは思はず、監督技師の非凡なる手腕により、この樣に美事に復原(但し推定)されたものであらう。夫にしても專門家でない勇猛團員が如何にして發見したかといふに、夫は記載の必要はない。とにかく材料が總て新しいといふ確證があがったから、私も今ではこれは推定復原だから、洵によくはできてゐるが、今迄無條件でよろしいと思ってゐたのは、確かに誤りであった事を告白する。

*　*　*　*　*

少なくとも昭和九年九月迄は左樣な事はなく、堂內は淸淨であり、須彌壇上の岩窟內に安置せられた觀世音菩薩の御像は慈眼衆生を視て居られ、參詣すれば自然に心から禮拜をしたが、昭和十六年八月の時は、洵に遺憾千萬な飾つけがしてあり、俗氣紛紛として洵に名狀すべからざるいやな感がした。今日ではどうなったか知らないが、あんなのは一日も早く撤去して、從來通りの神聖さに戻したいものである。

其二、開山堂(一六〇—一七二)

開山堂は祠堂と禮堂とから成り、「祠堂」は後方に「禮堂」は前方に位置し、「あひの間」で連絡をしてゐる(**一六〇—一六一**)。

禮堂。方三間であるが、柱間が三間なのは正側面だけで背面は兩側面後方の柱間に大虹梁を架し(**一六六**)、柱は一本もないから、つまり一間になってゐるのである(**一七**)。だから正確にいふと其平面は「正側面三間、背面のみ一間」としなければいけない。外觀總て唐樣建築の型の如くではあるが、少し變ってゐるところもあるので、それを記しておく。

正面三間共兩開棧唐戸、側面中の間同斷、背面は上は大虹梁が架けてあり、全體が「あひの間」へ其儘連なってゐる。礎盤あり粽付の柱や木鼻臺輪何れも例により例の如く、枓栱は三手先(**一六三**)扇樋といった調子だが、入母屋屋根(**一六〇—一六二**)の妻の懸魚が餘程珍品であることを見逃してはならない(**一六二**)。圖の都合で大きく見せる事ができないのは遺憾ではあるが、寫眞版が幸にも割合に詳明なので、大體の形を捕捉するのは可能であらう。併し何といっても小さいので、これでは何だか判るまいから、書いておくが、機會があったら實物見學を勸告する。

一六二に於いて、第一に懸魚の——何といふ名か知らないが——さがってゐる部分が三方に出てゐることである。普通は下にだけ垂れてゐるところが兩方にも分れてゐて、つまり三方に分れてゐるのを「三花懸魚」と呼んでゐるが、ここのが正にさうである。三花懸魚は室町時代になっては完好なものがあり(大和吉野・金峰山寺本堂內陣廚子妻)、桃山から江戸へかけては珍らしくない。京都市で實例をあぐるなら、二條城二の丸御殿の正面にある唐門の妻、及び其軒唐破風の兎毛通に好例を見る。だが併し鎌倉時代末のこの開山堂に、極めて原始的ではあるが其種の而も蕾懸魚(**一〇六**に於いて桃山時代の「三花蕾懸魚」、普通の「蕾懸魚」なら**一七四**・**一七五**等にはっきり寫ってゐる)があるのみならず、此時代に稀有な大きな「鰭」がつけてある。

今懸魚發達の順序を考へてみるのに、謂はゆる忍冬文から「猪目懸魚」に進轉し、奈良・平安を過ぎ、鎌倉も終に近付い

て初めて三花と鰭とが現はれたと見られるので、さうして其鰭なるものは、天竺樣系統の木鼻を其兩方へ試みにつけてみたのに原因すると私は考へてゐるのであるから、文和頃に此時分としては實に大きな相當に發達した鰭を持った三花蕾がある なんか、どうも不思議でならないのである。降りのは何だか變だが、夫は破損してゐるからで、三つとも同種である上に、もう一つ上の方の平たい部分に裝飾につけてある「六葉」が「五葉」になってゐる。これも先づ珍らしい方で餘り多くない形である。

要するにこの禮堂の懸魚は、建築が古い割に類例のない形をしてゐるので、早く言へばいやに發達をしてゐるが、よく見ると大分に原始的のところがある。だからやはり鰭付の三花蕾懸魚としては、恐らく最も古い形をしてゐると思はれるのである。この樣な點から充分注意をして觀察する必要がある。妻飾の「虹梁大瓶束」は別に珍らしい事もない。

軸部に於いては扉が全部新しく、殊に花狹間に古いのが一つもないのは惜しい事である。窓も洵に珍らしく、狹間飾が花狹間になってゐるが、これも亦古い材料が一つもない。この堂の修理の際の監督技師はKといふ非常な敏腕家で、且つ創作家で意匠家で、さういふ點に於いては、もう一人のA技師と共に、斯道の專門家として盛名天下に竝ぶものがなかった位だから、或はこれ等もK技師の創作ではないかといふ疑ひがなくもないが、當時の現場主任のH技手は溫厚篤實眞っ正直の君子人であり、嘘をいった例のないのは有名なものであったが、此人からあの花狹間は決してK技師の頭から出たものでなく、確かに古いのが殘ってゐたが、再び使用ができないので、止むなく全部新材を以てつくり直したのだといふ話をきき、其時以來私は花狹間窓の唯一の實例として信じてゐる。だから例ひ新しくても、古いものと同じ價値があるものとしてよろしい。

扉の上の方の廣い間にも、これ等の窓と同一の花狹間が入れてある。然るにどういふものか此等の部分は全部金網で覆うてある。こんな新しいのはそんな事をしないでも、破損したら又造り直せばよからうと思って、寺の坊さんに尋ねたら、遊覽人が暴力で壞して持ち去るのを防ぐためとあった。暴力といった所で、まさか毟りとるのではなく、細い懷中鋸の樣なものを持ってきて適當の部分を切りとり、何としても取締ができないので、止むを得ずこんな不體裁な事をしたとあった。

京都の鹿苑寺金閣の三階へ登った諸君は御承知の事と思ふが、鋭利な刄物をもってあちこちをそぎとってある。遊覽者のいたづらである事いふ迄もない。榮山寺八角圓堂內陣柱に殘ってゐる、天人か菩薩かとにかく立派な小さい天平顏を、そっくりそぎとって持って行くつもりで、ナイフか何かでやって見たがうまく行かず、とても盜みとる見込がないので、とりかけて其儘にしてあったのをいつか行った時氣がついた。何れも言語道斷な振舞である。寺の坊さんにも無論責任はあるが、拜觀人が正直さうな顏をしてみてゐて、監視人のすきをねらつて惡事を企てるのだから、何とも仕方がない。

*　*　*　*　*

外部はその位にしておいて、次に內部へ入ってみる。既記の通り後方卽「あひの間」に向へる方は柱をたてず、大虹梁を側柱の間に架渡し、正面中の間兩脇の柱から、同じく大虹梁を先の大虹梁に架けてあること**一七一**に示すが如くにしてある。この圖に於いて左右の方向にある太い材料はあひの間との境にある大虹梁で、其一端は**一六五**—**一六七**に現はれてゐる、さうして其下端から先の方が少しつぼまって見えてゐる材料は、**一六八**—**一七〇**に其一部分が見えてゐるのと同じもので、卽ちあひの間境の大虹梁に直角に交叉してゐるものである。扨てこれで普通の唐樣建築の四角な佛殿の內部の骨組ができたので、あとは**一六七**乃至**一七〇**を見れば、夫等が公式通のもので、どこにあっても同じだから最早說明の必要を認めない。又この方面に餘り詳しくない讀者には、これでは判るまいが、さういふ諸君にはいくら書いてもやはり呑み込めないであらう。

要は實物の見學が必要である。先づここでは仕方がないから**一〇七—一〇九**でも見て類似點を探し、こんなわけの判らない樣な込み入った組方が、典型的唐樣かとでも思っておくより仕方がない。

祠堂。禮堂が單層で位置が低いのに對し、祠堂は重層で位置は稍や高い(**一一六**)。其屋根が入母屋造であるのは同じだが、上層が扇垂であるのに、下層は觀音堂の樣に化粧垂は一本もなく、化粧隅木と茅負とが見えてゐるばかり、夫に洵に珍無類な事には上層二軒下層一軒で、其化粧隅木は何れも和樣同樣、先端に彫刻もなければ下を向いてもゐない(**一一六四**)。どうしてこの樣な取扱をしたものか、隅木の先はただでさへ下を向けたがるのに、この樣な唐樣のチヤキチヤキに、どう考へても不思議千萬である。下層だけなら觀音堂のも實はさうなってゐるのだから、これだけではないぢやないかといへるが、あれは上層の分は立派に下を向いてゐて、この通り正に唐樣だといふ事を天下に公表してゐるのに、祠堂の方は上下層共除外例だから變ってゐるのである。

普通唐樣の重層佛殿に於いては、下層の屋根は上層頭貫の丁度下いっぱいにおさまってゐるものであるのに、ここでは頭貫の下におさまらないで、半分位其側面にかかってゐる。これも亦珍らしいことと思ふ。態態かうしたのか、夫ともつい誤ってさうしたのか、其邊の事は元より判然しないが、頭貫の途中迄下層の屋根をもって來るよりは、下一ぱいにおさめた方が餘程形もよろしいから、さうしさうなものだのに、してないのは或は計算を誤って、少し柱を短く切りすぎたか何かで、組立てて見たらどうも少しうまくいかなかったが、これ位の事でやり直すのもつまらぬ事だし、下層の屋根は何も上層頭貫の下で是非納めなくてはならぬ理由もなし、かうしておいたのではあるまいか。

内部は極めて簡單で、改めて記す程の事もない。但し正面出入口の兩開棧唐戸は、注意をする必要がある。これは上の方に花狹間が入れてあり、可なり上等で一見當初からのものの樣であるが、どうも夫が少しばかり其場所にあってゐない。まさか寸法を間違へてつくる筈はないから、或はどこかのをここへ應用したのかも知れないが、はっきりしない。花狹間はさうだが、扉の棧と框とが表裏が異ってゐる。即ち裏は普通どこにでもある謂はゆる「唐戸面(からとめん)」がとってあるが、表は中央に鎬を有する種類で、類例を求むれば東大寺開山堂內陣正面・長弓寺本堂(奈良縣生駒郡)・淨土寺本堂(尾道市)等の棧唐戸と同樣であるが、ただ祠堂の場合は、他の例と異なり、框の鎬の有樣が棧のと異なってゐるので、他に類例がないといへる。これでつまり唯一の棧唐戸たり得たのである(**一一七二**)。

あひの間。祠堂と禮堂とを結びつけてゐる建物を「あひの間」といふ。あひの間とは「あひだの間」といふ意味だらうから、漢字を混ぜて書くなら「間の間」とすべきではないだらうか。併しさう書いたのは見た事がない。大概は「合の間」とか「相の間」とか書いてある樣である。二つの川が出あって流れる事を合流といふから、禮堂と祠堂が出會ふところにあるから「合の間」でよささうに思はれる。併し私はアヒノシュク「間宿」アヒノキョウゲン「間狂言」等の樣に「間の間」と書くのが最も正しいと思ってゐるが、どうもこれでは、マノマとかケンノケンとかケンノマとか訓む處があるから、假名で「あひの間」と書くことにしてゐる。

禮堂も祠堂も大棟は左右に通じて、互に平行をしてゐるが、あひの間の屋根大棟は夫等に直角をなしてゐる、即ち前後に通ってゐる。だからこの三つの屋根の大棟は「工」字形をなし、さうしてあひの間の屋根は兩下となり、內部は化粧屋根裏になってゐる(**一一七二**)。其禮堂との接續は**一七一**にみる如くで、珍らしいことに大虹梁の上に薄き板をおき、化粧棟木を支へるために板墓板——無論裝飾に過ぎないが——を用ひてある(**一一七**)。其形は大してよくはない。兩肩に簡單な飾をつけて

ゐるところは、時代は一つ後になるが法界寺本堂の夫の先輩と見られ、又似たりよったりの頃では添御縣坐神社（奈良縣生駒郡富雄村大字三碓（ミツガラス）鎭座）の夫が、刳抜だけれどもこの手のものであらうから、その樣なところから甚だ面白いものである。換言すれば裝束の下を少しひろくした樣なあひの子蟇股は鎌倉末位から用ひられだしたのだらう、といふ見當をつけても大して不都合でもなささうに思はれる。

蟇股は支那建築にも朝鮮建築にもあるにはあるが、大したものではない。ところが我國に於いては非常な發達をとげ、他國の追隨は到底許さない。實に我國の建築にありては、蟇股と木鼻とは夫を裝飾するための最重要なるものである。さうして鎌倉時代に於いては、板蟇股は勿論、刳抜の方も左右相稱で平面的で、主として多少原始的ではあるが、一時に進歩をしたのであった。當代の天竺樣建築にありては、蟇股は唯一種に限られ、唐樣建築には用ひないのが普通であったが、これは末期に屬するものだから、使ってあっても寧ろ當然である。けれどもさすがに刳抜では弱弱しいから、丈夫さうに見える板をつかってゐる。そこはよろしいが、忌憚なくいふと、もっといい恰好のがいくらもあるのに、割合に拙いのがつかってあるので想像すると、開山堂の建築家は唐樣の大家であって、和樣の方は餘りえてでなかったのであらう。そのためにこの邊に落着いたのではあるまいか。

此あひの間の化粧屋根裏が祠堂に連ってゐる方は一七二にだしてある。この方は圖に明らかな通り「虹梁大瓶束」で、これならあたりまへである。平生はここに額が掛けてあり、大瓶束の下の方の結綿（ゆひわた）のあたりは見えないが、これはそのあたりをはっきりさせたいので、額を外して戴いて寫したのである。禮堂から祠堂の上のところはよく見えるから、唐樣の取扱をしたが、見返のところは振返らなければ見えない。尤も歸りがけにはまともになるが、そんなに上の方を眺めながら退去する事もあるまいし、又こんな所に大瓶束をたてることもできず、さりとて間斗束や蓑束より板蟇股の方が適當と思ったので、兩方で異なった取扱をしたと想像ができる。序ながら化粧屋根裏の棰が皆平行してゐる事も見ておかないといけない。

永保寺開山堂あひの間脇壇上部一部

（昭和三年九月十六日）

あひの間は其幅が禮堂と同じである上に、其左右に腰掛がとってあるから、全體の幅は禮堂の正面より廣いわけである。さうして祠堂の正面は三間で、中央の間が出入口になってゐるから、其左右に可なり幅の廣い間が一つづつある。その間が脇壇になってゐるのである（一七三）。普通の場合は佛殿の後方、須彌壇の裏側の左右に脇壇がとってあるので、京都府にある手近な例でいふと、市内の臨濟宗の寺の佛殿は勿論、少しはなれたところでは薪の一休寺でも普濟寺本堂でも皆さうなってゐるが、永保寺では禮堂の後面が一間だから、さうして直にあひの間に續いてゐるから、脇壇をとる事ができない、そこであひの間のつき當りなる祠堂出入口の兩脇にもって行ったのである。

脇壇には現在位牌等が安置してある。其上の方は「出組（でくみ）」の科栱が詰組になって居り、其上部は「如意頭文（にいきもん）」に終ってゐることは、定光寺本堂の夫（一五四、脇壇ではないが一五五も意味は同じである）と變りはないが、大瓶束が無いのと有るのと、科の組み方が複雜なのと簡單なのとで、大分變って見えるから、見馴れない眼には別物としか考へられないかも知れないが、同じ言葉で表現できるから、便利であると同時に曖昧なのは止むを得ない。大概こんな場合は壁付の科も肘木も壁板から刻みだしてあるので、此場合も亦さうなってゐるのみならず、一手先の科栱は、やはり一木から刻みだしてある。

尙ほこのあひの間の面取方柱は、方四寸八分に面の見付七分で其比約1/7、柱上の枓栱から內部に向って手挾の樣な木鼻式の飾が出てゐること、觀音堂の廣椽上に於ける如くである。

＊　＊　＊　＊　＊

飛鳥時代に於いて朝鮮から初めて移入された佛寺建築は、奈良時代になってから、唐より直接我國に輸入の文物美術工藝と合流し、平安後期に於いて純日本化し、鎌倉時代に移行した謂はゆる「和樣」は、同じく鎌倉時代に宋國から渡來した二つの新しき樣式の內、禪宗を背景として、今日に到る迄も隆盛を極めた「唐樣」、或は其樣式としての生命は短かかったが、他樣式のうちに細部が永久に入り込み融合して了った「天竺樣」と混淆し、種種複雜な新しい樣式を生みだしたが、このうちの二種又は三種が混ったのは幾多の實例がある。而も其混淆の仕方も、いろいろ程度があって一定はしない。彼の有名な和唐折衷の代表とされてゐる觀のある觀心寺本堂の如きも、そのうちには天竺樣から來たのではないかと思はれる細部が見られるのである。

そこでこの開山堂であるが、これは後の神社建築の一樣式なる「權現造」の原型として知られ、どの書物をみても左樣にかいてあり、唐樣建築の一代表として紹介されてゐるが、實は純粹の唐樣ではなく、そのうちに幾分の和樣、實は至極少量ではあるが、とにかく和樣が入り込んでゐることが記してない樣だが、左の點に注意して觀察する事が必要であると思ふ。

一、禮　堂。大棟及び破風板のみ和樣。其他唐樣。

二、あひの間。禮堂側の板蟇股のみ和樣。其他唐樣。

三、祠　堂。大棟　破風板及び上下層の化粧隅木のみ和樣。其他唐樣。

そこで結論は次の樣になる。

永保寺開山堂は後世の神社建築の一樣式なる「權現造」の原型と見られ、建築史上重要なる位置を占めて居り、唐樣約98%、和樣約2%より成る。

黒谷の鐘楼と阿彌陀堂（一七三—一八四）

京都市左京區黒谷町に黒谷といふ寺がある。本名紫雲山金戒光明寺だが、お春日さんやお多賀さんの様に、くろだにさんといってゐる様である。この方が早判りがする。電車の停留場に「岡崎通黒谷前」といふのがある位である。人若し京都の人に「金戒光明寺へはどう行きますか」と尋ねたならば、其きかれた人が餘程の韻照級でない限り、怪訝な顏をして口をあけるであらう。

其金戒光明寺は、寺傳によると法然上人が紫雲光明の奇瑞を感じて開創した靈蹟といふ。今に至るまでざっと七百五十年、其間いろいの變遷があり、現在古建築といふべきは阿彌陀堂と鐘楼とで、他にさう古いものはない。寺にとって何より大切な本堂は「寛政年間の再建にして桁行十六間半、梁間十五間半の大堂宇なり」とある。寫眞でみると桁行七間梁間七間單層入母屋造本瓦葺の大建築であるが、これが昭和九年四月十七日不慮の火災で燒失、目下再建中である。

筆者は大正七年から昭和十二年迄、其間にまる三年ばかりぬけたから、ざっと十七年間吉田山麓の小さな家に假寓し、其間毎日の様に膝を容るるの安じ易きを審にしてゐたが、眞如堂にせよ黒谷の本堂にせよ、比較的新しい建築なので左まで興味を惹かなかったため、燒失前唯一度あの本堂の傍を通った時、歩きながら其外側を瞥見しただけで殆んど記憶はない。あの邊に火事のあったことも薄薄知ってはゐたが、其燒けたのが黒谷の本堂である事を知ったのは、翌日の新聞紙によってであった。

例ひ其建築が江戸中期のものであるにせよ、洵に惜しい事をしたもので、同情にはたへなかったが、ただ心のうちでさう思ってゐただけで、寺を知らなかったから、別段同情心を表現する方法はとらなかった。併し寺としては燒けた儘ではおけないから、早速復興すべく萬端の用意をした。先づ第一期工事として大方丈からはじめることになり、設計監督等萬端をT博士へ依頼されたさうで、工事は着着進行し、大方丈から座敷へかけて立派に竣工をした。

其後第二期工事として本堂が始まった。何でも昭和十一年の秋頃から設計にかかったらしく、翌十二年の夏か秋頃からそろそろ軌道に乘りだし、幸なことに目下屋根瓦を葺く迄になったのは、寺のために洵に慶賀すべき次第であるが、私もどの様な本堂が再建されるかと、時折拜觀に出かけた序に、K技師から黒谷では阿彌陀堂と鐘楼が古いときかされ、みると成程さう思はれたので、數圖を掲げて解説をしておく事にした。

* * * * * *

前記黒谷前の停留場で電車を降り、左折して左京郵便局の前を通り、突き當って右折すると左角に巡査派出所、正面に高麗門、左手に「くろだに」とほった大きな四角な石がたってゐる。此高麗門を入り暫く行くと左手に石段が見える。此石段を登ると江戸末の三門が建ってゐる。萬延元年の再建ださうで高麗門と同時である。此門は禪宗の三門と全く同一型式で、左右に山廊があり、楼上には釋迦三尊及び十六羅漢像を安置す。いふ迄もなく此寺は淨土宗で、同宗の知恩院に屬してゐる。東京芝増上寺亦然り。然るに此等淨土宗寺院は何れも禪宗式の三門があるのはどういふものか。尤も先年颱風に倒潰した大

阪四天王寺の中門も禪宗式であったのでみると、どうも禪宗が大にこの邊では勢力があったので、天台宗でも淨土宗でも、宗旨なんかどうでもよく、何れも禪宗の影響で山廊附三門をつくり、上層には佛像や羅漢を祀ったものと見える。

三門を入つて西門に通ずる道を横切り、更に石階數級を登ると、左に鐘樓右に阿彌陀堂があり、正面が舊位置に再建中の本堂である。他に經藏・觀音堂、夫から東方の小高い所に三重塔が立ってゐるが(一七八左上)、此等は何れも大して古い建築ではないから、省略をしておく。

一、鐘樓(一七三―一七七)

鐘樓とは吊鐘を下げてある建物をいふ。鐘堂とか鐘樓堂とか呼ぶ人もあるが、あれは堂ではないのだから、この名は適當ではない。時には門を兼ねてゐる事がある。即ち樓門をたて、上層に鐘を吊る。これだと建築は一つで二つの目的を達し得るが、鐘が大きい時は少しばかりむづかしい樣である。

現今鐘樓といへば大概は四本脚の單層であるか、左もなくば袴腰のついたものである。前者は脚を少し内方にねかすのである。内方といっても四隅に一本づつある脚だから、つまり四十五度の方向にねかすので、さっと踏臺の脚の樣にする。これを「轉ばす」とか「轉びをつける」とかいふ。この樣に四隅の脚を轉ばすのを「四方轉び」といひ、相當の大工でないとうまくできないと聞いてゐる。とにかく吹きぬきの四脚鐘樓は割合に新しい。往昔のは全く型式を異にしてゐた。然らばどの樣なものであったのであらうか。

大和の法隆寺のつい隣、といっても東院伽藍の東北に當るが、中宮寺といふ尼寺があり、此寺に天壽國曼荼羅と稱する繡帳を藏する事は、此頃の事だから恐らく知らない人はめったにあるまいが、このうちに鐘樓の繪がある。三重の基壇上に建てる單層入母屋造であるが、其入母屋は四注の上に切妻造をのせた樣な頗る原始的のもので、破風には懸魚を下げ、大棟の兩端には鴟尾をあぐ。建築物の内部には特殊の枠を置き、其枠から鐘を下げ、長い撞木を兩手に持った人が立ってゐる所を現はしてある。實際の建築ではないのだから、あれでもいいが、長押も貫も一本もなし、柱は四隅に一本づつたってゐるだけだから、あれではもたない。實際はもっと合理的のものであったに違ひない。先づ大凡

・飛鳥時代のものは長方形の平面を有し、内部に特殊の枠を造り其枠より鐘を吊り、手に持つ撞木を以てついた。床は瓦・石敷又は土間、化粧屋根裏、屋根は入母屋・四注・切妻等、瓦又は草葺。

といふ位のところであったかも知れない。

奈良時代のは遺物がないから、推定するだけだが、法隆寺西院鐘樓の樣なものではなかったらうかと考へられる。其向ひに建ってゐる奈良時代の經樓から左樣に思ふのである。創立當時の東大寺講堂の前に、東西にあったのは經藏と鐘樓とらしく、尙ほ興福寺中金堂北方の礎も同樣と思はれる。仍て

奈良時代のものも亦、其平面は長方形で、桁行三間梁間二間外觀重層切妻造本瓦葺、妻飾二重虹梁蟇股、撞木は多分現今の樣に吊下げたのであらう。

と考へる。次の平安になると前期後期を通じ、遺物は前記法隆寺西院のが一棟あるだけ、故に

平安時代に於いては、其型式前代の繼承と思はる。謂はゆる袴腰付のものは未だ出現しなかったものの如くである。併し鎌倉となると、遺物からみて二種の型式があったやうである。一は東大寺大鐘樓の型で、他は法隆寺東院・新藥師寺の型、換言すれば單層吹放のと重層袴腰付のとである。そこで

鎌倉時代の鐘楼には二種の型式があった

一。單層方一間。柱は四隅に直立し、補助として副柱のある場合もあった。軸部は吹放。屋根入母屋又は切妻で本瓦葺。

二。重層で上下層間に切椽があり、下層は四方共總て

内方に凹曲面をなし、漆喰塗で四隅に木材の輪郭を有するもの（法隆寺東院）

平面をなし漆喰塗のもの（新薬師寺）

とあり、上層は桁行三間梁間二間で、これは多分前代よりの引續きと見られ、屋根入母屋造本瓦葺又は檜皮葺（？）

下層漆喰塗の代りに、縦羽目目板打或は下見張の有無は確言し難し。

室町以降は何れも鎌倉式の踏襲であるが、重層袴腰付のもの最も流行したらしい。此種ので時に下層が外側に反對に張出したのもあるが、極めて稀である（京都市正傳寺）。方一間で四方轉びのものが室町にあったかどうか、私は未だ知らないが、桃山にはあった。併し江戸に入ってからは、殊に費用節約も手傳ったのか、田舎の寺のはきまりきって此種であった。而も屋蓋のみ徒に大きく、洵に不安定極るものばかりといっていい位になって了った。以上飛鳥以降鐘楼の沿革仍如件。

* * * * * *

黒谷の鐘楼の寸尺は、柱眞眞（中心から中心迄だから、「心心」であるべきだが、普通「眞眞」とかく）十六尺四寸二分、柱直徑一尺七寸、礎盤徑二尺二寸六分。撞木は南側に下がってゐるから、鐘はいつも南から撞く樣になってゐる。吹放し方一間四方轉びの四本柱だから、地貫・腰貫・飛貫・頭貫といふ風に、貫が四本入ってゐたところで、永年に瓦り南からばかりついてゐたせゐか、樓其物は少しく北の方へ傾いてゐる。或はさうではなくて、年百年中南風があたるためかも知れない。

先づ柱下部をみる。礎石と柱との間に「礎盤（そばん）」がある（一七三）。「礎盤」を訛って上を引張りソーバンといひ、夫に漢字を當嵌め「草盤」又は「雙盤」とかくが、これは誤りである。此礎盤に石製と木製と二種ある。石製の場合は礎石と一緒につくったのはないが、木製にはどうかすると柱の下部から礎盤形に刻みだしてゐる事、恰も大瓶束の上を圓形に大枓の如く削り出した樣なのがある。斯樣な場合は言ふ迄もなく其最大徑は柱の直徑より大きくはできない。だからかういふのは主堂の柱にはなく、脇壇等の割合に細い柱にあるのみである（備後鞆津・安國寺本堂）。

礎盤は鎌倉時代に禪宗建築と共に支那から渡來したものと思はれる。だから最古のものでも鎌倉より上に出ない。併し一度唐樣即ち禪宗建築が輸入されてからは、非常な勢で在來の佛寺建築に迄影響を及ぼしたが、さすがに大和平野だけは、古くは和樣、鎌倉になってからは大佛樣即ち天竺樣の勢力におされ、這入り込めなかった樣だが、夫でも時に唐樣の肘木を用ひたりしたのもあった。その他では多少なりとも唐樣要素の混じてゐないものはなかった。殊に礎盤及び粽付の柱は、鎌倉以降のあらゆる建築に用ひられたといへる。然らば礎盤は時代によりて多少形が異なってゐるかといふに、大分の差がある。同じ樣でありさうなものだが、さうでない。此鐘樓のなどは割合にいい方である。それも其筈、元和のものと見られる位だから。

木鼻の事はあとへ廻し、次に飛貫と頭貫との間に、枓栱に二つづつ用ひてある蟇股を調べてみると

東。　缺損してゐるが牡丹らしい（牡丹だけらしい）

北。　牡丹に獅子

西。　桐に鳳凰

南。　竹に虎

である。抑も枓栱間に裝飾蟇股を用ひだしたのは平安後期らしいが、柱間が割合に廣い時、一つでは淋しいからか、二つにしたのは室町位からであらう。間枓束を二本入れたのなら確かにあるが、蟇股では板蟇股の上に繪樣肘木（上に二枓あり）をのせたのが福山市の明王院にある。併し彫刻入の刳拔蟇股があるか無いかは知らない。けれども桃山にある事は確實である（京都市清水寺鐘樓）。

脚内の彫刻は表裏で異ってゐる。脚の先端も表の方は葉化してゐて、そこへ「猪の目」（サノメ。心臟形をいふ）をほったり何かして幾分裝飾をしてゐるのに、裏は大分省略してある。裏を略するのはともかく、表裏で彫刻を異にしてゐるのは、鎌倉末位から見られる（兵庫縣飾磨郡菅野村大字寺村、彌勒寺本堂（康暦二年））。以降漸くこの傾向を帶び、桃山・江戸となっては、向拜等に用ひてある樣に兩面から見得るものは、きまってからうしたのである。

「牡丹に唐獅子」でも、鎌倉や室町には勢のぬけた、ただ歩いてゐる樣なのもあったが、ここのは相當に活動をしてゐる。活動の最も劇烈なのは奈良市般若寺本堂前石燈の火袋の薄肉彫刻で、反對にゆっくり居眠をしながら漫歩してゐるのは、同市藥師寺（西の京）金堂前石燈火袋のである。同じ鎌倉時代に、この樣に極端から極端まであるのは大に興味ある次第である。

ところが此蟇股のは殆んど獅子ばかりで、牡丹か何か僅かに葉が申譯の樣に添へてあるだけである。東側の缺損の分が恐らく幹も枝も花も蕾も葉もあったので、夫で間に合はせておき、計畫者の頭の冴を見せたのであらう。

「桐に鳳凰」にしても、鳥が主で桐は副、古代のは大概竹もあり、桐・竹・鳳凰であったのに、此分には竹はない。夫から「竹に虎」の分は、これも亦同樣に動物が主にしてあるが、筍が生えてゐるのに注意せよ。牡丹や桐に芽生えはないが、竹にはよく筍が副へてある。室町のに有無を知らぬが、桃山以降のには常に見受くるところ。筍は美味で食用に供するため、大に人の注意を惹くからであらう。

枓栱三枓、妻飾は「虹梁大瓶束」だが、これも亦後迹として次に懸魚に移って行く（一一七四、一一七五）。懸魚は破風の「拜」（おがみ）又は破風と桁との交會點に裝飾のためにつける一種の彫刻で、周邊は外擺線（ヒポサイクロイド）の樣な連續曲線より成り、其面は平たく、適當なところに心臟形の孔をあけるか又は凹みをつくり、上の廣い所に六瓣花を飾りにつける。此型式のものを「猪目懸魚」といふ。或は圖の如く放射形の曲線を以て其面に裝飾をつける。かういふのを「蕨懸魚」（わらびけぎょ）といふ。六瓣花は普通「六葉」といひ、中心に近く「菊座」を置き、其中心に「樽の口」と呼ぶ呑口の栓の樣な、元細く先太き長い棒が挿してある。この六葉は卽ち便化蓮花で、八瓣であるべきのが六瓣に、雄蘂は「菊座」に變じ、子房は細長となって「樽の口」に退化變形したに他ならないのである。江戸末になると樽の口は益益細長となり、時に雀なら二羽、鳩なら一羽位平氣でとまれる位なのがある。つまり其元が全く忘れられ、何が何だか判らずに、長くつくるものだ位に思ってゐるので、その樣な言語道斷型のものができてきたのである。

懸魚は建築物の高所に在って、風雨に曝されるので長い間の使用に耐へない。現在最古のので鎌倉を上らないのだから、飛鳥から平安迄の型は明らかでない。だから例ひ千萬言を費して滔滔懸河の辯をふるってみた所で、土臺がしっかりしてゐないのだから役にはたつまいが、想像は自由だから、夫が事實と一致しなくとも、何とも致し方がない。仍て次に半ば推定で懸魚の變遷を書いて見る。

飛鳥時代。中宮寺の天壽國曼荼羅には、囊に記した樣に鐘樓には明らかに懸魚があるし、又後補ではあるが法隆寺金堂にもある。玉蟲廚子の宮殿にも當初はあったが、それがいつか亡失したと見られなくもないから、當代に存在した事は確

實といへる。然らば其型式は如何。

いふ迄もなく飛鳥には忍冬唐草が全盛であった。だから多分そんなものから意匠されたのではあるまいかと考へ、可なり以前に推定復原圖をつくっておいたが、私は初めてそれを大阪四天王寺中門の妻に試み、其結果は左程變でない事を知った。原始的懸魚としては、敢て自畫自賛ではないが、あの様な形でも不都合はないと思ってゐる。天狗の羽團扇の様なものだが、さうではなくて忍冬のつもりである。

奈良時代。當代前期に於いては忍冬の先の尖りがとれ、幾分圓味をもって來たらしいが、これは推定で全然證據はない。併し後期では充分洗練され、完好なる形になったであらう。破風拜みの透彫飾金具はなくなったかも知れない。

平安時代。前代の繼承であらう。後期に於いては鎌倉初期と推定されるものと殆んど變りのない型式にまで進んだであらう。

鎌倉時代。鎌倉に入ってからは、懸魚の形にも種類が多くなった。理由は發達をしたのと、又別に「唐破風」なる波型曲線をもった一種の破風が出現したので、特殊型式のこれに當嵌る様なのができ、更にまた簡略式異形のができたからである。

一、其標準型式は兩方の卷込が大きく、後世の夫の様に細い螺旋形の間隙（例へば一七四）を殘す様な事はない。上方の連續弧線（下の方と反對になった擂線形）も亦、全部が内方に向って膨れてゐる。

二、異形懸魚、其一。これは京都市教王護國寺（東寺）の門にある様な、普通の猪目懸魚の下の方の中の部分を除去した様な特殊のもの。

三、異形懸魚、其二。丹波花背の峰定寺本堂（現在は四注造だが元は入母屋）より發見した種類のもので、これもここにあっただけで、他に類例の有無を知らぬが、餘程變ったもの。其一に比べてこの方は、どうして考案したか判じ難い。

四、末期になってくると、其兩方に破風の下端に沿ひ、裝飾的附加物（鰭）がつけられた。其原因は判然しないが、恐らく木鼻の應用であらう。或はまた唐破風の懸魚から考へたのかも知れない。

五、「三花懸魚」の出現。

六、「蓋懸魚」の出現。

七、「梅鉢懸魚」の出現（一一九）。

八、唐破風にのみ特有な謂はゆる「兎毛通」なるものが、當代に初めて用ひられた（時代は桃山だが例へば一一七の如きもの）。

前代迄僅に一種であったと推定し得る懸魚は、ここに少なくとも八種を數へる様になった。鬼瓦を簡略して鬼板（例へば峰定寺本堂開伽井屋の大棟）を考へだした鎌倉時代の建築家は、猪目懸魚を同様に簡單化して梅鉢懸魚を考案したのであらう。

室町時代。卷込は小さく、從て空隙は螺旋形を呈し、又鰭が發達しだし、時に魚形をしたもの等もあった（吉野藏王堂廚子）。

桃山・江戸時代。卷込は愈〻小さく空隙は蝸線となり、又鰭の發達は手挾や蟇股内の彫刻の進歩と平行してゐる。鰭には牡丹・菊・若葉等の透刻をした大型のもあり、又懸魚全部、波を刻したり（江戸時代廟建築）、或はその様な金屬板で包んだり（吉野水分神社本殿）したのもあった。六葉も漸く複雜化し、便化牡丹花・金銅複瓣牡丹等甚だ美しいのができた。樽の口は桃山から特に長くのび、鳥の止り木として役立つ様になって來た。三花懸魚も桃山に入ってから「桁隱」（下り懸魚）に迄用ひられだしたが、破風に向ってゐる方は花を出すだけの餘裕がないから出せないので、自然「二花」である。

其他種種異形のもの、例へば「切懸魚」・「貝頭懸魚」等、或は又命名しがたい樣なものもあった。拙劣な方の代表としては「二重懸魚」。

現代。桃山・江戸時代の踏襲。此頃は各自が餘程考へだした樣だが、何れも圖版と首っ引で、ほんたうの形が判ってゐないから、ろくなものは一つもない。

以上を約言すると、建築全體としても、平安迄は簡單であったが、鎌倉以後は複雜化して始末がわるくなったと同樣、あらゆる細部もさうで、懸魚も亦除外例たり得ないのである。尤も平安以前の遺物がないのだから、めったな事は言へないが、他の例から判斷しても鎌倉以前は一種で猪目懸魚であったといふ想像は、無稽でないのみならず、頗る合理的だと思ってゐる。夫だのに鎌倉になると八種類もでき、桃山・江戸となってから、何種できたか判らないが、かういってはすまないが、金はかかってゐても、美的價値の高いものは先づ以て甚だ鮮い。

* * * * *

次に以上の豫備智識をもって鐘樓の懸魚をみるに、東西拜の分は何れも蕨懸魚で、兩方の卷込も可なり多いし、鰭や六葉等を考慮に入れると、此等は完全な蕨だから室町以降であり、樽の口はのびて呑口の栓の如く、この點からは桃山以上に出られない、桁隱も亦同斷。拜懸魚の鰭は東側の分は「天人」(一七四・一七五)で西のは「牡丹」。天人は實に珍らしい。其天人も懸魚に直接についてはゐず、先づ兩方に小さい若葉を出し、其若葉が邪魔になって窮屈さうに首を曲げ、胴體も可なり硬直してゐる樣に見えるのは、輪郭に拘泥しすぎたせゐであらう。意匠は奇想天外だが、大して巧みでない。西側の牡丹は何といっても時代が時代だから、この方は申分はない。大してうまくないと思ってゐる天人鰭の寫眞で圖版一部をふさいだのは、勿體ない樣ではあるが、餘りどころではない。殆んど誰も氣がつかない珍らしいものを紹介し、遠隔の地に於いても容易に圖の上で、其如何なるものかか判斷できる樣にしたのである。

序ながら天人の足に就いて、ある佛像研究の大家の說をきいた事がある。抑も天人は昔は足を出してゐたが、近代になってからのは皆引込ましてゐる。さういふ風だから、其つもりでみると大體の見當はつく。といふのである。私の知ってゐる近代の天人は、皆行儀がわるいと見えて、大概足を出してゐる樣だから、其旨を述べて御高說は考慮の餘地がありはしませんかと申した所、さうですかねーと言はれただけで餘り贊成はされなかった。併しこの鰭天人も足を出してゐるし、直ぐ向ひの阿彌陀堂內部長押に描いてあるのも同樣だし、實例をあげよとの事なれば二人や三人なら桃山・江戸の分を提出できる。どうもこの說は如何かしらんと思ってゐる。

桁隱の鰭も充分にのびてよくできてゐる。懸魚や桁隱の型式は勿論、鰭等から見ても室町へは上らせ難い、元和九年を知らなくとも桃山にする方が穩當である。さうすると懸魚も蟇股も、樣式からだと桃山に落着かせていい樣である。

次に大瓶束と笈形とに移って行く(一六一七)。「大瓶束」と呼んでゐる特別な形の束は鎌倉時代以前にはなく、唐樣建築の妻飾は殆んどきまって虹梁の上に此種の束がたってある所の、謂はゆる「虹梁大瓶束」である。だから唐樣建築と共に支那から入って來たものらしい。或はさうではなくて、日本で考按されたものかも知れないが、その邊の事は未だはっきり私にはきめられない。大瓶束は其水平斷面も垂直斷面も共に曲線から成るもので、古いのは皆瓶子を聯想し得る樣な形をしてゐるから、それでこの樣な名がついたのであらう。其下部はいつも——といってもいい位、除外例は極稀——虹梁より前方にでてゐるから、其はみだしてゐる部分を、うまく虹梁の側面に馴染ませるため、簡單な彫刻をするのが普通である。この部分を

「結綿」又は「綿花」といふ（一七六・一七七）。

鎌倉・室町頃は瓶子型であったから、其名が相應しかった大瓶束は、桃山になると漸く型が變り、全體は略ぼ圓壔形となりて上下に粽形ができ、結綿の部分は束の下部につけた彫刻といふよりは、寧ろ全然別種のものを別にとりつけた樣になってきた。この圖に見る樣なのはまださうでもないので、甚だしいのになると下から上を向けて、植物（幹に葉に花或は若葉）をほったり、又は鬼の首をつけたりしたのがある。植物の場合、牡丹や菊の花に葉を添へて束の下に結びつけた如く、鬼は蟇んだ所を上から太い棒で首をおさへられた樣で、頗るぶさまである。時には其部分が獏化して、中途半端の鼻を虹梁の側面に垂れてゐる等もあるが、これ等は何れも結綿の行詰りらしい。

天竺樣建築には類似の束はあるが、下部は虹梁から左程喰みだしてゐない、喰みだしてゐても極く僅かで、結綿の樣な彫刻は到底できかねる位である（例へば淨土寺淨土堂・燒けてし）。和樣の束といへば從來は四角な棒に限ってゐたのに、鎌倉以降の和樣には梯形・撥形・蓑束等のみならず、大瓶束も隨分用ひられる樣になった。又神社建築にも珍らしくなくなってきた。妻飾といへば「二重虹梁蟇股」が全盛であり、時に「虹梁蟇股」があったのに、今度は「二重虹梁大瓶束」や「虹梁大瓶束」が增してきた。つまり大瓶束が蟇股にとって代ったのである。

時には大瓶束の兩方に蟇股を二つに割った樣な飾をつけたのがある。此飾を「笈形」といふ。これも亦いふ迄もなく大瓶束が行はれてから以降のものである。今鎌倉の實例は浮んで來ないが、室町のなら法隆寺南大門や相樂神社本殿（京都府相樂郡相樂村）のが原始的笈形の好例である。これは恐らく日本での創案であらう。

大瓶束が蟇股にとって代り、いつもきまって妻の虹梁の上で頑張り幅をきかせてゐたのは鎌倉時代のことで、漸く時を經るに從ひ、どうも少しばかり淋しい樣な氣がしてきた。豕扠首なら束其物は棒に過ぎないが、其兩方に合掌があるから賑かであるし、且つ上古より我國の樣式で、簡單だが執着はある。崇高な感はするが淋しい事なんか決してない。虹梁の上に蟇股をのせたのは、一重でも二重でも、殊に刳拔の彫刻入蟇股になってから一層賑かである。併し大瓶束となると、初め珍らしい間はいいが、暫くたつとどうも何となしにもの足りない樣な氣がしてくる。そこで氣がついたのが蟇股との併用で、蟇股を二つに縱に割って大瓶束の兩方へ飾りにつける事を考へ出した。そこで早速やってみたが案外よろしいので相當に流行しだした。とみるか或は又次の樣にも考へられる。

豕扠首の扠首束が曲線形の輪郭をもってゐる以上、扠首棹も合掌の樣に眞っすぐの棒では調和がとれない、そこで夫等を少しばかり曲線形をさせて見たらばと考へた結果、これは蟇股の脚が丁度よからうといふ樣なところから、相當なものが出來上った。

以上が笈形付大瓶束の發達に就いて私の想像である。事實と一致しなくても夫れは仕方がない。

其笈形は他の建築彫刻同樣、桃山時代に大發達をとげたので、大概は牡丹唐草の樣なものになった。京都の一例をいへば、大德寺勅使門のなどは代表的のものといへる。西本願寺飛雲閣船入の間大唐破風下のにも牡丹唐草のがついてゐる。比叡山延曆寺講堂は大きいから當然かも知れないが、大瓶束の笈形は若葉より成り、下幅二間ばかりある。

笈形が極端に發達すると、やはり動物化する樣だが、夫に景品がつく、一例は水と鯉とで、夫れが謂はゆる鯉の瀧登りになったのである。大瓶束兩脇の三角形の部分を充塡するため、鯉と水とを以てしたのは大德寺唐門にある。あの水を整理して瀧とし、鯉を上に向ければ瀧登りができ上るから、自然に發達したと考へられるかも知れぬが、これはやはり笈形なるも

のの原型がいつか忘れられ、ただ立派にすればいいといふ樣なところから出來たのであらう（長野善光寺大勸進）。

そこで此鐘樓の大瓶束を觀察するに、束其物は正面からは略ぼ圓壔形で、上下には唐樣の柱の樣に少しの粽の樣な部分があり、結綿は束に比して割合に大きく（桃山から江戸へかけて此種のはきまって此樣に結綿は大きい）、且つ其部分に圓鑿で突いた樣な部分のあるのは、これも亦室町頃から相當に流行した所である。其兩方につけてある牡丹の透彫唐草は、東と西とで少しく相違はあるが、要するに便化させた牡丹の葉で唐草の骨線をつくり、花と蕾とを適當に配したもので、別に新機軸が出してあるといふ次第ではない、いはば普通ありふれたもの。これが束の兩側から一ぱいに出て、束と虹梁と化粧棰とから成る直角三角形の空隙をうめてゐる。

此は元來この三角形の部分を裝飾するために用ひてあるので、大瓶束の兩側から出てゐるから笈形の樣ではあるが、さうではないのかも知れない。併しながら笈形と呼ぶ一種の裝飾彫刻が相當に發達するより以前には、斯樣な考へは多分出なかったし、又出せなかったらう。笈形が牡丹化し、裝飾として相當の效果を收めだしたので、この樣な事を考へつき、曖昧なものを造って間隙を充し、裝飾としての目的を達したと見るべきである。さうするとこれも亦、蟇股・懸魚と同樣、桃山以降と推定のできるものである。

木鼻。

貫・肘木・實肘木等の先が單に裝飾のために彫刻されたりしたものを「木鼻」といふ。「木」の先卽ち「鼻」だからであらう。「キバナ」とかくか「木鼻」としておけば間違はなかったのを、說明の補助の圖だからと思って「木バナ」とかいておいたら、夫を全くの素人が「ホバナ」とよみ、羅馬字で Hobana としてしまったので取返しがつかず、隨分困った事が最近にあった。注意すべき事である。扨て其木鼻の一例は**一七七**に見る樣に、大瓶束の上の方から前方に出た肘木の先が夫である。此鐘樓には他に三種あるから、合せて四種ある。

木鼻は鎌倉以前には見出されぬ。平安迄の建築は構造上不必要な木鼻は決してつけなかった。稀に貫等の鼻を少し柱の外へ出したとしても、夫はただ四角な形で出してあるだけで、裝飾的な彫刻等は決してつけてない。然るに鎌倉に入りて新に傳來した二樣式には、從來全く知られてゐなかった(?)裝飾が大分につけてあった。例へば天竺樣では一に鼻繰（はなぐり）と稱する懸魚の側面の樣な連續撥線形のものを刻した飾を貫鼻等に用ひ、唐樣ではこれと幾分異なったものをつけたのである。

初めのうちは兩樣式共頗る簡單なものであったが、桃山になってからは、他の彫刻同樣非常な發達をとげ、透彫・籠彫等ができてきた。京都市にありては、北野神社へ參拜するか、或は西本願寺へ參詣するとよろしい。前者の本殿と後者の唐門とには、當代代表的の彫刻がいくらもついてゐる。併し規則通り昇りつめれば降りとなるやうに、全く無意味なものもできてきた。例へば貫の鼻が柱の外へ出で、そこに飾として若干の彫刻がつくのは當然として、同時に木鼻と反對の方向卽ち貫の表面に、外方へ出てゐるのと全く同形を刻みだし、柱を中心として左右を同じに見せたので、これ等はない方がどの位いか判らない。桃山だからこんな事位はやむを得ぬと思ふかも知れないが、實はこの樣な例は室町にあるのだから、もうそんな時分から墮落を始めた事がよく判る。又彫刻其物としては、江戸になってから非常にきゃしゃで、僅に手を觸れただけで破損しはしないかと思はれるものもできてきたと同時に、一方には輪郭の曲線が全く弛緩して了ひ、ゆるくなまぬるい雛形本式の、海鼠のとろけた樣な形に退化したので、現在この種の木鼻は京都市で隨所に無數の實例がある。

木鼻を木口の方から見た時、其厚さの中央に縱に高い稜線があるのと（**九二**・**九五**・**九七**・**九九**等）ないのと（**八**の二つの如き）とある。稜線卽鎬（しのぎ）

のあるのは唐様ので、ない方が天竺様である。而も唐様の方は其側面に普通蝸文をほるから賑かでもあるし、且つこの様式は禪宗を背景として頗る勢力があり、建築様式の旗幟鮮明であったといふのが恐らくは主因となり、加ふるに天竺様式は餘りに突飛でもあったか、當時の日本人の趣味に合はなかったといふ様な所から淘汰され、例へば其細部の一なる枓尻に一種の繰形を有する枓が、他様式のうちの一部に用ひられたといふ様な點を除いては、様式としての獨立を失ひ、滅亡してしまったのだから、唐様獨り全盛を極はめたので、從て鎬付の木鼻は大和國以外の社寺建築に於いて、隨所に見出されたのである。

建久年間東大寺大佛殿の復興に際し、時の勸進聖俊乘坊重源上人は天竺様なる新様式を採用した。平重衡に燒かれて以來十年たった建久元年に着手、同六年に、それこそ僅かに六年間で、あの廣大無邊な大佛殿が、見た事もない様な新様式で四方八方にグリグリの木鼻を出し、美事に復興したのだから、氣の小さいものは眼をまはしたであらう。だから當時の大小の建築家連中も、これは到底手に負へない、眞似をしたくも齒が立たないから、グリグリの木鼻位を早速無斷借用し、そこいら中の和様建築へくっつけて見て、いい氣持におさまってゐたのであらう。これが大和平野に於ける社寺建築の内、鎌倉時代のものの木鼻に鼻繰式のが流行した一原因かも知れない。一例を擧げれば唐招提寺鼓樓の如く、純和様建築に純天竺様木鼻をつけてゐる。大和では唐様はまるで流行しなかった。

併し他所では決してこんな事はない。木鼻といへば殆どきまって唐様であった。だから側面中央に稜線即ち鎬があった。其鎬は室町頃からそろそろ發達をしはじめ、鳥の嘴の様、其一部が尖り出して孔があいたり、さう迄ならないでも著しく特殊の型式をとりだした。これが工匠の間に「鞏」又は「獅嚙」として知られ、以て今日に及んでゐる。

木鼻には動物・植物・雲・浪等の種類があるが、當初は左程變ったものはなく、大概一定をしてゐた。併し間もなくいろいろのものができだし、大體に於いて天竺様は動物、唐様は植物又は天然物に變って來た様である。然らば天竺様は何になったかといふに、最初は「象」である。この種の木鼻は、ほんの僅かのことで直に象化させ得たのであった。其一度象化するや、非常な勢ひで進歩をとげ、室町末には既に圓味を帶び、江戸に入るに及んで眼尻が細く長くなり皺もでき、耳殼は大なる團扇の如く、笑ってゐる様な特異な面貌を呈するに至った(圖三)。

象の他に數は遙に少ないが「獅子」もでき、稀に「猪」や「龍」もあった。獅子の次には「獏」(便化した)がある。獅子は柱からまっすぐに出ないで、頭部を少し曲げて一對の前肢と共に刻まれたのがあるが、これ等はまだいい方であり、時には向拜虹梁鼻の獅子が、右のは左に、左のは右に、互に向き合ひ笑って居る様な、とても不思議なのが喜ばれる様になった。さうしてこの様な新しいのは、眼に硝子が入れてある。これがどうも白い眼をだしてゐるやうに見え、いやな感じがする。敢て獅子ばかりではない、象も同様である。

天竺様のグリグリ式木鼻が、しろ眼をだして笑ってゐる象や獅子になったといっても信用はしまいが、順序に並べてみると誰人も首肯せざるを得まい。そこで今度は唐様の方はどうかといふに、これは植物化して若葉になったり、花や葉等をつけた枝となったり、或は雲や波をほったり、その様なものに變ってきた。これも亦年代順に唐様の木鼻を並べてみると、どうしても其變化を否定し得ないのである。

斯様に書くと其變化は洵に明白で、一見直にこれはどれから變ってきたかといふ事が判る筈であるが、事實は決して左様に簡單ではなく、はっきりしない曖昧なものもある。さうして様式が打破されてからは、木鼻も全く變化して了ひ、唐様も天竺様もあったものではなくなってきたのである。木鼻様式の變遷は先づざっととこんなもの。

そこで先づ兩妻大瓶束上の分(一七)をみる。この木鼻は餘り類例のない形をしてゐるが、これは單に一方へ出てゐるだけで、後方即ち內部には錫杖彫をした大虹梁があり、其中央から吊鐘が下がってゐるのである。此外に出てゐる彫刻がしてある部分は肘木の先だから、普通の肘木の樣にしておけばいいのに、態態かうしてあるのは、全く裝飾をしたに過ぎないので、即ち「繪樣肘木」である。さうではあるが、先の彫刻だけを考へると、それは木鼻に違ひないのである。

そこでこの木鼻は植物性のものか或は動物的のところもあるかといふに、ただぼんやり見てゐると若葉式の飾りで、つまり植物性裝飾であるが、又見樣によっては上方に卷き上ってゐる蝸文は鼻、下方にあって前方に突出し、少しく上方に反ってゐるのは下顎で、其間のは舌、反對の方向に卷きかけてゐて、さうして幅は割合に廣く中央に鎬のあるのは牙にとれる。さうするとこの木鼻は「象化しかけた若葉」とも「植物化しかけた象」とも、何れにでもとれる。

四本柱に屬するものには、頭貫・肘木・實肘木の鼻に何れも彫刻があり、此等を木鼻として論じだすと隨分長くなるから略しておくが、このうち肘木の鼻は牙迄生えてゐる象であることを注意しておく。さうしてこの象は此種としては寧ろ古い形、原始的象鼻である。この時代なら象は笑ひかけていいのだが、他のものとの調和を考へてかうしたのであらう。小さいところだが、こんな事にまで此鐘樓の設計者の注意が行屆いてゐるのに感心させられた。吊鐘には元和八年の銘がある。

二、阿彌陀堂(一七八—一八四)

鐘樓の筋向ひ、東方に少し引込んで西面した單層入母屋造本瓦葺の建物が即此。正面に一間の向拜がついてゐるが、これは臨時にあとからつけたもので、假設物同樣に取扱ってよろしい(一七八)。

今我國の建築歷史を按ずるに、平安後期に於いて重要なる出來事が二つあった。一は邸宅建築即ち寢殿造の大成で、他は阿彌陀堂の建立であった。此時代の貴族は二世安樂を祈願せんがため競ふて大寺を建立した。道長の法成寺、頼道の平等院を初め、今の岡崎公園附近にあった六勝寺(法勝、尊勝、圓勝、最勝、成勝、延勝寺。何れも「勝」の字がつくから六勝寺といふ。)の如きは其例で、或は邸內に阿彌陀堂を建てたり、又別莊を寺としたりした爲、邸宅建築が寺院建築に影響を及ぼす事も多くなったのである。

阿彌陀堂は當代の貴顯紳士が財力を惜まずに建立し、あらゆる美術工藝の粹を盡して堂內を裝飾し、唯僅に床のみを素地のままに殘した。其代表的遺物は宇治の平等院鳳凰堂中堂で、現世に於いて來世の極樂淨土を現はすべく試みたのであった。其今日に存するもので、京都府所在の分を擧ぐれば

一、往生極樂院本堂。桁行三間梁間四間單層入母屋造妻入。特殊の天井あり。(大原三千院本堂の事)
二、平等院鳳凰堂。中堂に翼廊及び尾廊附屬す。
三、法界寺阿彌陀堂。方五間單層寶形造。周圍椽付。(此堂鎌倉時代に建立との說がある。確かな文獻があるといふ。併し其樣式手法は純然たる平安後期故、今はここに入れておく。)
四、淨瑠璃寺本堂。桁行十一間梁間四間單層四注造。九體の阿彌陀如來を安置するが故に普通名稱を九體寺といふ。
五、白水阿彌陀堂。福嶋縣岩城郡內鄉村。方三間單層寶形造。推定復原の修理を經。
六、阿彌陀堂。宮城縣伊具郡西根村高藏寺。方三間單層寶形造。
七、富貴寺大堂。大分縣西國東郡出染村蕗。桁行三間梁間四間寶形造。推定復原の修理を經。
八、中尊寺金色堂。方三間單層寶形造。(鞘堂方五間鎌倉時代)

等である。このうち最後の分だけが純粹の阿彌陀堂ではないが、とにかく八棟殘ってゐる。其善美を盡せるものは二・八、

正方形の平面のが三・五・六・八、前後又は左右に稍や長いのが一・二・七、非常に横長く、京都の三十三間堂の次位の割合なのが四の淨瑠璃寺本堂である。この最後の分は特例だから別とすると、一・二・七等は正方形に近いのだから、眞四角の内に入れておくと、この種の例が大多數といふことになる。當時全部でいくつ位あつたか知らないが、相當に多かつたのであらう。

其以降正方形のものがあつたやうだが、金戒光明寺のものも亦さうである。正確にいふと正面柱眞眞五十二尺、側面四十八尺二寸五分、だから三尺七寸五分だけ奥行がつまつてゐるが、まあ大概似たところだから、正方形とみても大差はない。本堂から少し離れてゐたので、先年の火災を免れたのは幸であつた。慶長十年豐臣秀頼が方廣寺造營の殘材を以て再建したものださうで、現今此寺にある最古の建築物である。初め南面してゐたのを延寶六年現在の様に西面させたといふ。天井の龍は黒谷の僧專譽傳故の筆ださうである(一八)。

内部は現在然るべく壁を敷き、坐式に適する様にしてあるが、石壇上に建つてゐる建築だから、恐らく當初は全體瓦を四半に敷いたものの如く、北側出入口の部分と、後側即ち東側須彌壇裏の凸字形のところに其證據がある。今床にはりつめてある板や疊を取りさつて見たら、或は其下に全部瓦を敷きつめてあつた跡があるかも知れない。須彌壇の下の方も床の敷板の下に入つて隱されてゐる始末である。現在のままでは須彌壇の形はまとまつてゐない(一九)。

正面中の間は兩折兩開棧唐戸、其兩脇と他三面中の間には兩開棧唐戸を、何れも上下共木製藥座に吊り込み、柱間の他の部分は白壁で、ただ正面兩端の間のみは花頭窓にしてある。礎石上には礎盤があり、柱上下には粽を附し、頭貫及び臺輪鼻には繰形あり、科栱出三科、科栱間蓑束、隅木は地隅木も飛簷隅木も先端に繪様なく、後者は全然下方に傾いてゐない。妻飾は虹梁大瓶束で、そこには天竺様式の科も用ひてある。

此は建築としては如何なる種類に屬するかといふと、主として和様と唐様との混淆であり、極僅かではあるが、天竺様も入つてゐるのである。今判り易からしむる爲一つ書きにしてみると

唐様。

一、礎石上と柱下との間に礎盤のある事。
二、柱上下に粽のある事。
三、花頭窓。
四、木製藥座に吊込める棧唐戸。
五、妻飾の「虹梁大瓶束」。
六、建物は石壇上に建ち内部外陣化粧屋根裏内陣鏡天井、床瓦四半敷なる事。
七、須彌壇の型式。

和様。

一、科栱の型式。
二、其科栱を詰組とせず、科栱間に蓑束を用ひてある事。
三、化粧隅木の型式。
四、猪目懸魚。

天竺様。

一、兩妻に用ひてある科の尻に一種の繰形ある事。

和様と唐様とを折衷混淆して造った最古の建築として最も有名なものは河内の觀心寺本堂であるが、左程有名でないものにはいくらもある。もっと古いのでは例へば東大寺三月堂禮堂で、和様に天竺様の木鼻をつけたものであり、又海龍王寺經藏は和様の柱に唐様の肘木に天竺様の木鼻がつけてある。併し鎌倉以降は漸く折衷式は發達し、桃山に入りて進歩の頂點に達したが、この時代になると様式は殆んど打破され、かかる折衷建築はいくらでもある。さうして今となっては、右に一つ書きをした様に、一見した位では判別ができぬ位に渾然融合して了ったのである。

遠慮なしに批評すると、外部でさう感心のできない點は蓑束の形と隅柱の上、後者は頭貫が少しばかり幅が狹いのと、夫に比べて臺輪が厚過るから、隅柱の上にできる丁字形が形がよくない。序にもう一つ言へば天竺様系統の繰形付の科の繰形の形に文句があるが、これは高い所だし、屋根へ上らなければ下からは見えないのだから、殆んど判らないので大した問題ではない。大瓶束はよく時代を現はして居り、懸魚は謂はゆる猪目懸魚で、これは大變に形がよろしい。

軸部とか妻飾とか、その邊のことでいふのはこの位であるが、此堂には鬼瓦で面白いのが相當に上ってゐるから、夫等を試みに記してみる。鬼瓦のうちには古いのでは室町のも殘ってゐる。様式からも室町と推定はできるが、銘文が刻みつけてあるから確實である。次に示す四例は何れも「ハリカワ」(鬼面のつけてある平たい臺の事)の横に文字が錐か釘の様なものの先でほってある。

一、大夫四郎右衞門天文六年八月廿六日

二、切生善玖天文六年八月廿六日

三、天文六年八月廿八日智芳(花押)

右三個は何れも室町時代のもので、一は額上に「劍」、二は「小槌」、三は此頃迄相當に幅をきかせた「電髪」の様に、頭髪に波を打たせて五つに分れて額を覆ふてゐる。

四、寛永元年六月吉日

西村喜衞門

とあるのは額に「卷子」を頂いてゐる。無銘の鬼では額上に「竭磨杵」・「輪寶」・「寶珠」(火焔あり、寶珠内に梵字「ウン」)・「桃」(桃實と葉二枚)等をつけてゐる。此等のうち初めの二つは同じく室町とみられ、後の二つは桃山以降らしい、併し桃をつけたのは、ことによると室町へ入るかも知れない。

内外部素木造であるが、内部内陣正面のつき當り、即ち本尊の後のところだけ、特に極彩色を施し美しく飾ってある(七一九—一八一)。内陣は三間だから柱は四本立ち、柱間に一本づつ間科束があるが、其間科束は繪様肘木を頂き、其繪様肘木で天井長押を支へ、其上に天井廻縁がのり、其上は前記した龍の繪をかいた鏡天井になってゐるのである。ところがこの天井長押には、線條文が描いてあるが、其柱中心に當る所には輪寶を、間科束心に當る所には梵字が書いてある。梵字は中央のもの(阿彌陀如來のま後ろだから、下からでは到底見えないが)「キリク」、南「サ」北「サク」(一八〇一)で、これ即ち彌陀三尊(中央阿彌陀如來、左觀音、右勢至菩薩、併せて彌陀三尊といふ)の種子である。つまり我我でいへば門口へ表札を出してゐる様なもので、正面中央の大きな座像、寺では惠心僧都最終の作で、其一代彫刻に使用した全部の器具を體内に納めてあると傳へてゐる上品上生の印を結んでゐるのが阿彌陀如來だが、其表札は背光と天蓋とで隱されてゐるから、餘程の手段方法を講じないと下からでは見えない。本尊に比べると脇侍二菩薩は大變に小